群馬県前橋市

荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡

発掘調査報告書

1990

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

3 号住居跡から出土した銅印

序　　文

前橋市は名峰赤城山にいだかれ、坂東太郎で名高い利根川が流れる山柴水明の地であります。

赤城山南麓、前橋台地上には旧石器時代からの人々の生活の営みの跡が見出され、特に古墳時代には大室古墳群、広瀬朝倉古墳群、総社古墳群をはじめ数多くの古墳が作られ、東国の中心地として栄えてきました。

荒子小学校校庭遺跡は荒子小学校校庭拡張に伴う発掘調査である。荒子小学校周辺では昭和27年に校庭より住居跡が発見されており、北東300ｍの荒砥上西原遺跡は勢多の郡衙跡とも考えられています。

本遺跡から発見された銅印「識」も上西原遺跡との係りが考えられています。

本報告書を刊行するにあたり援助、協力をいただいた関係各課に厚くお礼を申し上げます。

本遺跡の一部が関係各課の御尽力により校庭の緑地帯に保存され、活用されますことは文化財保護においてこの上ない喜びであります。

また、本発掘調査に際し、山武考古学研究所・所長をはじめ、調査担当者・作業員に感謝申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため寄与できれば幸いと存じます。

平成２年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　二　瓶　益　巳

例　　言

1．この報告書は、前橋市立荒子小学校校舎増設地内（前橋市荒子町大字川籠替戸字大久保地内）における埋蔵文化財発掘調査に関するものである。

2．本遺跡の名称は、昭和38・39年に群馬大学によって発掘調査された「荒子小学校校庭遺跡」と同じ台地上に位置する調査区のため、同一名称を用いた。また調査期間の都合上、便宜的にⅡ・Ⅲの名称を付したが、本書では資料を一括して掲載している。

3．現地調査は前橋市教育委員会の指導のもとに前橋市埋蔵文化財発掘調査団を組織し、山武考古学研究所が担当した。

4．本遺跡の現地調査は「荒子小学校校庭Ⅱ遺跡」が平成元年２月20日から同年３月28日、「荒子小学校校庭Ⅲ遺跡」が平成元年６月22日から同年８月23日まで行った。

5．本書の執筆分担は以下の通りである。

Ⅰ	井野誠一	（前橋市教育委員会　文化財保護課　主任）
Ⅱ・Ⅲ	湯原勝美・安藤杜夫	（山武考古学研究所　所員）
Ⅳ	石塚三夫	（　〃　）
Ⅴ	千田幸生・武部喜充	（　〃　）

9の(1)は国立歴史民俗博物館情報資料研究部の永嶋正春氏に依頼し玉稿を賜った。

Ⅵ	千田幸生・武部喜充	

6．墨書土器の赤外線テレビカメラによる撮影及び判読、線刻紡錘車の判読は国立歴史民俗博物館歴史研究部の平川南氏にお願いした。

7．３号住居跡出土の銅印の文字鑑定は文化庁文化財専門審議委員木内武男氏にお願いした。

8．本書の編集は千田・武部が行い、山武考古学研究所所長平岡和夫が総括した。

9．発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の方々に御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会　前沢和之氏、群馬県県史編さん室　松田猛氏。

凡　　例

1．第１図は国土地理院発行２万５千分の１「大胡」を使用した。

2．スクリーントーンは灰釉陶器の釉部分、黒色処理土器を示す。

3．遺物断面の黒塗りは還元焔焼成による須恵器を示す。

4．挿図中のドットは●で土器、▲で鉄器、■で石製品を示す。

5．遺物の写真横に付した番号は挿図中の番号と一致し、写真を割愛した遺物の番号は欠番となっている。

目　　次

本　文　目　次

巻頭カラー（3号住居跡から出土した銅印）
序　　文
例　　言
凡　　例

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　調査の組織 …… 2
Ⅲ　調査の経過 …… 2
Ⅳ　遺跡の位置と環境 …… 5
Ⅴ　検出された遺構と遺物 …… 9
　1　竪穴住居跡 …… 9
　2　掘立柱建物跡 …… 57
　3　井戸跡 …… 61
　4　土坑 …… 65
　5　道路状遺構 …… 69
　6　溝状遺構 …… 71
　7　遺構外出土の遺物 …… 71
　8　墨書土器・線刻紡錘車について …… 72
　9　銅印について …… 73
　　(1)　出土銅印の蛍光X線分析結果 …… 73
　　(2)　群馬県内出土銅印 …… 74
Ⅵ　まとめ …… 75
　1　住居跡出土の土器について …… 75
　2　集落の変遷について …… 78

挿　図　目　次

第１図　荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡と周辺の遺跡 …… 4
（２万５千分の１地形図）
第２図　荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡の位置 …… 6
（千分の１地形図）
第３図　遺構配置図（折り込み） …… 7
第４図　１号住居跡 …… 9
第５図　１号住居跡の遺物 …… 9
第６図　２号住居跡とカマド …… 10
第７図　２号住居跡の遺物 …… 12
第８図　３号住居跡 …… 13
第９図　３号住居跡の遺物(1) …… 14
第10図　３号住居跡のカマド …… 15
第11図　３号住居跡の遺物(2) …… 16
第12図　４号住居跡 …… 18
第13図　４号住居跡の遺物 …… 19
第14図　５号住居跡とカマド …… 20
第15図　５号住居跡の遺物 …… 21
第16図　６号住居跡 …… 22
第17図　６号住居跡の遺物 …… 22
第18図　７号住居跡の遺物 …… 23
第19図　７号住居跡とカマド …… 24
第20図　８号住居跡とカマド …… 25
第21図　８号住居跡の遺物 …… 26
第22図　９号住居跡 …… 26
第23図　９号住居跡の遺物 …… 26
第24図　10号住居跡の遺物 …… 27
第25図　10号住居跡とカマド …… 28
第26図　11号住居跡 …… 29
第27図　11号住居跡の遺物 …… 29
第28図　12号住居跡 …… 30
第29図　12号住居跡の遺物 …… 30
第30図　13号住居跡 …… 31
第31図　13号住居跡の遺物 …… 31
第32図　14号住居跡 …… 32
第33図　14号住居跡のカマド …… 33
第34図　14号住居跡の遺物 …… 34
第35図　15号住居跡とカマド …… 35
第36図　15号住居跡の遺物 …… 36
第37図　16号住居跡 …… 37
第38図　17号住居跡 …… 38
第39図　17号住居跡の遺物 …… 38
第40図　18号住居跡の遺物 …… 38
第41図　18号住居跡とカマド …… 39
第42図　19号住居跡 …… 40
第43図　19号住居跡のカマド …… 41
第44図　19号住居跡の遺物 …… 42
第45図　20号住居跡の遺物(1) …… 42
第46図　20号住居跡 …… 43
第47図　20号住居跡のカマド …… 44
第48図　20号住居跡の遺物(2) …… 45
第49図　20号住居跡の遺物(3) …… 46
第50図　21号住居跡の遺物 …… 47
第51図　21号住居跡 …… 48
第52図　21号住居跡のカマド …… 49
第53図　22号住居跡とカマド …… 50
第54図　23号住居跡とカマド …… 51
第55図　23号住居跡の遺物 …… 52
第56図　24号住居跡 …… 53
第57図　24号住居跡の遺物 …… 54
第58図　25号住居跡 …… 54
第59図　25号住居跡の遺物 …… 55
第60図　26号住居跡とカマド …… 56
第61図　26号住居跡の遺物 …… 56
第62図　１号掘立柱建物跡 …… 57
第63図　２号掘立柱建物跡 …… 58
第64図　３号掘立柱建物跡 …… 59
第65図　４号掘立柱建物跡 …… 60
第66図　１・２・４・５号井戸 …… 62
第67図　３号井戸 …… 63
第68図　井戸の遺物 …… 64
第69図　土坑(1) …… 66
第70図　土坑(2) …… 67
第71図　土坑(3) …… 68
第72図　土坑の遺物 …… 69
第73図　１号道路状遺構、１・２号溝状遺構 …… 70
第74図　遺構外出土の遺物 …… 71
第75図　住居跡出土土器変遷図(1) …… 76
第76図　住居跡出土土器変遷図(2) …… 77
第77図　住居跡出土土器変遷図(3) …… 78
第78図　集落変遷図 …… 78

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（赤城山を望む）
図版２－１　荒子小学校校庭Ⅲ遺跡空中撮影（左がⅢ遺跡、右が荒子小学校）
２　荒子小学校校庭Ⅲ遺跡　全景（北から望む）
図版３－１　荒子小学校校庭Ⅲ遺跡北側（南から望む）
２　荒子小学校校庭Ⅱ遺跡　全景（南から望む）
図版４－１　１号住居跡
２　２号住居跡
３　２号住居跡カマド
図版５－１　３号住居跡
２　３号住居跡出土銅印(1)
３　３号住居跡出土銅印(2)
４　３号住居跡出土銅印(3)
５　３号住居跡貯蔵穴
図版６－１　４号住居跡
２　５号住居跡
３　６号住居跡
図版７－１　右上７号住居跡左下８号住居跡
２　９号住居跡
３　10号住居跡
図版８－１　11号住居跡
２　12号住居跡
３　13号住居跡
図版９－１　14号住居跡
２　15号住居跡(1)
３　15号住居跡(2)
図版10－１　16号住居跡
２　左下17号住居跡左上18号住居跡
３　19号住居跡
図版11－１　20号住居跡
２　21号住居跡
３　22号住居跡
図版12－１　23号住居跡
２　23号住居跡出土遺物(1)
３　23号住居跡出土遺物(2)
４　24号住居跡
図版13－１　25号住居跡
２　26号住居跡
３　１号掘立柱建物跡
図版14－１　２号掘立柱建物跡
２　３号掘立柱建物跡
３　４号掘立柱建物跡
図版15－１　14号土坑
２　22号土坑
３　24号土坑
４　27号土坑
５　１号井戸
６　２号井戸
図版16－１　３号井戸
２　１号道路状遺構北側
３　１号道路状遺構南側
４　２号溝状遺構
図版17　２・３号住居跡出土遺物
図版18　４・５・６・７・８・10号住居跡出土遺物
図版19　13・14・15・18・19号住居跡出土遺物
図版20　20・21・23・25・26号住居跡出土遺物
図版21　墨書土器
図版22　鉄・石製品・古銭

表　目　次

表1　周辺の遺跡一覧表 …… 5
表2　1号住居跡出土遺物観察表 …… 9
表3　2号住居跡出土遺物観察表 …… 11
表4　3号住居跡出土遺物観察表 …… 17
表5　4号住居跡出土遺物観察表 …… 18
表6　5号住居跡出土遺物観察表 …… 21
表7　6号住居跡出土遺物観察表 …… 22
表8　7号住居跡出土遺物観察表 …… 23
表9　8号住居跡出土遺物観察表 …… 25
表10　9号住居跡出土遺物観察表 …… 26
表11　10号住居跡出土遺物観察表 …… 27
表12　11号住居跡出土遺物観察表 …… 29
表13　12号住居跡出土遺物観察表 …… 30
表14　13号住居跡出土遺物観察表 …… 30
表15　14号住居跡出土遺物観察表 …… 32
表16　15号住居跡出土遺物観察表 …… 37
表17　17号住居跡出土遺物観察表 …… 38
表18　18号住居跡出土遺物観察表 …… 40
表19　19号住居跡出土遺物観察表 …… 41
表20　20号住居跡出土遺物観察表 (1) … 44
表21　20号住居跡出土遺物観察表 (2) … 45
表22　20号住居跡出土遺物観察表 (3) … 46
表23　21号住居跡出土遺物観察表 …… 48
表24　23号住居跡出土遺物観察表 (1) … 50
表25　23号住居跡出土遺物観察表 (2) … 53
表26　24号住居跡出土遺物観察表 …… 54
表27　25号住居跡出土遺物観察表 …… 55
表28　26号住居跡出土遺物観察表 …… 56
表29　井戸跡出土遺物観察表 …… 61
表30　土坑一覧表 …… 65
表31　土坑出土遺物観察表 …… 69
表32　遺構外出土遺物観察表 …… 71
表33　墨書土器・線刻紡錘車一覧表 …… 72
表34　群馬県内出土銅印一覧表 …… 76

Ⅰ　調査に至る経緯

昭和62年11月

同月11日付で総務課より埋蔵文化財の表面調査依頼が提出される。

同月24日、総務課あてに、周知の遺跡地であり、事前調査が必要である旨回答する。

また、文化財調査費用について回答を行う。

昭和63年４月

同月13日付で前橋市長藤嶋清多氏より、土地収用法第18条第２項第５号の規定に基づく意見についての照会があり、18日付で発掘調査が必要な旨回答する。

昭和63年10月

同月11日付で前橋市教育委員会教育長岡本信正氏より、埋蔵文化財発掘調査についての依頼が提出される。

同月14日付で前橋市埋蔵文化財発掘調査団に発掘調査依頼を行う。

平成元年１月

同月14日付で調査実施が決まり、山武考古学研究所と調査の委託契約を締結する。

買収の都合で遺跡地の北半を荒子小学校校庭Ⅱ遺跡とし、昭和63年度に調査を行い、南半を荒子小学校校庭Ⅲ遺跡とし、平成元年度に調査を実施することとする。

調査は３月27日まで実施され、奈良・平安時代の住居跡12軒、掘立柱建物跡４棟、溝１条、井戸３基、土坑13基、道跡１が検出される。遺物として３号住居跡より銅印「識」が出土。

平成元年４月

同月18日付で、埋蔵文化財発掘調査（南半部）の依頼が提出される。

同月19日付で、前橋市埋蔵文化財発掘調査団に調査を依頼する。

平成元年６月

同月14日付で、前橋市長藤嶋清多と前橋市埋蔵文化財発掘調査団団長二瓶益巳との間に、埋蔵文化財発掘調査委託に関する覚書を締結する。

同月16日に調査について、三者契約による委託契約とすることが決まり、19日付で、調査団を立合者とし、前橋市長藤嶋清多と山武考古学研究所所長平岡和夫の間で委託契約が締結。

調査は８月23日まで実施され、奈良・平安時代の住居跡14軒、溝１条、井戸２基、土坑20基、道跡１が検出される。

なお、遺跡のうち住居跡１軒と掘立柱建物跡１棟が検出地を緑地帯として保存・活用がなされることになった。

（注、荒子小学校校庭遺跡は、昭和27年に住居跡１軒、昭和38年に住居跡５軒が調査検出されている。）

Ⅱ　調査の組織

団　　長　　二瓶　益巳（前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長）
調査指導　　井野　誠一（前橋市教育委員会　社会教育課文化財保護係主任）
　　平岡　和夫（山武考古学研究所　所長）
調査担当　　安藤　杜夫（山武考古学研究所　資料室係長）
　　湯原　勝美（山武考古学研究所　調査研究員）
　　伊庭　彰一（山武考古学研究所　調査研究員）

発掘参加者

相京清子、朝生タカ、阿部シゲ子、飯島キクエ、飯島民弥、飯島実、石井百々子、石関うめ子、石関コズエ、石田いつ、伊藤順子、井野芳雄、江原信二、大沢やよい、大関郁恵、岡田誉富、岡田ナオ、小沼あき、小渕丑子、小保方豊五郎、片岡美和子、勝田キミエ、鹿沼かほる、木島久子、木村かく乃、木村源次郎、木村玉代、木村つや子、木村はる子、久保田海一郎、高坂とよ子、高坂なみ、高坂花子、高坂やすの、小屋たみ子、坂牧光枝、新保永二、新保勝太郎、新保隆、新保富恵、新保昌子、新保まつ、新保松乃、新保幸永、須藤とくの、須藤なお子、高橋きしの、田中善四郎、鳥山初子、内藤たか、根本時子、羽鳥イソヨ、原島なか、福島逸司、藤崎徳恵、藤塚千恵子、星野ふじ、堀越うめ子、堀越くに、堀越豊、本間富子、松永シマ子、摩庭幸恵、宮川いち子、三宅美知子、山口里江、山田由美子、横沢信子、吉田やす江

Ⅲ　調査の経過

調査期間は荒子小学校校庭Ⅱ遺跡が平成元年２月20日から同年３月28日まで、同Ⅲ遺跡が平成元年６月22日から同年８月23日までである。

【荒子小学校校庭Ⅱ遺跡】

２月20日～３月４日　調査区内は桑畑として使用されていたため抜根作業から開始し、その後は表土除去作業となった。表土は厚さが30～50㎝で、耕作による撹乱がローム層上面まで達している箇所もあった。

３月１日～３月６日　遺構確認面を助連で平滑にし、確認作業を行った。北側にピットを多数確認したが、桑の抜根の可能性が強い。北調査区の中央に重複したものも含めて竪穴住居跡を９軒確認した。また南側に掘立柱建物跡を２棟確認した。南調査区からは土坑状の落ち込みとピット群を確認した。

３月８日～３月10日　３～６号住居跡の掘下げを開始。また、土坑状の落ち込みを半截しながら調査を進めた。

3月13日～17日　3号住居跡の西壁際から床着の状態で銅製の印が出土した。遺存状態はすこぶる良好である。南調査区の土坑状の落ち込みは3基が掘り込みの深い井戸跡となり、1基は大きな風倒木痕と判明した。15日から掘立柱建物跡の調査を開始した。桑の抜根とも重なって判別しにくかったが、3棟の掘立柱建物跡を検出した。

3月18日～22日　竪穴住居跡は12軒確認され、いずれも20日までにカマドを残した状態で掘り下げを終了した。また、21日からは1・2号溝状遺構の調査を開始した。重複している住居跡が何軒かあり、そのうちの7・8号住居跡の重複関係は土層断面から8号住居跡の方が新しいことが判明した。共にカマドは東壁に付設されている。

3月23日　本日は荒子小学校の6年生（約90名）を対象として現地説明会を実施した。作業は住居跡のカマド調査を中心に行った。

3月24日～27日　3号井戸は上屋を有する井戸跡と判明した。住居跡のカマド調査は27日で全て終了した。また、27日から全体測量図の作成を開始した。

3月28日　遺跡の全体測量図を作成し、遺跡全景撮影をして全ての調査を終了した。

【荒子小学校校庭Ⅲ遺跡】

6月21日　調査前の現況写真撮影を行い、調査区域を確認し、安全対策として調査区境界沿いにロープを張った。

6月22日～7月1日　Ⅱ遺跡と同様に本遺跡も桑畑として使用されていたため抜根作業から開始し、その後は表土除去作業を行った。前回のⅡ遺跡よりも表土が厚く、なかでも調査区南側は谷状に深くなっており、表土が1m以上も堆積していた。

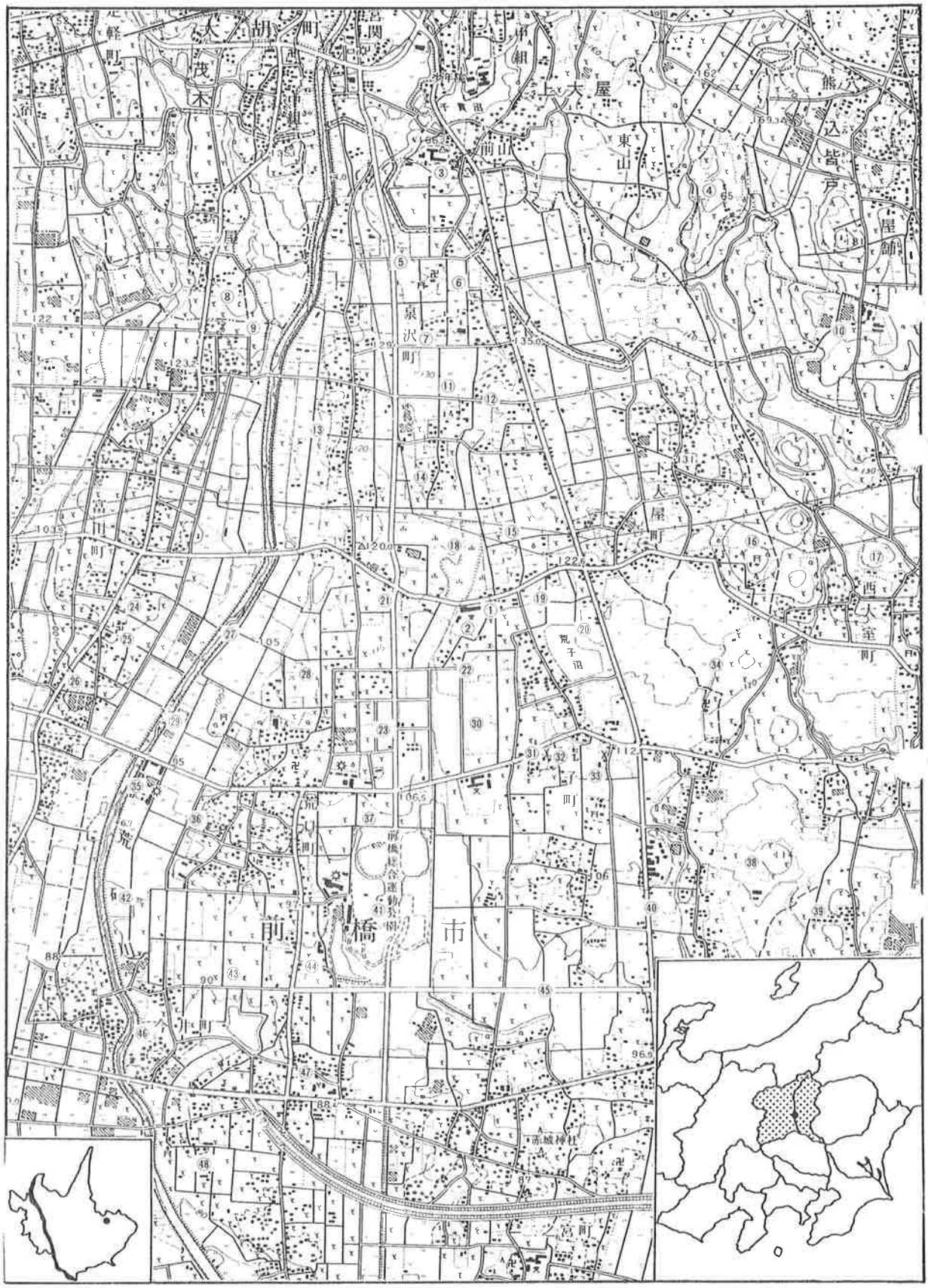
7月3日～18日　7月初旬から雨天の日が多く表土除去作業は予定していたよりも手間取った。結局、表土除去作業が終了したのは18日となった。また、表土除去と併行して遺構確認作業を行い、その結果、13軒の竪穴住居跡と溝状遺構2条と多数の土坑状の落ち込みを確認した。

7月19日～29日　確認した遺構の配置図を作成し、溝状遺構と16・19・25号住居跡の掘り下げを開始した。

7月31日～8月5日　竪穴住居跡の調査を中心に作業を進めた。住居跡の重複している所は3箇所で合計7軒である。

8月7日～19日　住居跡のカマド調査と土坑状の落ち込みの掘り下げを中心に作業を進めた。

8月21日～23日　調査区南側から最後に確認した26号住居跡を掘り下げ、カマド調査を行った。23日午前中までに遺跡全体測量図を作成し、遺跡全景撮影をして全ての調査を終了した。



第１図　荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡と周辺の遺跡

Ⅳ　遺跡の位置と環境

荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡は赤城山麓にあたる前橋市荒子町川籠替戸に所在し、市街地から東へ約7.5kmの位置にある。本遺跡の立地する赤城山南麓の基盤層は火山泥流堆積物によって形成されており、周辺地域の地表面は下部ローム以上を堆積する洪積台地と、ロームの二次堆積である砂壌土性の微高地、及び宮川によって形成された沖積地とで成り立っている。宮川は旧利根川の第三次支川で、荒砥川に合流した後に旧利根川筋の桃ノ木川から現利根川へ流下する。現在では、水田灌漑のために中流域で「深っ堀」と称する用水に接続されて他地域から水補給が行われている。

周辺では先土器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が発掘調査されており、ここで時代別に本地域の遺跡分布を概観してみたい。

表１　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要
1	荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡	奈良・平安集落、掘立柱建物跡
2	荒子小学校校庭遺跡	古墳後期集落、須恵器窯跡
3	谷津遺跡	縄文集落、古墳群、奈良・平安集落
4	上横俵古墳群	
5	山崎遺跡	縄文
6	寺東遺跡	古墳中期集落・溝
7	寺前遺跡	古墳中期集落、井戸、溝
8	三屋遺跡	先土器
9	荒砥355号墳	前方後円墳
10	七ツ石遺跡	弥生後期集落、古墳群
11	東前田北遺跡	古墳中期集落、中世塚、溝
12	東原西遺跡	古墳中期集落、溝
13	丸山遺跡	縄文陥し穴、古墳・奈良・平安集落
14	新山遺跡	古墳群、方形周溝墓、溝
15	上西原遺跡	基壇を有する柱穴列と溝。奈良・平安集落
16	伊勢山古墳群	前方後円墳、円墳十数基
17	中島古墳群	
18	前山・前山Ⅱ遺跡	平安住居
19	川籠皆戸遺跡	奈良・平安住居
20	堤東遺跡	奈良集落
21	柳久保遺跡	古墳集落、奈良集落
22	大久保遺跡	奈良・平安集落
23	柳久保遺跡群	先土器、縄文集落、古墳群、奈良・平安集落
24	東原古墳群	
25	東原遺跡	縄文前期住居、古墳後期集落、奈良・平安住居
26	宮下遺跡	弥生後期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落
27	荒砥諏訪西遺跡	古墳前期、後期集落、奈良・平安住居、C軽石に係わる畠、B軽石下水田跡
28	荒砥諏訪遺跡	縄文中期包含層、古墳時代周溝墓
29	荒砥宮田遺跡	縄文前期住居、古墳前期・中期・後期集落、奈良・平安集落、B軽石下水田跡
30	頭無遺跡	弥生中期住居、古墳後期集落、平安集落
31	荒砥下押切遺跡	古墳後期集落、奈良・平安集落
32	荒砥中屋敷遺跡	古墳後期集落、平安集落
33	荒砥保育所遺跡	古墳時代後期住居
34	阿久山古墳群	
35	荒砥前田遺跡	B軽石下水田・荒砥川の洪水下の水田跡
36	荒口前原遺跡	弥生中期・後期初頭住居、平安住居
37	鶴谷遺跡群	縄文前期散布地、古墳中期・後期集落、奈良・平安集落
38	立野古墳群	
39	丸山古墳群	
40	荒砥荒子遺跡	古墳中期の柵を伴う住居、後期集落、奈良・平安集落
41	鶴谷遺跡群	縄文前期散布地、古墳中期・後期集落、奈良・平安集落
42	荒砥北原遺跡	縄文前期・中期の住居、縄文草創期散布地、奈良・平安集落
43	荒砥北三木堂遺跡	先土器・縄文草創期散布地、弥生住居、古墳前期・後期集落
44	荒砥大日塚遺跡	古墳後期集落、奈良・平安集落
45	荒砥上之坊遺跡	縄文前期住居、弥生後期住居、古墳前期集落、奈良・平安集落、畠
46	北三木堂古墳群	
47	大日遺跡群	古墳後期・奈良・平安集落・水田跡
48	今井神社古墳群	前方後円墳、円墳27基

先土器時代は、柳久保遺跡・三屋遺跡・北三木堂遺跡で、尖頭器などが出土している。今後の発掘調査によって遺跡数が増えると考えられる。

縄文時代は、草創期が荒砥北原遺跡・北三木堂遺跡、早期が柳久保遺跡・荒砥北原遺跡、前期が下鶴谷遺跡・荒砥宮田遺跡・東原遺跡・鶴谷遺跡、中期が荒砥諏訪遺跡・荒砥北原遺跡、後期が島原遺跡・荒砥上川久保遺跡が知られている。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

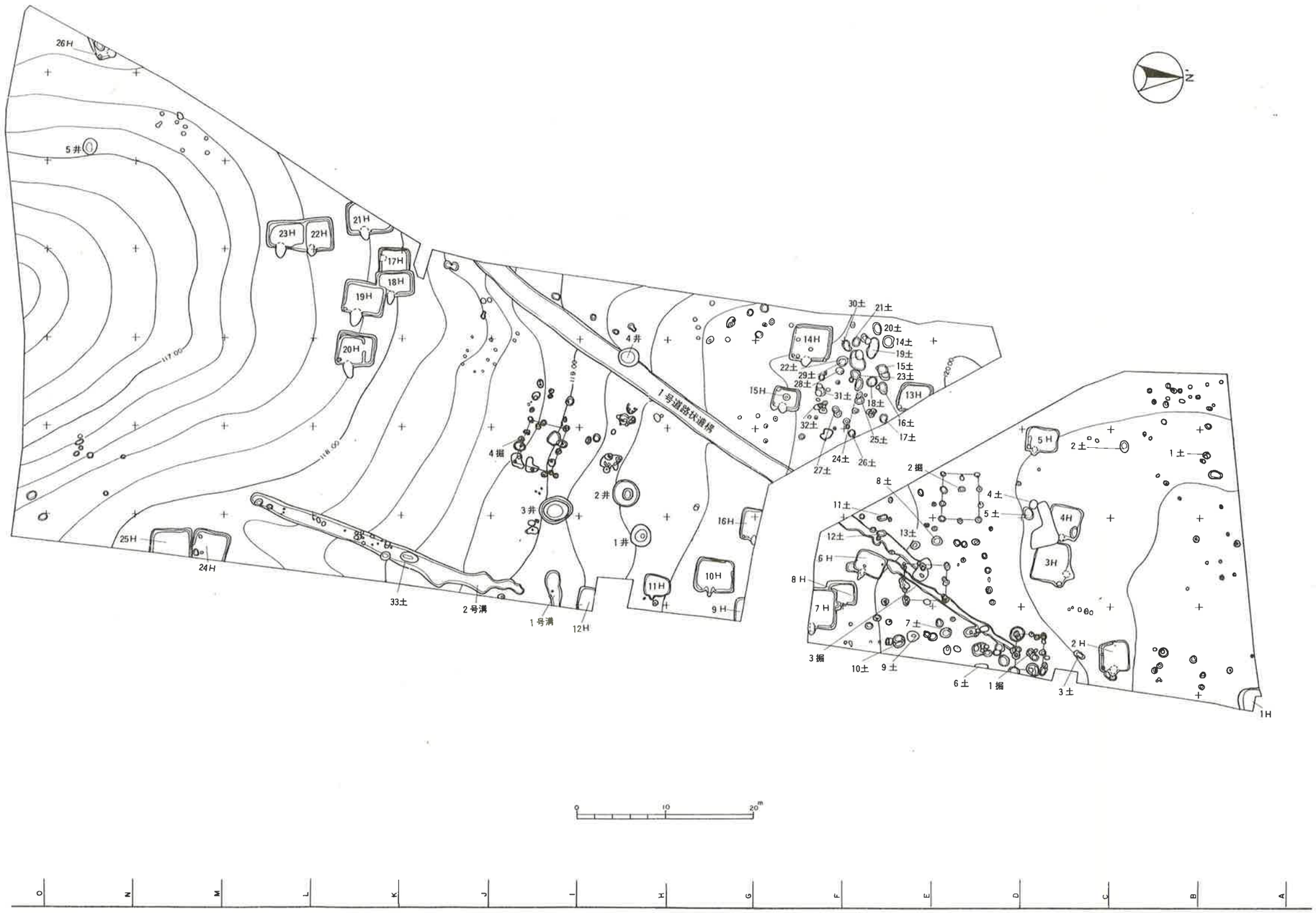
弥生時代は、中期が島原遺跡・頭無遺跡・荒口前原遺跡、後期は宮下遺跡・七ツ石遺跡が知られている。

古墳時代は前期から急激に遺跡数が増加する。前期は荒砥宮田遺跡・荒砥上之坊遺跡の集落跡、他に荒砥前原遺跡・荒砥諏訪遺跡・堤東遺跡などで方形周溝墓群が知られている。中期は柳久保遺跡などの集落跡、他に荒砥荒子遺跡・丸山遺跡で豪族居館跡が発見されている。後期は山ノ上古墳・茂木古墳・今井神社古墳など数多くの古墳が築造され、群集墳を形成するようになり、県下有数の古墳密集地帯を形成している。

奈良・平安時代になると、近隣の台地上には数多くの集落が営まれるようになり、普遍的に人々の生活を支える水田跡も発見例が増加している。集落跡は中鶴谷遺跡・頭無遺跡などが知られ、浅間B軽石によって埋没した水田跡は、柳久保水田跡などが知られている。また上西原遺跡では柵列と溝によって方形に区画され中央に基壇建物を持つ遺構が発見され、この地が古代の上野国勢多郡の中心（郡衙）と想定されている。

中世では、大室城・今井城などの城郭跡が知られている。

第2図　荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡の位置


26H
5井
23H
22H
21H
17H
18H
19H
20H
25H
24H
33土
2号溝
1号溝
12H
4井
4掘
3井
2井
1井
1号道路状遺構
16H
11H
10H
9H
14H
15H
13H
30土
21土
20土
14土
19土
15土
23土
22土
29土
28土
31土
18土
16土
32土
25土
17土
24土
26土
27土
2掘
8土
11土
12土
13土
4土
5土
6H
8H
7H
7土
3掘
10土
9土
6土
1掘
3土
2H
5H
2土
1土
4H
3H
1H
N
0
10
20m
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A

第3図　遺構配置図

V　検出された遺構と遺物

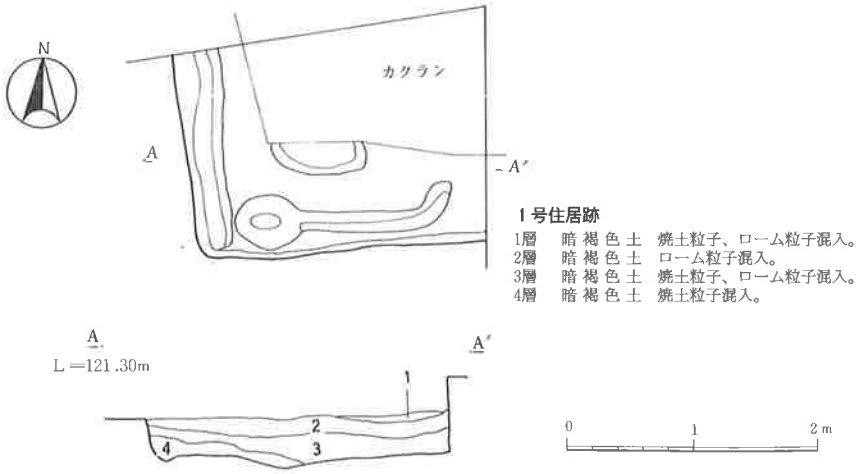
本遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡４棟、溝５条、土坑33基、井戸５基、道跡１である。

１　竪穴住居跡

検出された26軒はすべて奈良・平安時代と考えられ、南側の谷部分を除いて、調査区のほぼ全域に分布する。

１号住居跡（第４・５図、図版４－１、表２）

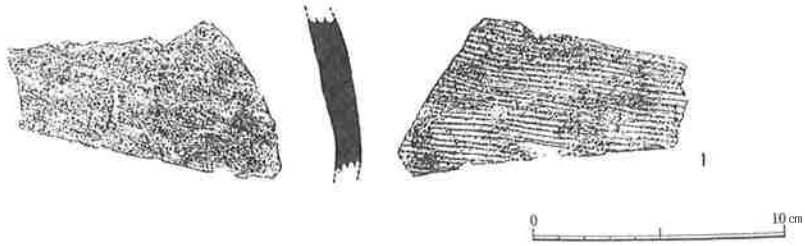
本跡は調査区北東側Ａ－４・５グリッドで検出された。ほとんどが調査区外で、南東側コーナーのみの検出である。方形を呈すると思われ、壁高は30㎝、周溝も検出されている。カマドは検出されていない。遺物は覆土中から少量出土している。



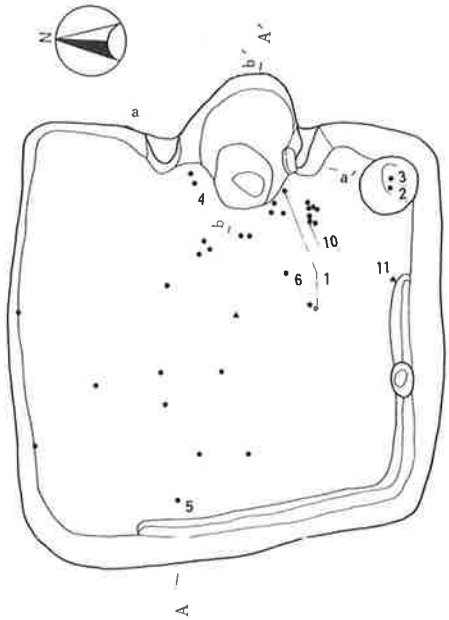
第４図　１号住居跡

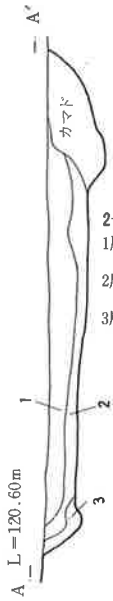
表２　１号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵甕	器高 － 口径 － 底径 －	胴部片。	外面平行叩き目。 内面ナデ調整。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中



第５図　１号住居跡の遺物

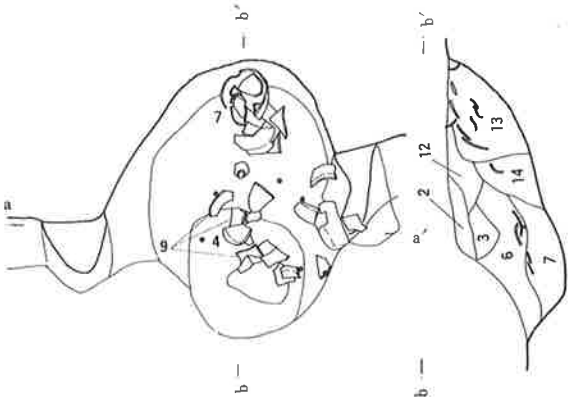




2号住居跡

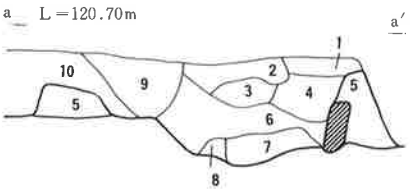
1層　暗褐色土　ローム小ブロック及び焼土粒子混入。
2層　暗褐色土　ロームブロック及び焼土粒子少量混入。
3層　褐　色　土　ローム粒子を少量含む。

0　1　2m



カマド

1	黒褐色土	焼土粒子混入。
2	黒褐色土	焼土粒子少量混入。
3	暗褐色土	ローム粒子少量混入。
4	暗褐色土	焼土粒子及びローム小粒子混入。
5	明褐色土	粘土質、焼土粒子混入。
6	暗褐色土	ローム粒子混入。
7	暗褐色土	ローム小ブロック及び焼土混入。
8	黒褐色土	ロームブロック混入。
9	黒褐色土	ロームブロック混入。
10	明黄褐色土	ローム粒子をやや多く混入。
11	黒褐色土	焼土粒子混入。
12	黒黄褐色土	焼土粒子やや多く混入。
13	黒黄褐色土	粘土質、焼土混入。
14	黒褐色土	焼土粒子混入。



0　1m

第6図　2号住居跡とカマド

2号住居跡（第6・7図、図版4－2・4－3・17・22、表3）

本跡は調査区北東側B－4、C－4グリッドで検出された。主軸方向はN－98°－Eである。規模は3.1×3.2mでやや歪んでいるが正方形に近い。壁高は30cm。

主柱穴は検出されず、南東側コーナーには貯蔵穴が認められる。周溝は南西側のみ回る。

カマド　東壁中央に位置する。袖は粘土と石で構築されている。壁外への掘り込みは30cmでなだらかに立ち上がる。

遺物はカマドから土師器の甕が3個体出土している。

表3　2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 3.8 口径13.1 底径 5.8	平底。体部外傾する。	外面、体部下端ヘラ削り。底部無調整（砂底状）。内面ナデ。	砂粒・白色・鉱物を含む粗い。	暗褐色	酸化	カマド内
2	土師坏	器高 4.1 口径13.6 底径 5.2	平底。体部外傾する。	外面体部ヘラ削り。口縁部ナデ。底部無調整（砂底状） 内面ナデ。	砂粒・白色・鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	貯蔵穴
3	土師坏	器高 4.0 口径13.2 底径 5.2	平底。体部外傾する。	外面体部下端ヘラ削り。底部無調整（砂底状）。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	貯蔵穴
4	土師坏	器高 4.7 口径13.2 底径 5.5	体部外傾する。底部平底。1～3に比して器高やや高い。	外面体部下端ヘラ削り。底部無調整（砂底状）。内面ナデ。	砂粒・白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内
5	土師高台付椀	器高 (3.4) 口径 － 底径 6.0	高台部短く「ハ」の字状に開く。	外面高台取り付け後丁寧なナデ。 内面ナデ。	白色・赤色・鉱物を少量含む。	灰褐色	酸化	覆土中
6	須恵坏	器高 (4.2) 口径13.6 底径 －	体部外傾する。	ロクロ成形。	白色鉱物を少量含む。緻密。	褐色	還元	墨書（不明）倒位ヵ 覆土中
7	土師甕	器高19.8 口径19.8 底径 －	器肉やや厚く、口縁部「く」の字状を呈する。最大径は胴上半部。	外面、口縁部ヘラ削りの後ナデ。肩部横方向、胴部縦方向のヘラ削り。	砂粒・赤色・鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	カマド内
8	土師甕	器高11.0 口径17.1 底径 －	口縁部短く外反する。	外面口縁部ヘラ調整。胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ヘラ調整。	砂粒・白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内
9	土師甕	器高 (15.8) 口径18.0 底径 －	口縁部「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向の下半部縦方向のヘラ削り。内面ヘラ調整。	砂粒・赤色・鉱物を含む。	褐色	酸化	カマド内
10	土師台付甕	器高 (2.2) 口径 7.4 底径 －	台部のみ残。「ハ」の字状に開く。	内外面共にヘラ調整。	砂粒・白色・鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床密着
11	鉄製品刀子		刃先部のみ残。					覆土中

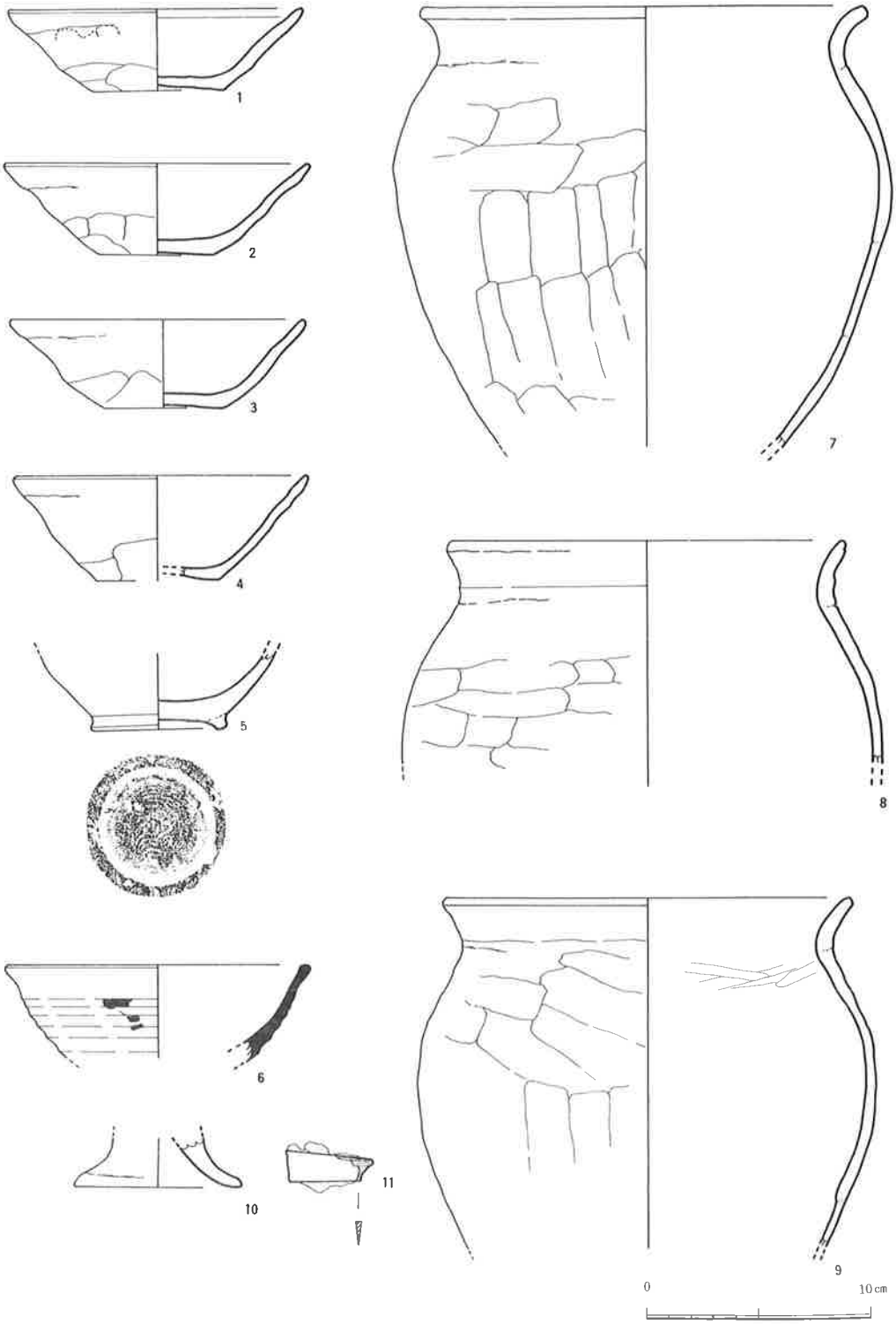
3号住居跡（第8・9・10・11・図、図版5・17・21・22、表4）

本跡は調査区北側C－3グリッドで検出された。西側には4号住居跡が近接する。主軸方向はN－20°－Eである。規模は4.3×3.9mで、やや横長の長方形を呈する。掘り込みは深く、壁高は50cmを計る。南西側コーナーは撹乱を受けている。

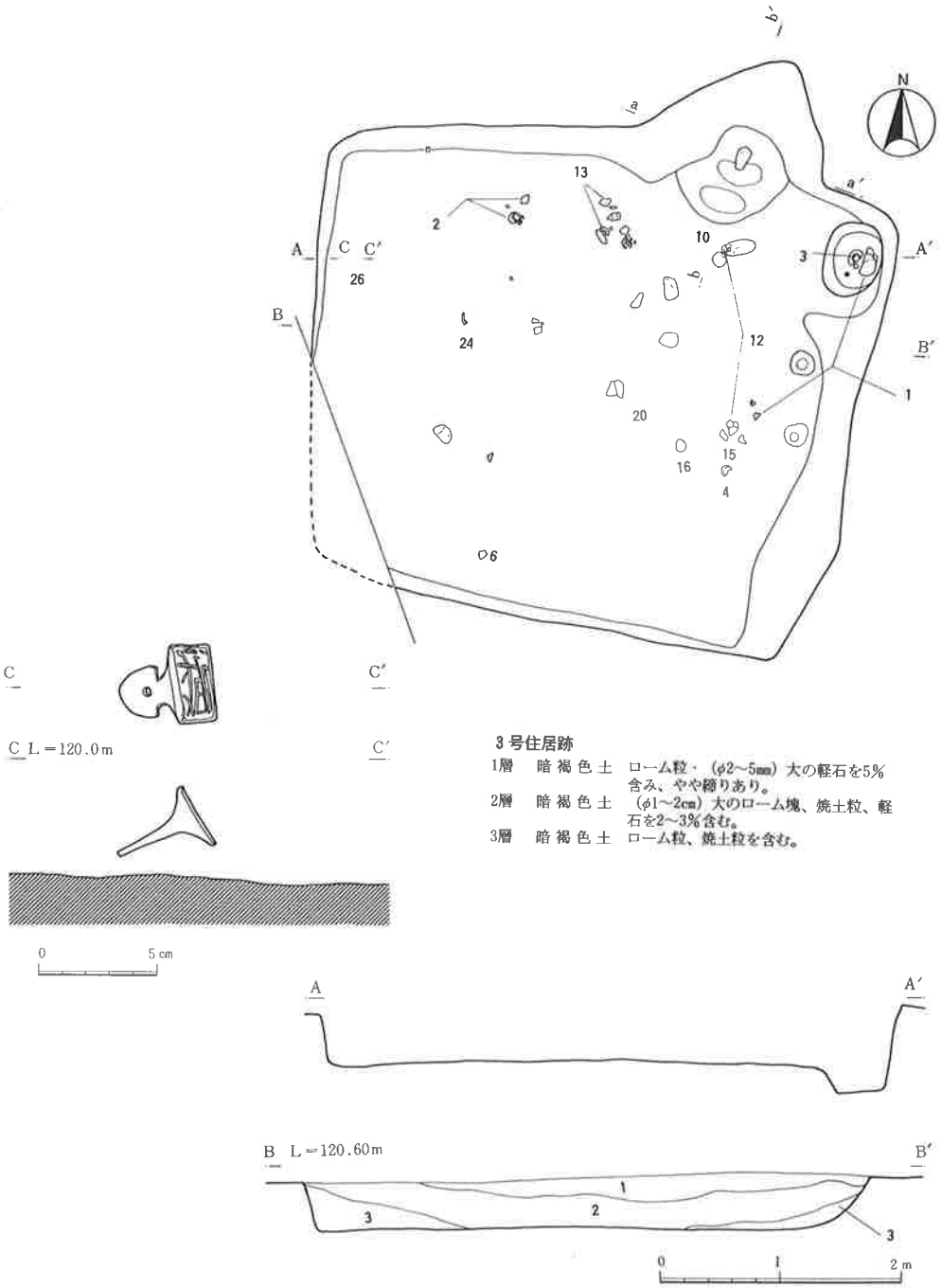
柱穴は検出されなかった。北東側コーナーには貯蔵穴が検出されている。

カマド　北壁東寄りに位置する。支脚の石が検出されている。袖は不明であるが、石が散乱していることにより、石組みのカマドであったと考えられる。

遺物は貯蔵穴、カマド付近を中心にややまとまって出土しており、西側壁寄り床面から1cm程浮いた状態で銅印が出土している。この銅印は出土状態から本跡に伴うものと考えられる。



第7図　2号住居跡の遺物



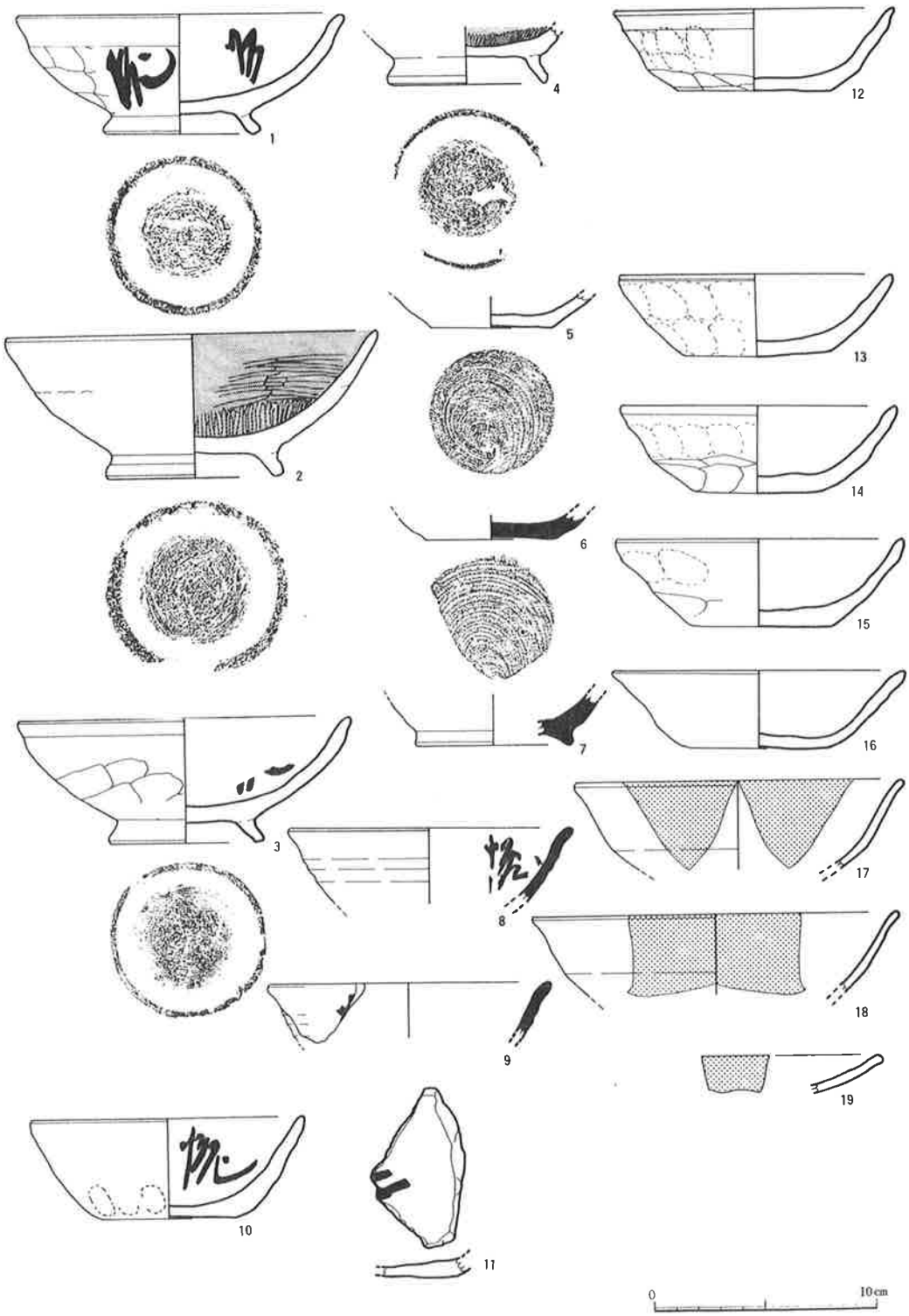
3号住居跡

1層　暗褐色土　ローム粒・（φ2～5mm）大の軽石を5%含み、やや締りあり。

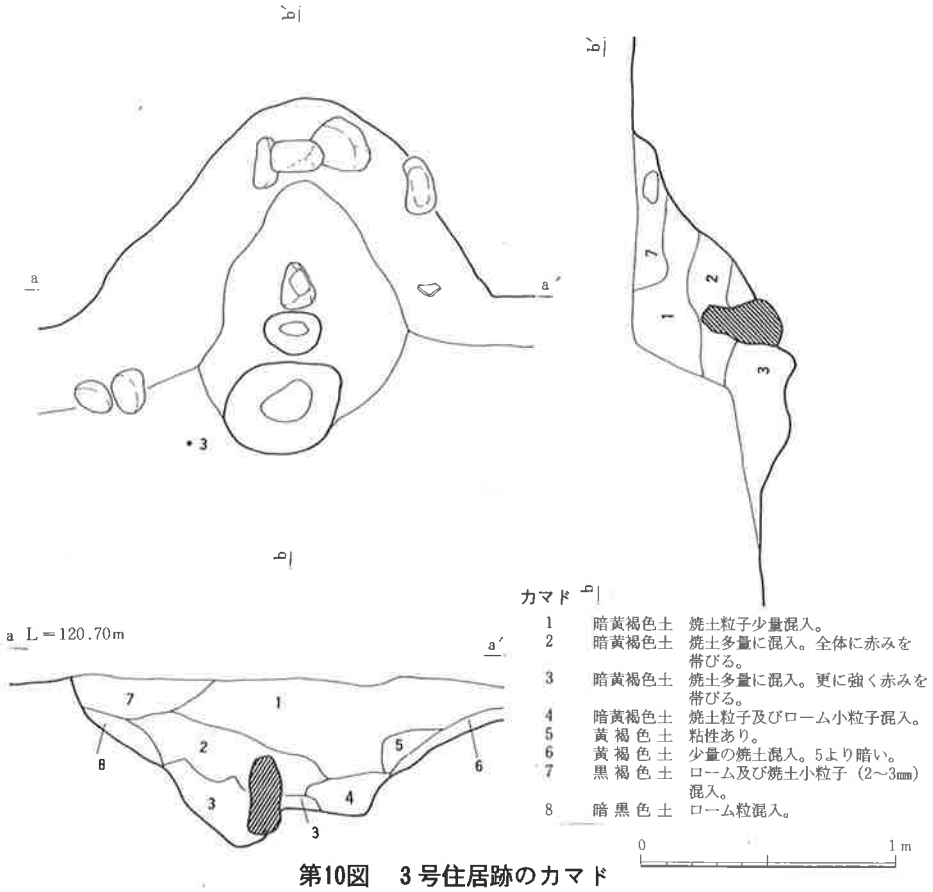
2層　暗褐色土　（φ1～2cm）大のローム塊、焼土粒、軽石を2～3%含む。

3層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を含む。

第8図　3号住居跡



第9図　3号住居跡の遺物 (1)



第10図　3号住居跡のカマド

4号住居跡（第12・13図、図版6－1・18、表5）

本跡は調査区北側C－2・3グリッドで検出された。主軸方向はN－84°－Eである。規模は3.1×3mでほぼ正方形を呈する。南側は撹乱を受けている。確認面からの掘り込みは50cmである。

ピット、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

カマド　東壁中央に位置する。壁外への掘り込みは40cmでやや急激に立ち上がる。袖は粘土で構築されている。

遺物はカマド付近を中心に少量出土している。

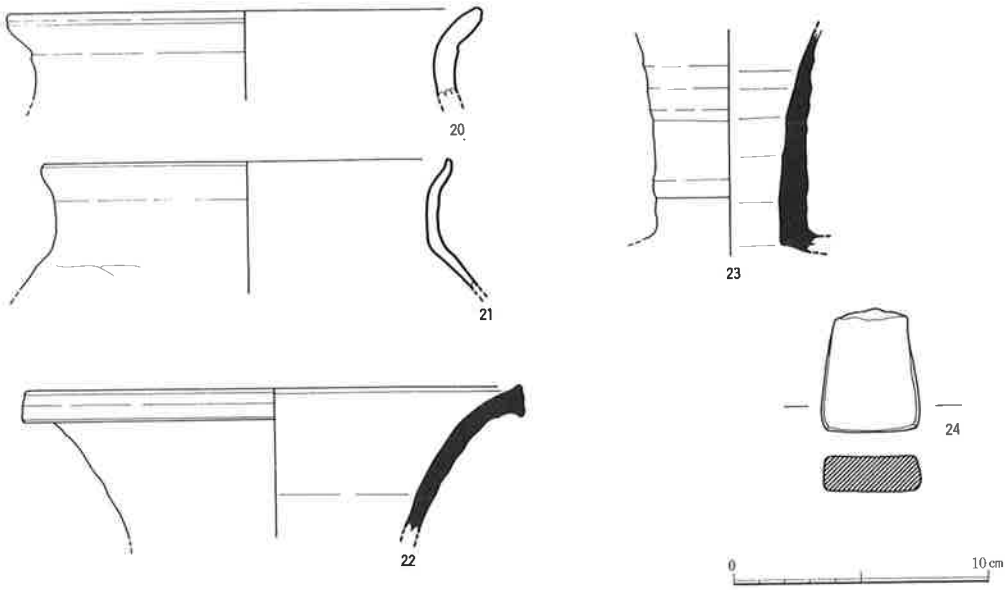
5号住居跡（第14・15図、図版6－2・18・22、表6）

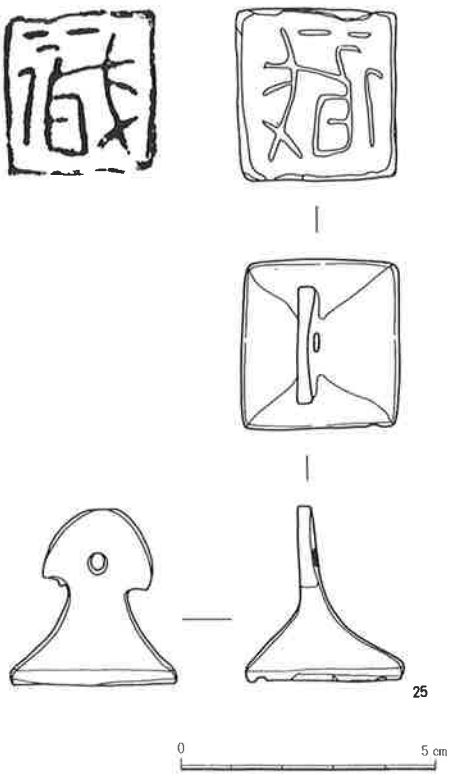
本跡は調査区北西側C－2グリッドで検出された。主軸方向はN－99°－Eである。規模は3.6×2.5mで横長の長方形を呈する。壁高は45cmである。

南西側コーナーには貯蔵穴がある。ピット、周溝は検出されなかった。

カマド　東壁南寄りに位置する。粘土で構築されており、煙道部が残存するが、袖・支脚等は検出されていない。

遺物はカマド、貯蔵穴等から少量出土している。

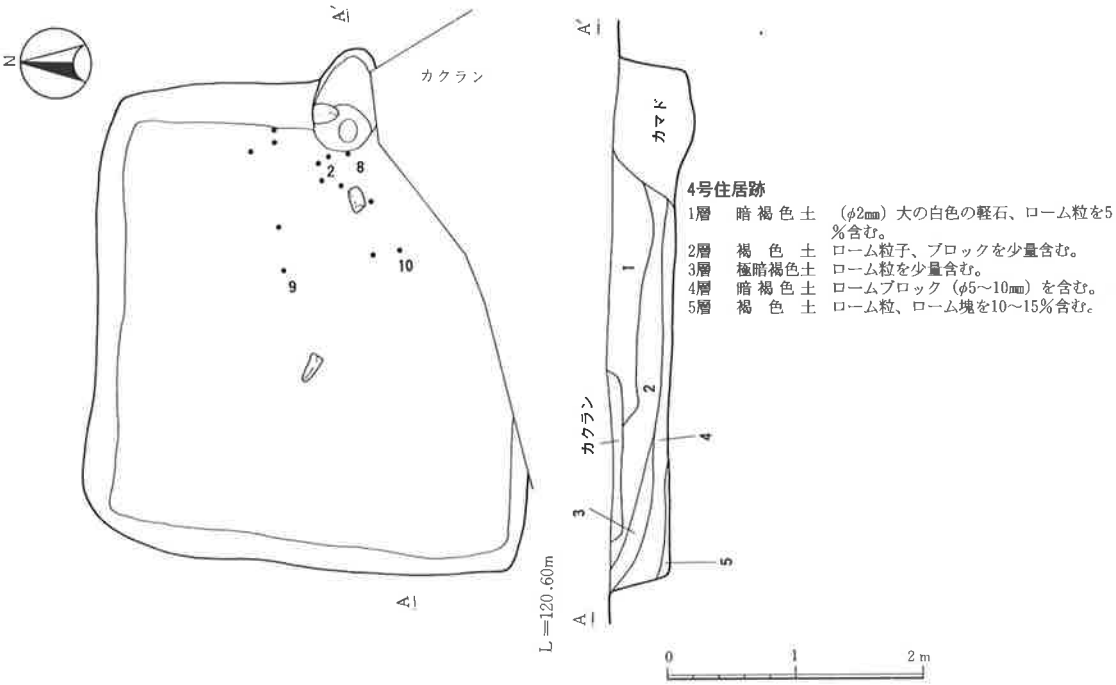




第11図　3号住居跡の遺物 (2)

表4　3号住居跡出土遺物観察表

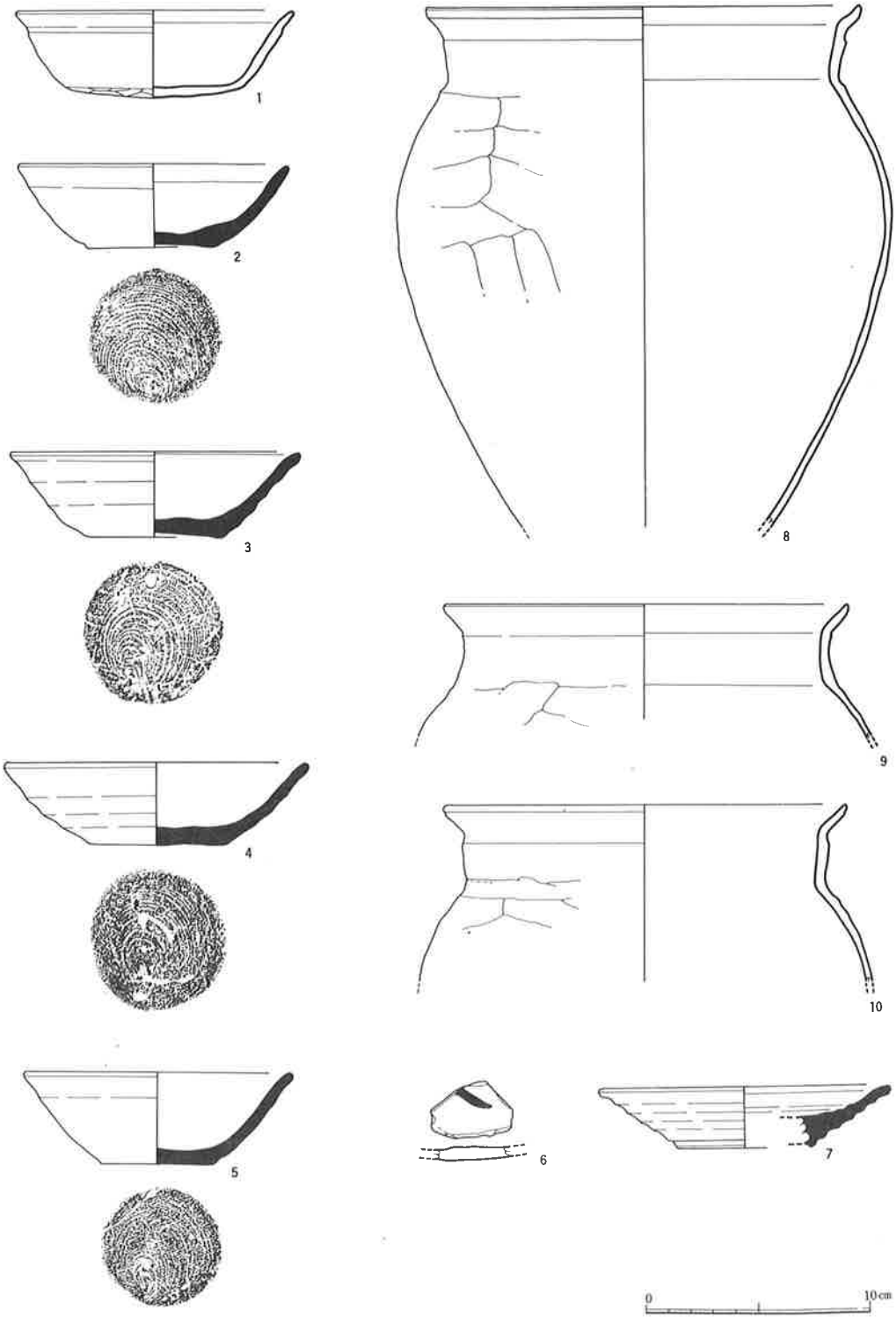
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師 高台付椀	器高 5.4 口径14.6 底径 7.0	体部内湾して立ち上がり、弱い稜を持つ。高台部「ハ」の字状に開く。	外面ヘラ削り。底部付高台後ナデ。 内面ナデ。	赤色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	内外面横位墨書「院」 貯蔵穴
2	土師 高台付椀	器高 6.5 口径16.8 底径 7.8	体部内湾して立ち上がる。高台部「ハ」の字状に開く。	外面ヘラ削り。底部付高台後ナデ。 内面黒色処理、ミガキ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	褐色 内面黒色	酸化	床着
3	土師 高台付椀	器高 5.6 口径15.0 底径 6.8	体部内湾して立ち上がる。高台部「ハ」の字状に開く。	外面ヘラ削り。底部付高台後ナデ。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	内面墨書横位「院」ヵ 貯蔵穴
4	土師 高台付椀	器高 (2.6) 底径 7.0	高台部「ハ」の字状に開く。	外面底部付高台後ナデ。 内面黒色処理、ミガキ。	砂粒・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5	須恵 坏	器高 (1.5) 底径 5.6	体部外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後無調整	小石を少量含む。 緻密。	褐色	酸化	覆土中
6	須恵 坏	器高 (1.1) 底径 6.0	底部片。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後無調整	砂粒・白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
7	須恵 高台付椀	器高 (2.3) 底径 7.0	細片。	底部付高台後ナデ。	砂粒・白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
8	須恵 坏	器高 (3.4) 口径12.8	体部内湾して立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒を少量含む。 緻密。	灰色	還元	内面墨書正位「院」 覆土中
9	須恵 坏		体部内湾して立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒を少量含む。 緻密。	灰色	還元	外面体部墨書不明。 覆土中
10	土師 坏	器高 4.5 口径12.2 底径 6.0	底部平底。やや厚手。 体部直線的に外傾する。	外面体部指押さえ、ナデ。 底部ヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を含む。	褐色	酸化	内面墨書正位「院」 床着
11	土師 坏		平底の底部。	底部内面ナデ。	砂粒・黒色鉱物を含む。	にぶい褐色	酸化	内面底部墨書不明。 覆土中
12	土師 坏	器高 3.8 口径12.6 底径 7.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。体部中央指押さえ。 内面ナデ。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	床着
13	土師 坏	器高 4.0 口径13.5 底径 6.0	やや不安定な平底。体部直線的に外傾し、口唇部直立ぎみになる。	外面底部ヘラ削り。 体部指押さえ、ナデ。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を量含む。	茶褐色	酸化	周溝内
14	土師 坏	器高 4.0 口径13.0 底径 6.5	底部平底。体部直線的に外傾する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。体部中央指押さえ。 内面ナデ。	砂粒・黒色鉱物を少量含む。	茶褐色	酸化	カマド内
15	土師 坏	器高 3.6 口径13.2 底径 6.4	底部平底。体部直線的に外傾し、口唇部直立ぎみになる。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。体部中央押さえ。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	覆土中
16	土師 坏	器高 3.9 口径12.5 底径 7.6	底部平底。体部直線的に外傾する。	外面体部指押さえ、ナデ。 底部ヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
17	灰釉 椀	器高 (4.0) 口径14.8	口縁部片。体部内湾して立ち上がり、口唇部外傾ぎみとなる。	ロクロ成形。	緻密	灰白色	還元	覆土中
18	灰釉 椀	器高3.6 口径16.4	口縁部片。体部内湾して立ち上がり、口唇部外傾する。	ロクロ成形。	緻密	灰白色	還元	覆土中
19	灰釉 皿		口縁部片。	ロクロ成形。	緻密	灰白色	還元	覆土中
20	土師 甕	器高 (3.5) 口径18.6	口縁部片。肉厚で口唇部外傾する。	口縁部内外面共にナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内
21	土師 甕	器高5.2 口径16.0	口縁部「コ」の字状を呈する。	外面体部横方向のヘラ削り。 口縁部内外面ナデ。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
22	須恵 甕	器高 (5.9) 口径19.6	外傾する口縁部片。先端部段を有する。	ロクロ成形。	黒色鉱物をやや多く含む。	灰色	還元	覆土中
23	須恵 長頸壺	器高 (9.0)	長頸部片。	ロクロ成形。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
24	砥石		五面に使用痕。		凝灰岩	灰白色		覆土中
25	銅印	印字は一字「識」蠟型の印面に直接逆字に彫った蠟型鋳造による古銅印。全体の形状は鋳形。印面の大きさは縦3.1cm・横3.2cm・高さ3.5cmで、当時の一寸に相当し、私印と考えられる。						床着



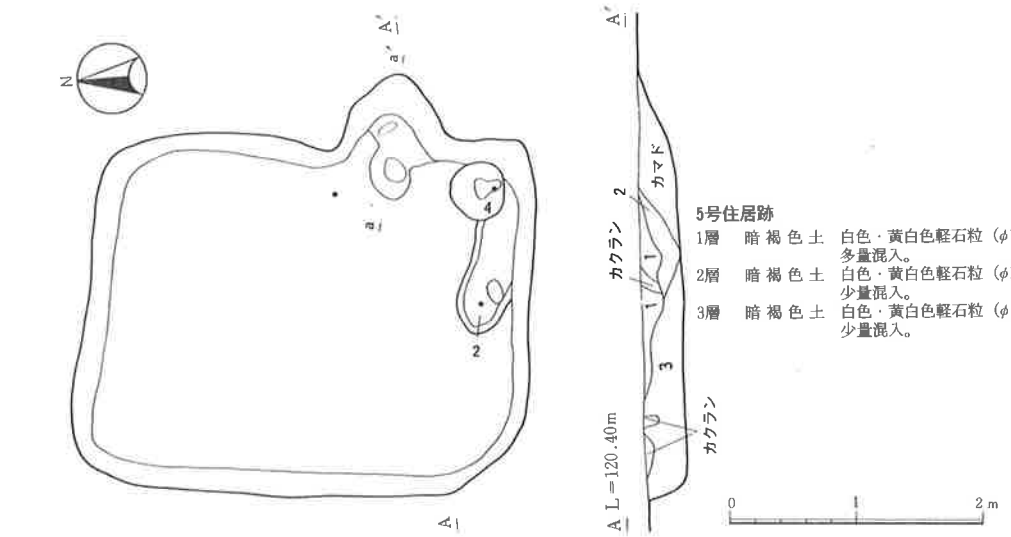
第12図　4号住居跡

表5　4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 3.9 口径12.4 底径 8.0	底部不安定な平底。体部直線的に外傾し、口縁部直下に稜を持つ。	外面底部ヘラ削り。 外面体部雑なナデ。 内面ナデ。	黒色鉱物を少量含む。	茶褐色	酸化	覆土中
2	須恵坏	器高 3.8 口径12.2 底径 5.8	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	白色・黒色鉱物を含む。	灰褐色	還元	床着
3	須恵坏	器高 3.8 口径13.0 底径 6.1	底部上げ底ぎみになる。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰褐色	還元	カマド内
4	須恵坏	器高 3.7 口径13.6 底径 6.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	白色・赤色鉱物を多く含む。	暗褐色	還元ぎみ	床着
5	須恵坏	器高 4.1 口径12.0 底径 5.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	白色・赤色鉱物を少量含む。	にぶい橙	還元ぎみ	カマド内
6	土師坏		底部片。	内外面ナデ。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	底部内面黒書不明。 覆土中
7	須恵皿	器高 (2.7) 口径13.0	口縁部片。底部付近肉厚となり、高台付と思われる。	ロクロ成形。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
8	土師甕	器高 (23.5) 口径19.4	「コ」の字状口縁。器肉はやや厚い。	外面胴上半部横方向の下半部縦方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	カマド内
9	土師甕	器高 (6.0) 口径18.0	「コ」の字状口縁。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
10	土師甕	器高 (8.0) 口径18.0	「コ」の字状口縁。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色・赤色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中

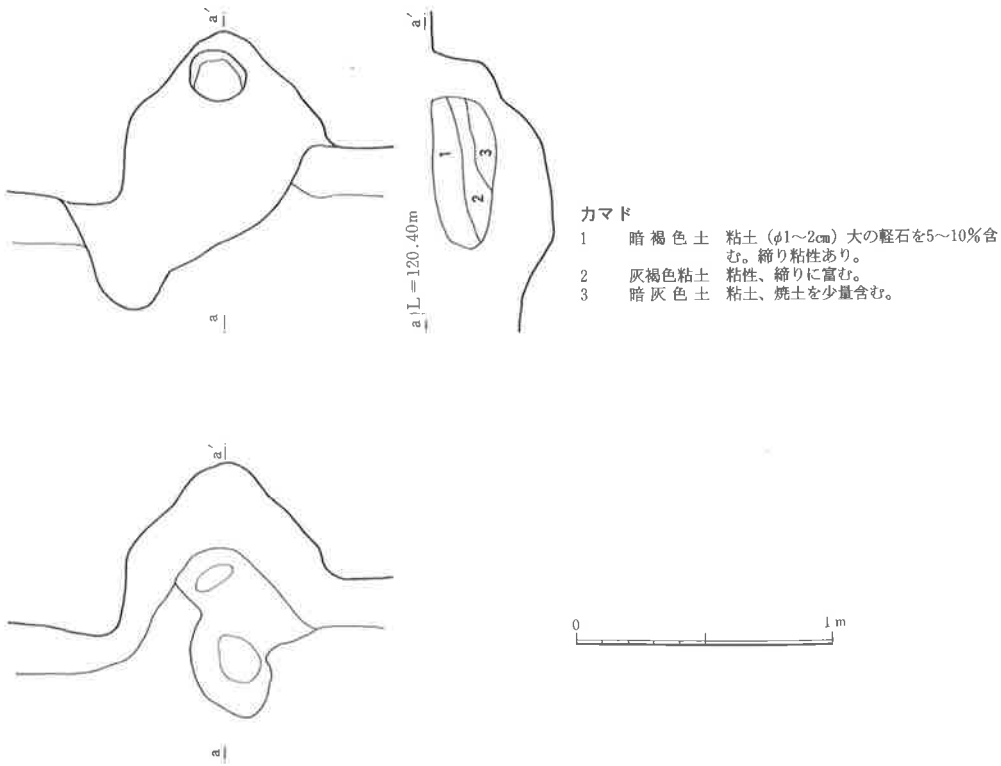


第13図　4号住居跡の遺物



5号住居跡

1層	暗褐色土	白色・黄白色軽石粒（φ1～5mm）多量混入。
2層	暗褐色土	白色・黄白色軽石粒（φ1～5mm）少量混入。
3層	暗褐色土	白色・黄白色軽石粒（φ1～5mm）少量混入。



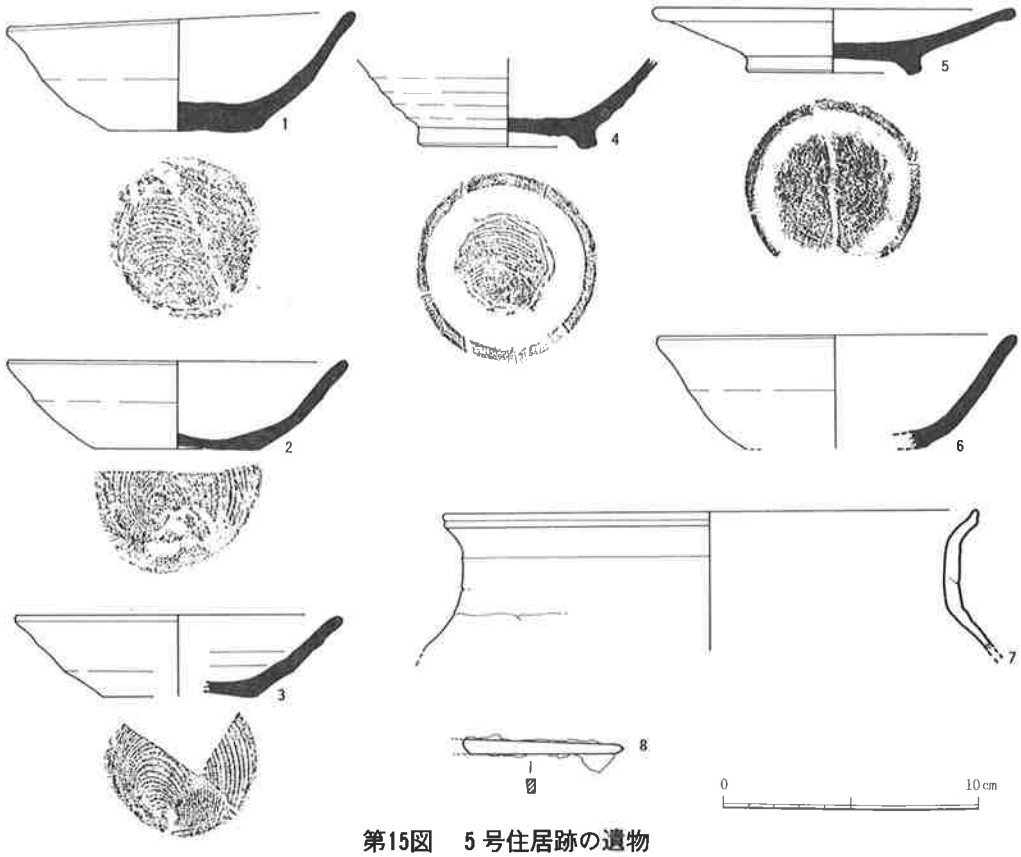
カマド

1	暗褐色土	粘土（φ1～2cm）大の軽石を5～10％含む。締り粘性あり。
2	灰褐色粘土	粘性、締りに富む。
3	暗灰色土	粘土、焼土を少量含む。

第14図　5号住居跡とカマド

表6　5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵坏	器高 4.8 口径13.5 底径 5.5	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸の切り後無調整。	砂粉・白色鉱物砂含む。	灰色	還元	カマド内
2	須恵坏	器高 3.5 口径13.4 底径 6.4	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3	須恵坏	器高 3.2 口径12.8 底径 6.2	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整	砂粒・白色黒色鉱物を少量含む	灰色	還元	カマド内
4	須恵高台付坏	器高 (3.5) — 底径 7.0	高台短く「ハ」の字状に開く。体部直線的外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後付高台。周縁部ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
5	須恵高台付皿	器高 2.5 口径14.2 底径 8.0	高台部短く「ハ」の字状に開く。	ロクロ成形。外面底部付高台後全体に丁寧なナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
6	須恵坏	器高 (4.5) 口径14.0	底部欠。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
7	土師甕	器高 (6.5) 口径21.0 —	「コ」の字状口縁。	外面体部上端部横方向のヘラ削り。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
8	鉄製品不明		刃部欠損の刀子か。存長6.3cm					カマド内

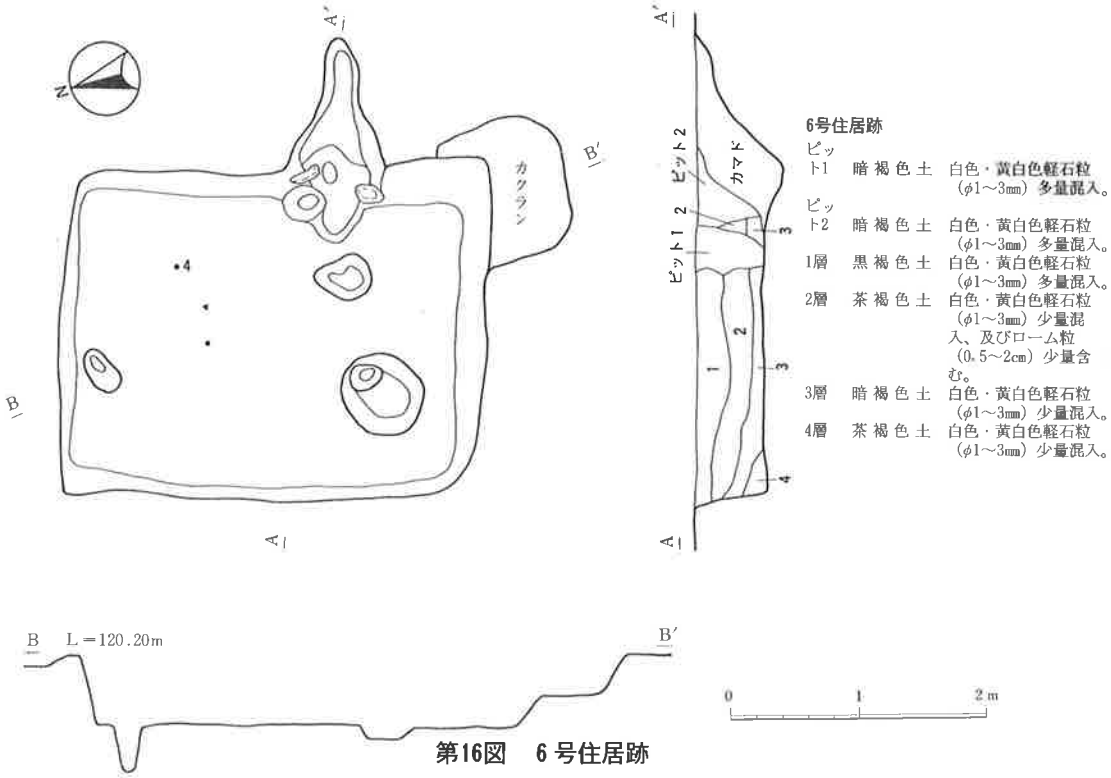


第15図　5号住居跡の遺物

6号住居跡（第16・17図、図版6－3・18、表7）

本跡は調整区北側中央E－3グリッドで検出された。主軸方向はN－97°－Eである。規模は3×2.3mとやや小形で横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは50cmである。

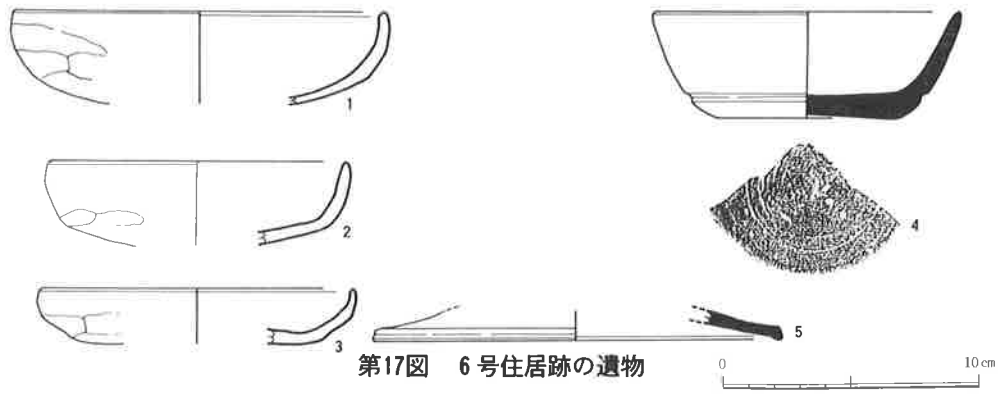
ピットは3基検出されているが、いずれも不整形で浅い。



第16図　6号住居跡

表7　6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 (3.7) 口径14.6 底径 —	平底に近い丸底。体部内湾しながら立ち上がり口唇部直立する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内
2	土師坏	器高 (3.3) 口径11.8	平底に近い丸底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口唇部外傾ぎみとなる。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内
3	土師坏	器高 (2.2) 口径12.4	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口唇部直立する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色・鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
4	須恵坏	器高 4.2 口径12.0 底径 7.0	平底。体部直線的に外底近くに稜を有する。	ロクロ成形。 外面底部回転ヘラ削り。	白色・黒色鉱物をやや多くぬむ	灰色	還元	床着
5	須恵蓋	器高 (1.2) 口径16.0	破片。口縁端部屈曲する。	ロクロ成形。	緻密	灰色	還元	覆土中



第17図　6号住居跡の遺物

カマド　東壁中央南寄りに位置する。壁外への掘り込みは110cmでなだらかに立ち上がる。袖には石が利用されている。

遺物は土師器の坏がカマドから出土しているが、全体に出土量は少ない。

7号住居跡(第18・19図、図版7－1　18、表8)

本跡は調査区東側F－3・4グリッドで検出された。南側では道路のため未調査となった。北西側で8号住居跡を重複し、本跡が古い。主軸方向はN－93°－Eである。規模は東西方向は4.1mを計り、方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは50cmである。

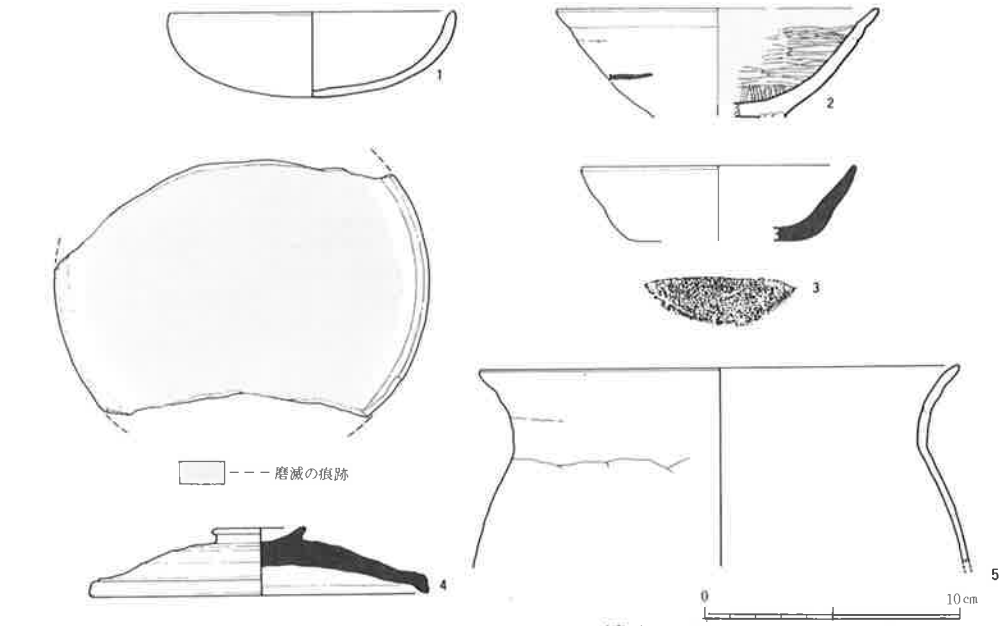
ピットは検出されず、周溝は調査区内では回る。

カマド　東壁中央に位置する。袖、支脚等は検出されなかった。壁外への掘り込みは90cmで急激に立ち上がる。

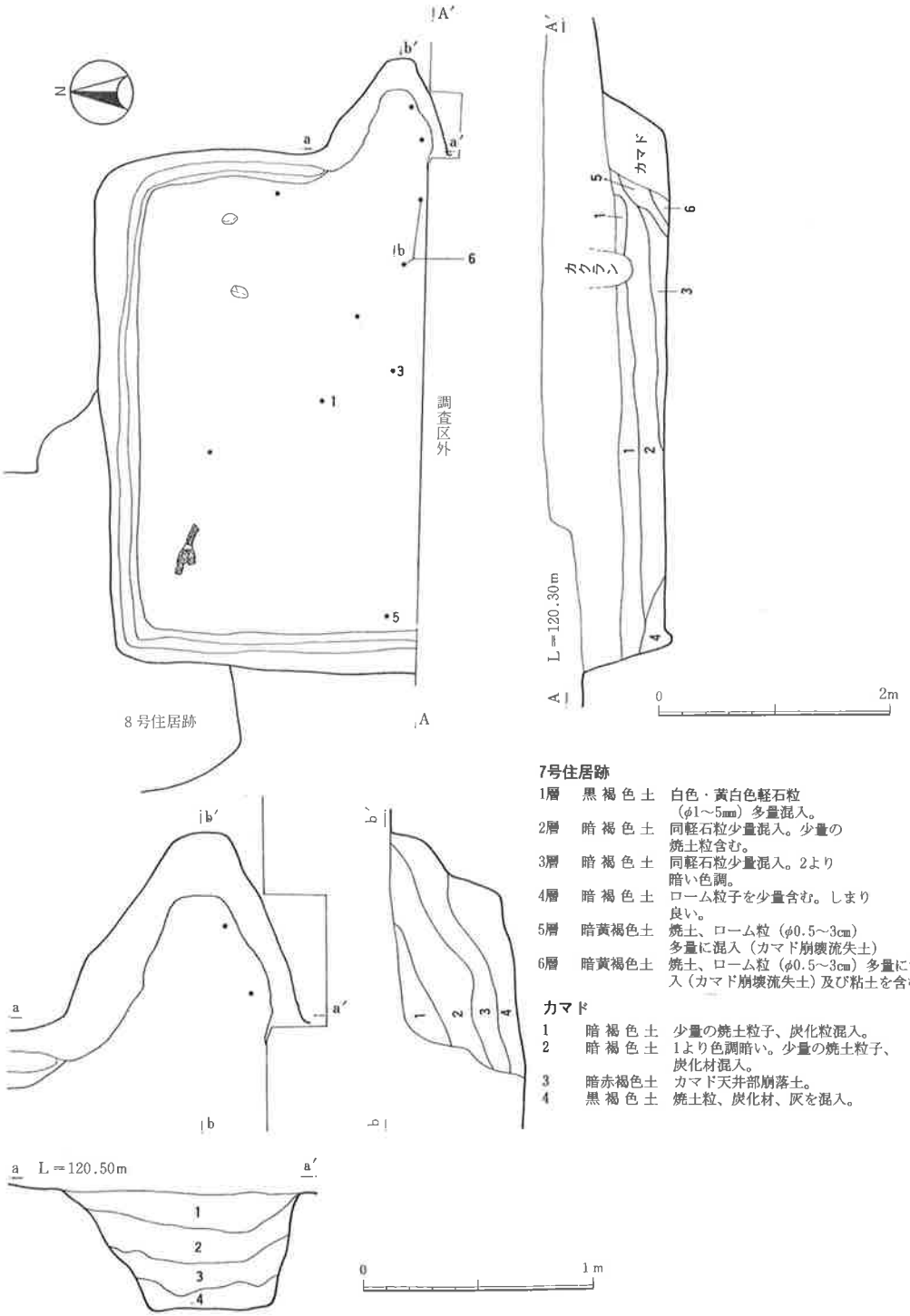
遺物はカマド付近から少量出土し、北西側から炭化材が出土している。

表8　7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 3.8 口径12.6 底径 －	丸底。体部内湾して立ち上がり、口唇部直立する。	外面ヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
2	土師高台付坏	器高 4.8 口径14.2 底径 6.0	高台部剝落。体部直線的に外傾し、口唇部弱い稜を持って外反する。	外面体部ヘラ削り、内面内黒処理の後ミガキ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	外面墨書不明 覆土中
3	須恵坏	器高 3.3 口径12.0 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 外面底部回転ヘラ切り。	白色・黒色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
4	須恵蓋転用硯	器高 3.0 口径14.8	口縁端部弱く屈曲する。つまみ偏平。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラ削り。 内面よく磨かれている。	白色・黒色鉱物をやや多く含む	灰色	還元	墨痕わずかに残る。 床着
5	土師甕	器高 (8.9) 口径21.2	口唇部「く」の字状に外反する。	胴上半部横方向のヘラ削り。	白色・黒色鉱物を少量含む。	赤褐色	酸化	床着



第18図　7号住居跡の遺物



7号住居跡

1層	黒褐色土	白色・黄白色軽石粒（φ1～5mm）多量混入。
2層	暗褐色土	同軽石粒少量混入。少量の焼土粒含む。
3層	暗褐色土	同軽石粒少量混入。2より暗い色調。
4層	暗褐色土	ローム粒子を少量含む。しまり良い。
5層	暗黄褐色土	焼土、ローム粒（φ0.5～3cm）多量に混入（カマド崩壊流失土）
6層	暗黄褐色土	焼土、ローム粒（φ0.5～3cm）多量に混入（カマド崩壊流失土）及び粘土を含む。

カマド

1	暗褐色土	少量の焼土粒子、炭化粒混入。
2	暗褐色土	1より色調暗い。少量の焼土粒子、炭化材混入。
3	暗赤褐色土	カマド天井部崩落土。
4	黒褐色土	焼土粒、炭化材、灰を混入。

第19図　7号住居跡とカマド

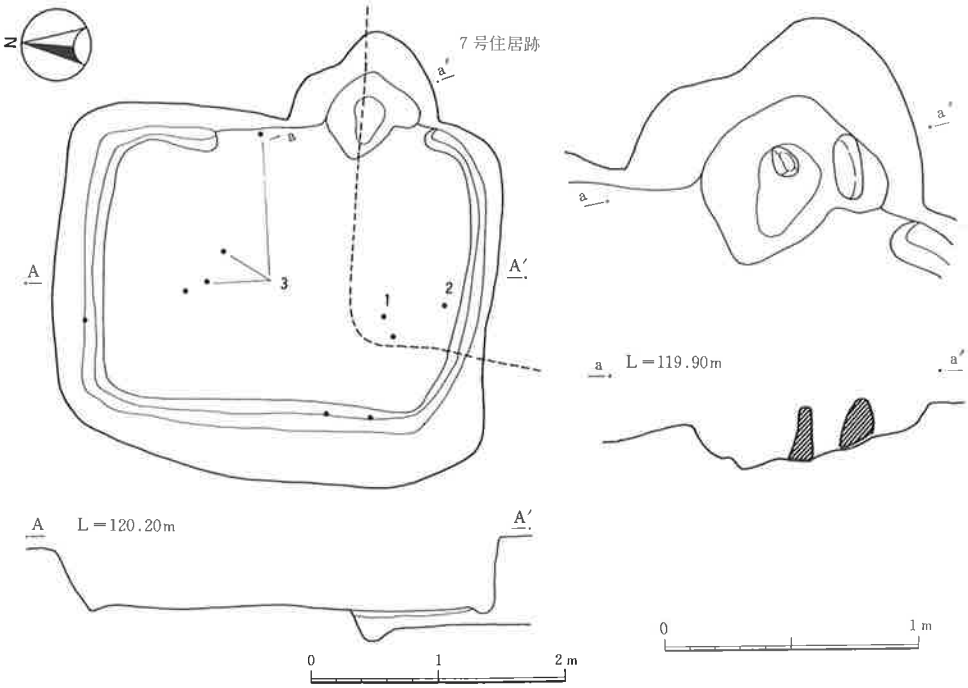
8号住居跡(第20・21図、図版7－1・18、表9)

本跡は調査区東側E－3・F－3グリッドで検出された。南東側で7号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。主軸方向はN－95°－Eである。規模は2.9×2.4mで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは50cmである。

ピットは検出されず、周溝はカマド付近を除いて回る。7号住居跡と重複する部分は貼り床となっている。

カマド　東壁やや南寄りに位置する。右袖の石と支脚の石が検出されている。壁外への掘り込みは70cmでなだらかに立ち上がる。

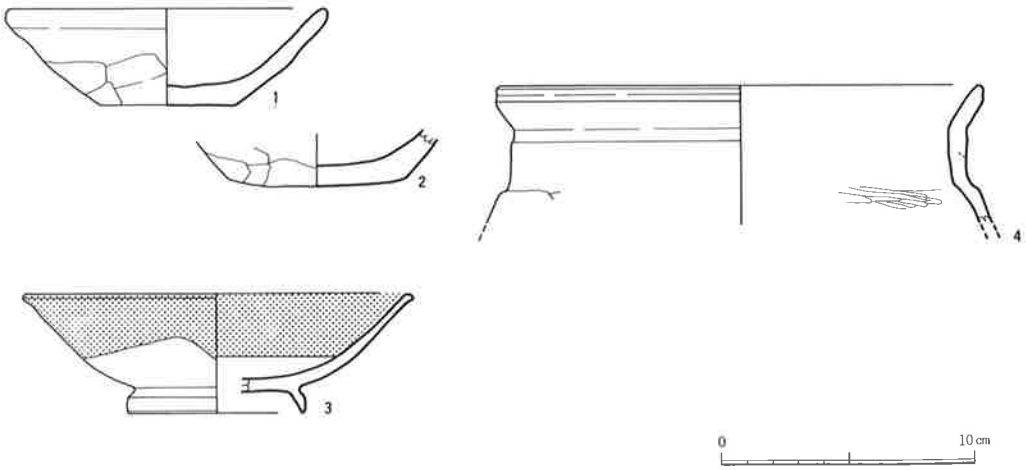
遺物は床着、覆土中共に少ない。



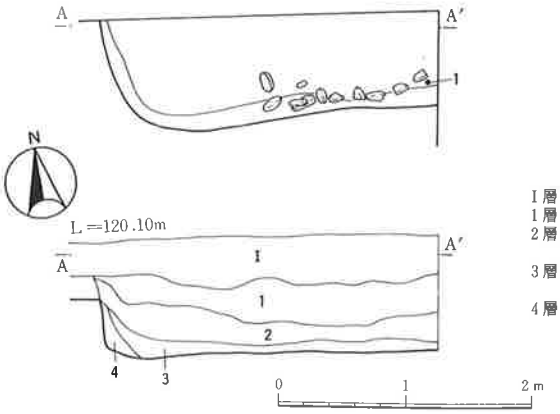
第20図　8号住居跡とカマド

表9　8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 3.8 口径12.6 底部 5.4	平底。体部直線的に外傾する。	外面底部無調整(砂底状)。体部ヘラ削り。内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	赤褐色	酸化	覆土中
2	土師坏	器高 2.1 口径 － 底径 7.0	平底。	外面底部、体部下端ヘラ削り。内面ナデ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
3	灰釉高台付椀	器高 4.7 口径15.0 底径 7.0	高台部三日月形。口縁部内湾して立ち上がり、口唇部外傾する。	ロクロ成形。釉は刷毛塗り。	緻密	灰白色	還元	床着
4	土師甕	器高 (5.4) 口径19.0	やや厚手の「コ」の字状口縁。	外面胴残存部横方向のヘラ削り。	砂粒を含む。	褐色	酸化	覆土中



第21図　8号住居跡の遺物

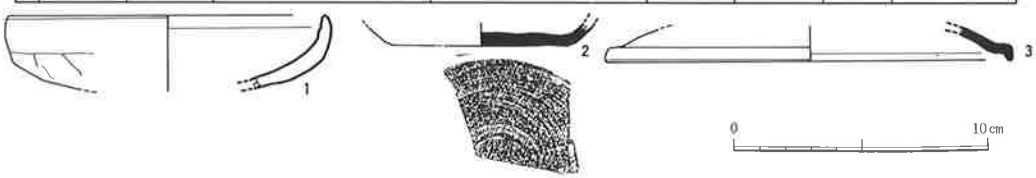


I層　黒褐色土　表土
1層　黒褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～3mm）混入。
2層　暗褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～5mm）多量に含む。
3層　暗褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～5mm）少量含む。
4層　褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～3mm）少量含む。

第22図　9号住居跡

表10　9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 (2.9) 口径12.6 底径 —	底部平底ぎみの丸底。体部内湾して立ち上がり口唇部直立する。	外面底部ヘラ削り。内面ナデ。	緻密	褐色	酸化	床着
2	須恵坏	器高 (0.8) 口径 — 底径 7.0	平底の底部片。	ロクロ成形。外面底部回転ヘラ切り。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	床着
3	須恵蓋	器高 (1.3) 口径16.0	細片。	ロクロ成形。	緻密	灰色	還元	床着



第23図　9号住居跡の遺物

9号住居跡（第22・23図、　図版７－２、表10）

本跡は調査区東側Ｇ－３・４グリッドで検出された。北側は道路のため調査できず、東側は調査区外となっている。南西側一部のみの検出であるが、方形を呈するものと思われる。掘り込みは65cmと深い。

ピット、周溝は検出されなかった。

カマド　調査区内では検出されなかった。

遺物は少量出土している。

10号住居跡（第24・25図、図版７－３・18、表11）

本跡は調査区東側Ｇ－３グリッドで検出された。主軸方向はＮ－89°－Ｅである。規模は4.2×3.5ｍでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは45cmである。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。周溝は全周する。

カマド　東壁中央やや南寄りで検出された。壁外への掘り込みは70cmでなだらかに立ち上がる。袖は粘土と石で構築されている。支脚は検出されなかった。

遺物の出土量は少ない。

11号住居跡（第26・27図、図版８－１、表12）

本跡は調査区東側Ｈ－３グリッドで検出された。主軸方向はＮ－101°－Ｅである。規模は2.7×2.2ｍで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは15cmと浅い。

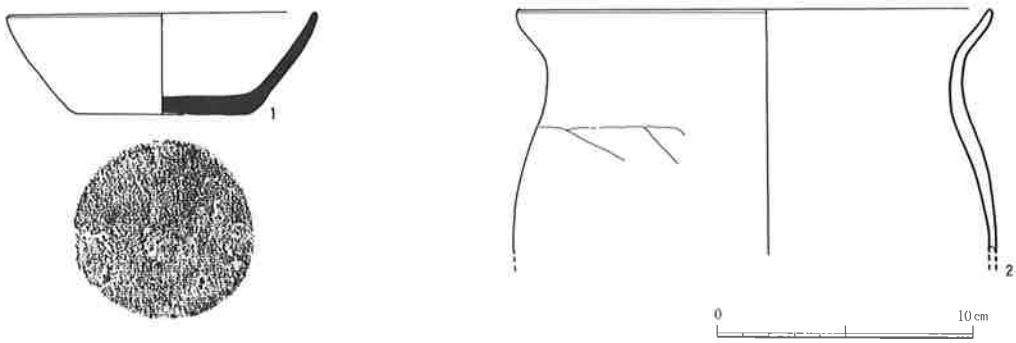
ピット、周溝は検出されなかった。南東側コーナーには貯蔵穴がある。

カマド　東壁中央南寄りで検出された。壁外への掘り込みは40cmでなだらかに立ち上がる。袖、支脚等は検出されなかった。

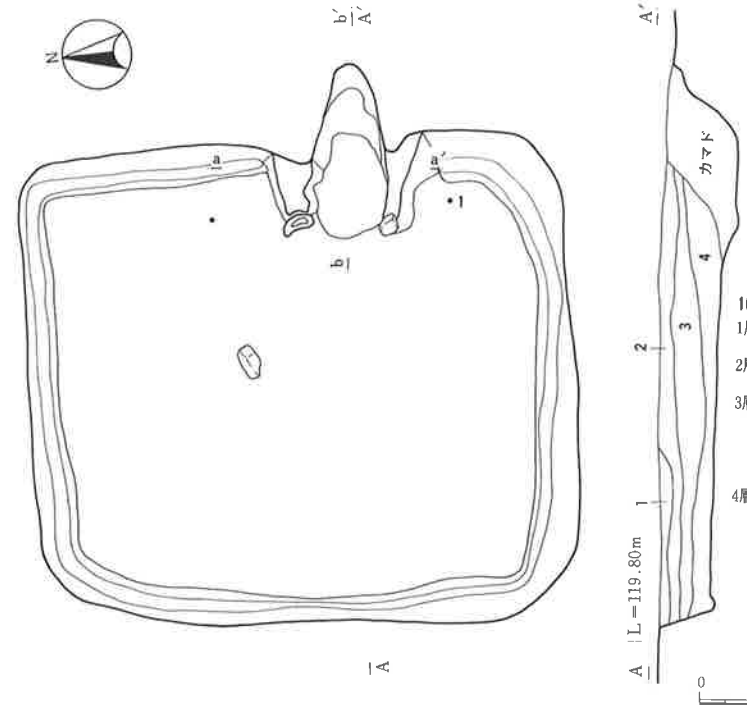
遺物はカマドから少量出土している。

表11　10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵坏	器高 4.0 口径12.2 底径 7.0	平底。体部直線的に立ち上がり外傾する。	ロクロ成形。 外面底部回転糸切り後周縁部手持ちヘラ削り。	黒色鉱物を少量含む。	灰色	還元	床着
2	土師甕	器高 (9.6) 口径19.6	縁部「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内

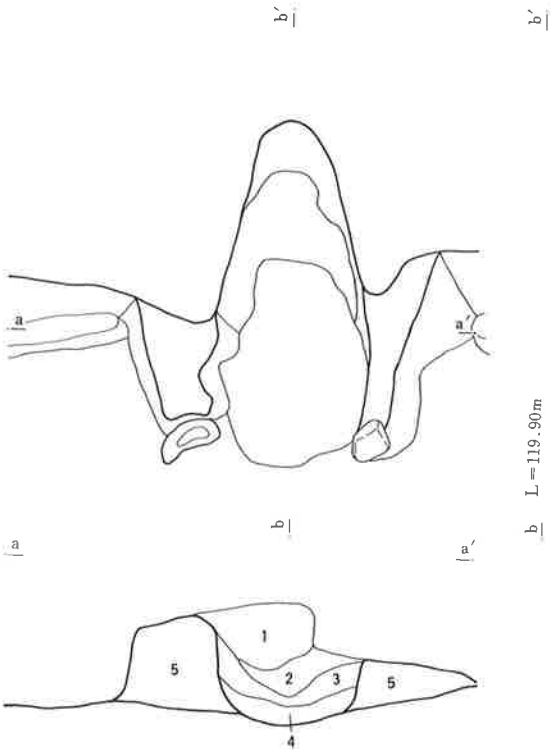


第24図　10号住居跡の遺物



10号住居跡

1層	暗褐色土	黄白色軽石粒子混入。硬い。
2層	暗褐色土	黄白色軽石粒子多量に混入。硬い。
3層	暗褐色土	黄白色軽石粒子多量に混入。ローム小ブロック（φ2cm）混入、黒色土混入。
4層	暗褐色土	黄白色軽石粒子少量混入。ローム小ブロック（φ1cm）混入。

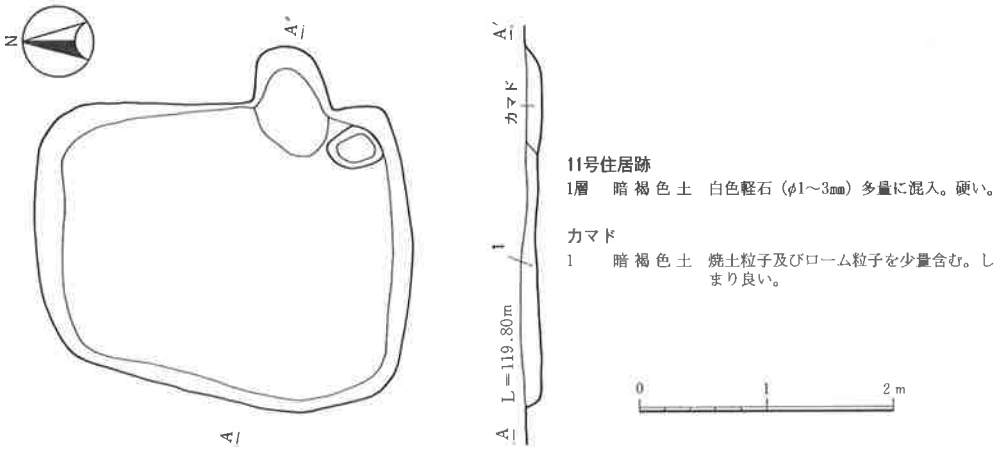


10号住居跡カマド

1	暗茶褐色土	白色、黄白色軽石粒子（φ1～2mm）少量混入。粘性強い。
2	暗茶褐色土	焼土粒子（φ0.5～1cm）少量混入。粘性強い。
3	暗茶褐色土	焼土多量に混入し、赤みを帯びる。
4	黒色土	青味を帯びる。
5	暗灰色粘土	袖部。先端に袖石とその抜けた穴がある。

0　1 m

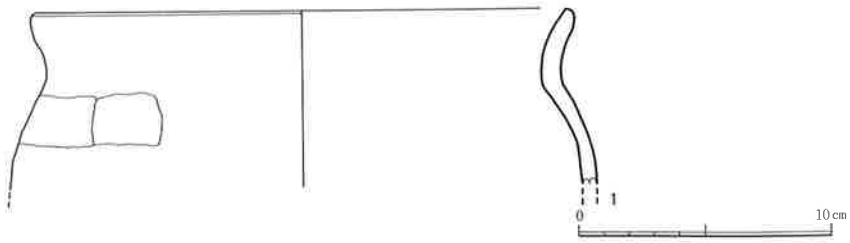
第25図　10号住居跡とカマド



第26図　11号住居跡

表12　11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師甕	器高 (7.0) 口径21.0 底径 —	口縁部短かく「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を含む。	褐色	酸化	カマド内



第27図　11号住居跡の遺物

12号住居跡（第28・29図、図版８－２、表13）

本跡は調査区東側Ｈ－３・４グリッドで検出された。東側は調査区外となっており、北側も未調査である。検出部分の壁高は45cm。

ピット、周溝、カマド等は検出されなかった。

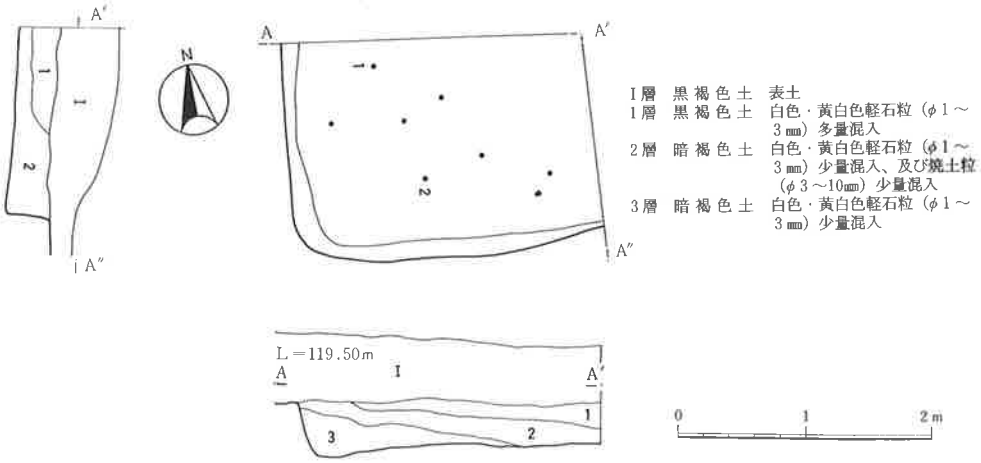
遺物は少量出土しており、墨書土器も検出されている。

13号住居跡（第30・31図、図版８－３・19、表14）

本跡は調査区北西側Ｅ－１グリッドで検出された。北東側が道路のために未調査となっている。規模は3.6×2.8ｍで長方形を呈する。

ピットは南東側コーナーに１基検出され、周溝は検出部分では南側の一部を除いて回る。カマドは不明である。床面の中央は良く踏み固められている。

遺物は中央部付近を中心に出土している。



第28　12号住居跡

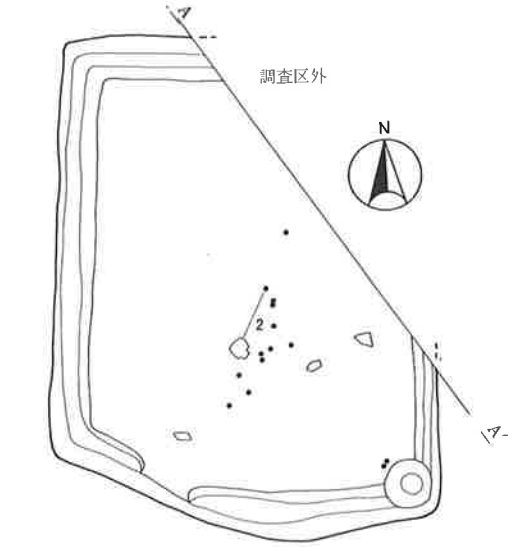
表13　12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 (2.8) 口径12.8 底径 —	底部平底ぎみ。体部内湾して立ち上がり口唇部外傾する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
2	土師坏	器高 (1.5)	平底ぎみの底部片。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	底部墨書「千」 覆土中
3	土師甕	器高 (7.0) 口径20.0 —	口縁部「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ヘラ調整。ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中

第29図　12号住居跡の遺物

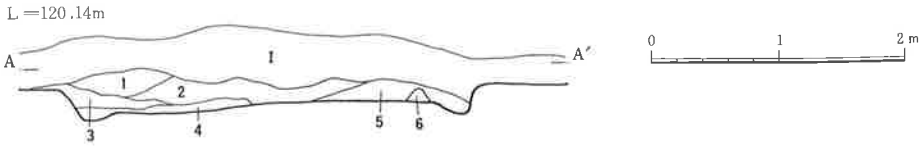
表14　13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師高台付椀	器高 2.3 口径 — 底径 4.5	高台部「ハ」の字状に開く。	高台取り付け後、ナデ。	砂粒・白色鉱物をやや多く含む。	黒褐色	酸化	床着
2	土師甕	器高 (15.7) 口径18.8	「コ」の字状口縁。口唇部外反する。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中

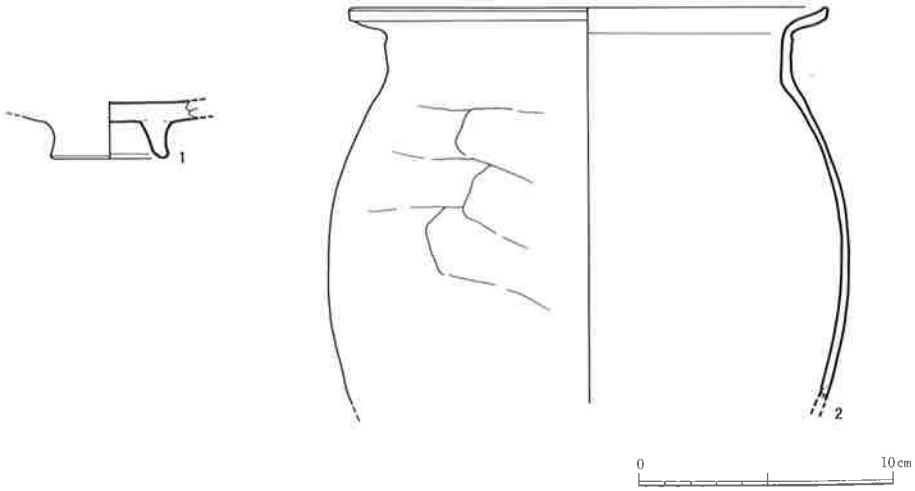


13号住居跡

Ⅰ層	黒褐色土	表土	
1層	暗褐色土	ローム粒子少量含む。粒性なし、しまり不良	
2層	暗褐色土	ローム粒子少量含む。粘性なし。	
3層	暗褐色土	ローム粒子多量に含む。粘性あり、しまり良い。	
4層	褐色土	ロームブロックを含む。しまり良い。	
5層	赤黄色土	ローム粒子、焼土ブロック多量に含む。粘性強い。	
6層	暗褐色土	ローム粒子含む。粘性あり、しまり良い。	



第30図　13号住居跡

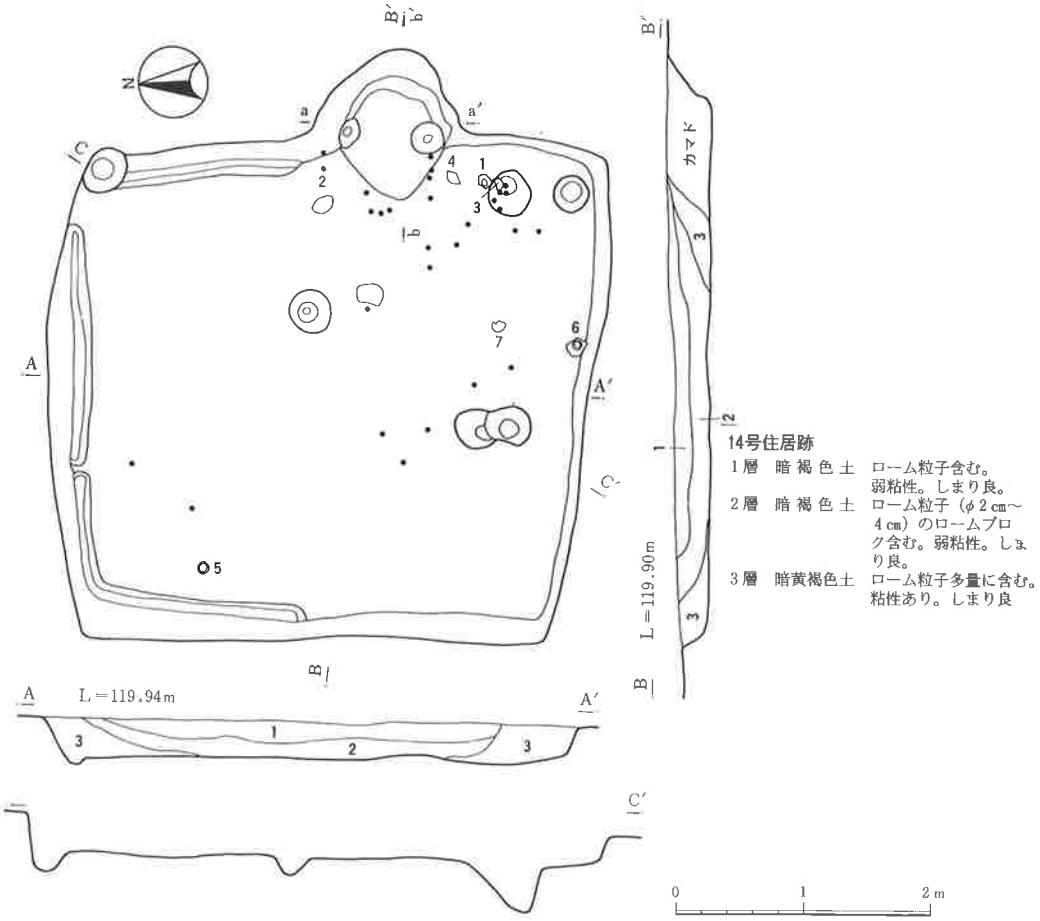


第31図　13号住居跡の遺物

14号住居跡(第32・33・34図、図版９－１・19・21、表15)

本跡は調査区西側Ｆ－０・１グリッドで検出された。主軸方向はＮ－90°－Ｅである。規模は3.7×４ｍでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは30㎝。

ピットは５基検出されているが、バラツキがあり、主柱穴とは考えられない。カマドの右側には貯蔵穴がある。周溝は北側半分のみ回る。



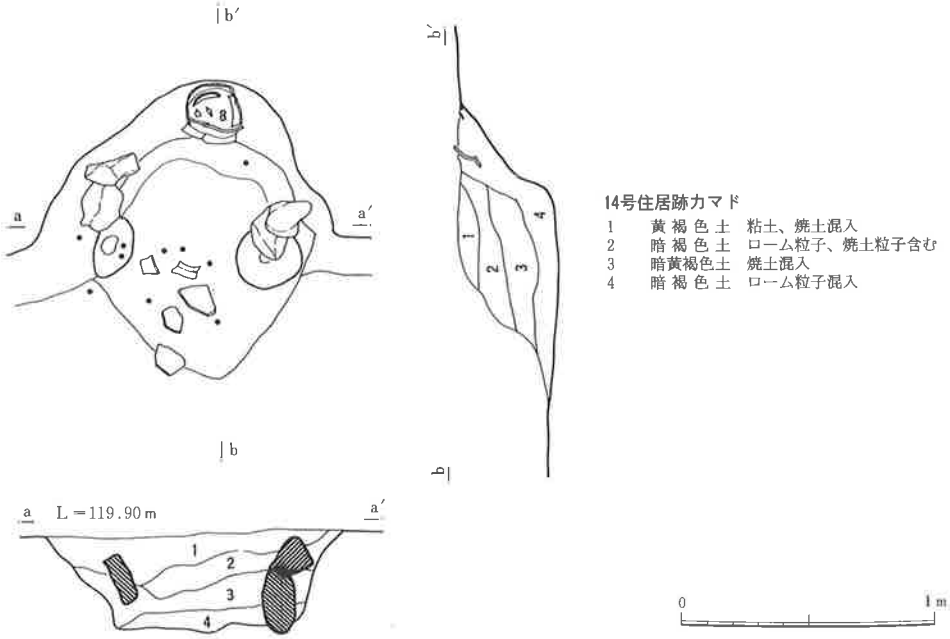
第32図　14号住居跡

表15　14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵坏	器高 4.2 口径13.8 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	砂粒・白色鉱物を含む。	灰色	還元	床着
2	須恵高台付埦	器高 5.1 口径14.2 底径 7.2	高台は短く台形で「ハ」の字状。体部は内湾して立ち上がり、口唇部外反する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後付高台。周縁部ナデ。内外面擦痕。	砂粒を少量含む。	灰色	還元	内面みこみ部は、墨痕が円形に残る。床着
3	須恵坏	器高 3.9 口径13.2 底径 6.1	底部は平底。体部は直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	砂粒・白色鉱物を含む。	灰色	還元	底部とみこみに墨書「車」床着
4	須恵坏	器高 3.5 口径13.4 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	砂粒を少量含む	灰褐色	還元	底部に墨書 床着
5	須恵高台付埦	器高 (2.0) 口径 — 底径 6.8	高台は「ハ」の字状に開く。	ロクロ成形。底部回転糸切り後付高台、ナデ。 内面は平滑。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	硯転用か 覆土中
6	須恵高台付皿	器高 2.7 口径13.6 底径 7.0	高台は「ハ」の字状に大きく開く。体部は直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後付高台。ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
7	土師高台付埦	器高 5.7 口径10.6 底径 6.0	高台の開きは小さく直線的に垂下する。体部は内湾して立ち上がる。	高台部及び外面はていねいなナデ。内面は細かに磨かれ黒色処理される。	緻密	内黒色 外褐色	酸化	底部及び外面体部に墨書「千」、覆土中
8	土師甕	器高 (12.5) 口径20.4	口縁部短かく「く」の字状に外反する。器内厚い。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。内面ヘラ調整、ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内

カマド　東壁中央に位置する。煙道の壁外への掘り込みは55cmで急激に立ち上がる。袖は石で構築され、煙道付近に甕がおかれている。

遺物はカマド、貯蔵穴付近を中心にまとまって出土している。



第33図　14号住居跡のカマド

15号住居跡(第35・36図、図版９－２・９－３・19、表16)

本跡は調査区中央Ｆ－１グリッドで検出された。主軸方向はＮ－90°－Ｅである。規模は2.1×2.6ｍと小形で横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは40cmである。

ピットは壁際に浅いものが検出され、中央に皿状のものが検出されている。周溝は南側と東側の一部を除いて回る。

カマド　東側中央に位置する。煙道の壁外への掘り込みは75cmでなだらかに立ち上がる。袖は前面に甑、後に石がおかれている。支脚は検出されていない。

遺物はカマド付近を中心にやや多く出土している。

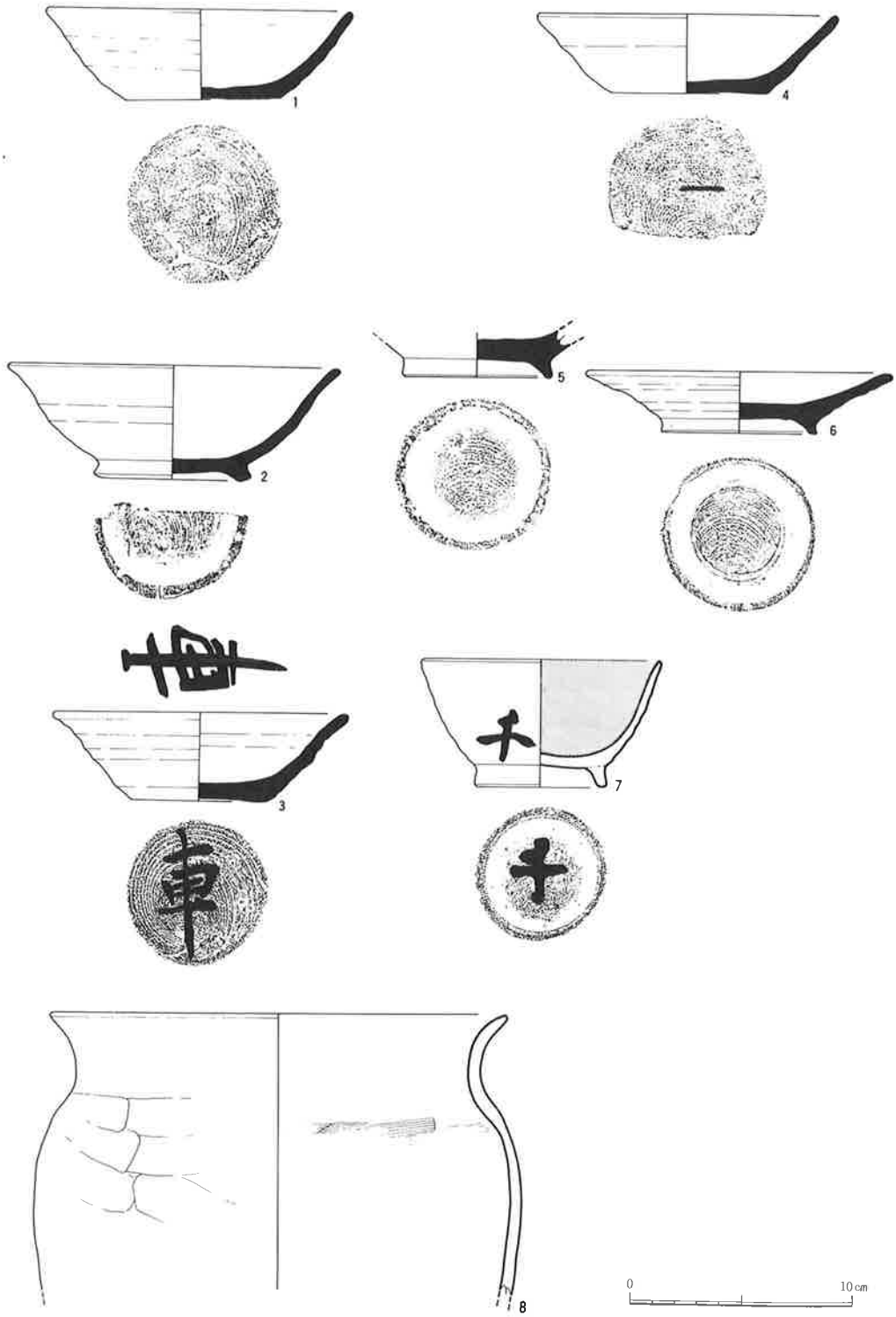
16号住居跡(第37図、図版10－１)

本跡は調査区中央Ｆ－２、Ｆ－３、Ｇ－２、Ｇ－３グリッドで検出された。主軸方向はＮ－98°－Ｅである。北側は道路のため未調査である。規模は東西方向で3.4ｍを計る。壁高は20cmである。

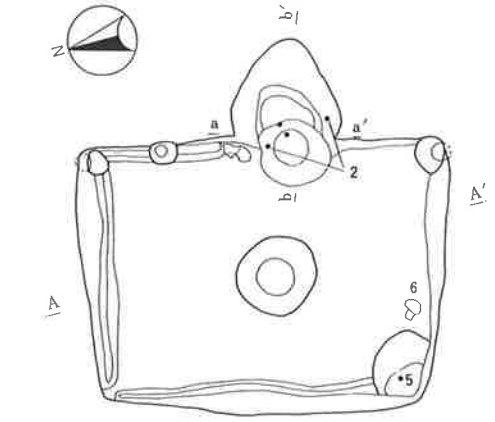
南東側コーナーには貯蔵穴があり、周溝は調査部分では回る。

カマド　東壁に位置する。煙道の壁外への掘り込みは70cmでゆるやかに立ち上がる。袖、支脚等は検出されなかった。

遺物は調査部分からは出土していない。

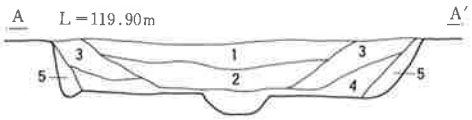


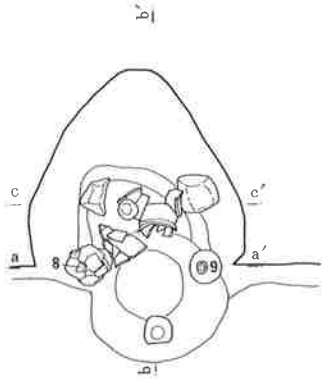
第34図　14号住居跡の遺物

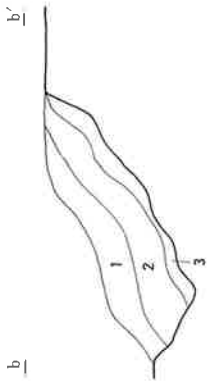


15号住居跡

1層　黒褐色土　軽石、ローム粒子少量含む。粘性なし、しまり良く硬い。
2層　黒　色　土　軽石・ロームブロック含む。弱粘性、しまり良。
3層　暗褐色土　ローム粒子含む。粘性あり、しまり良。
4層　暗褐色土　ローム粒子含む。粘性あり、しまりややある。
5層　暗黄褐色土　ローム粒子多量に含む、弱粘性、しまりややある。

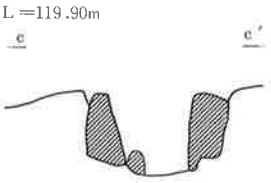


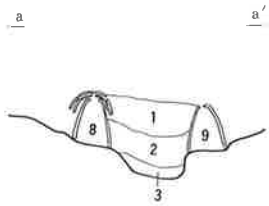




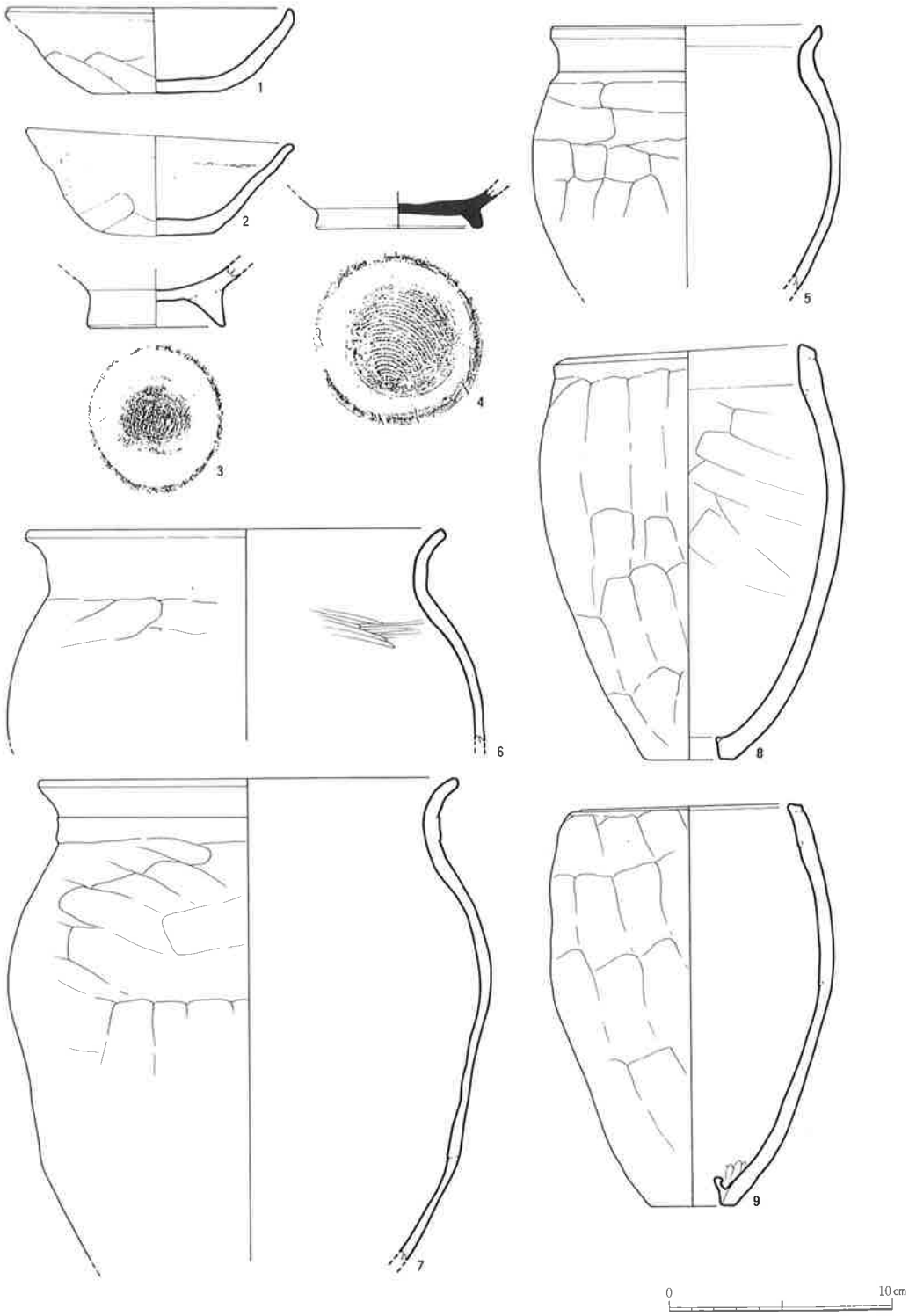
15号住居跡、カマド

1.　黄褐色土　焼土混入。
2.　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子混入。
3.　暗黄褐色土　焼土多量混入。





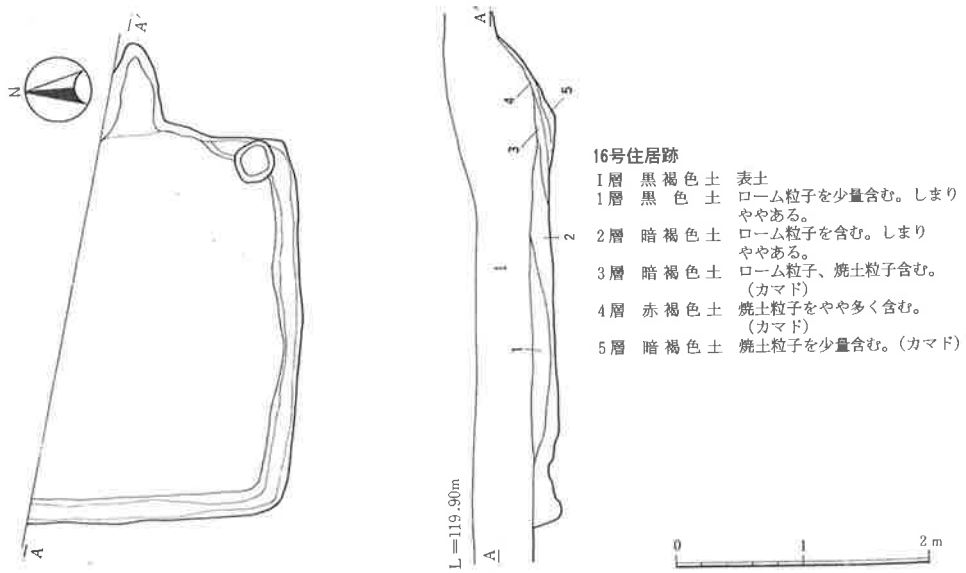
第35図　15号住居跡とカマド



第36図　15号住居跡の遺物

表16　15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 4.0 口径12.8 底径 6.0	平底。体部は直線的に外傾し、口唇部直立ぎみになる。厚手。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色鉱物を含む。	褐色	酸化	床着
2	土師坏	器高 4.9 口径11.9 底径 －	不安定な平底。体部直線的に外傾する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	白色・黒色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
3	土師 高台付椀	器高 2.7 口径 － 底径 6.0	高台は長く「ハ」の字状に開く。	外面底部付高台後丁寧なナデ。	砂粒・白色鉱物をやや多く含む。	褐色	酸化	覆土中
4	須恵 高台付椀	器高 (1.7) 口径 － 底径 7.5	高台は短かく「ハ」の字状に開く。	ロクロ成形。 底部回転糸切後付高台、ナデ。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
5	土師 小形甕	器高 (11.8) 口径12.0 底径 －	口縁部短かく開き、口唇部直立ぎみになる。	外面胴上半部横方向の中央部縦方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	床着
6	土師 甕	器高 9.5 口径 (17.8)	口縁部「コ」の字状を呈する。器内やや厚い。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を含む。	褐色	酸化	床着
7	土師 甕	器高 (21.8) 口径18.8 底径 －	口縁部短かく「コ」の字状を呈する。器肉厚く、最下径は胴上半部。	外面胴上半部横方向の中央部縦方向のヘラ削り。 内面ナデ。	砂粒・赤色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
8	土師 甑	器高18.5 口径10.5 底径 4.0	単孔。口縁部短かく直立する。	外面胴部縦方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色・赤色鉱物を含む。	褐色	酸化	カマド内
9	土師 甑	器高20.0 口径 9.3 底径 3.8	単孔。口縁部短かく直立する。	外面胴部縦方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色・赤色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内



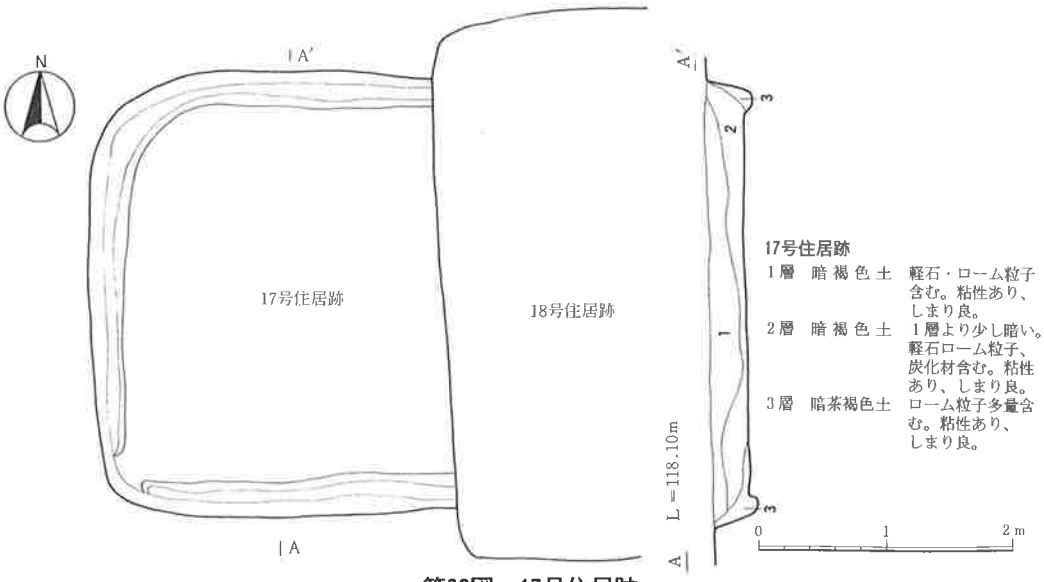
第37図　16号住居跡

17号住居跡（第38・39図、図版10－2、表17）

本跡は調査区南西側J－0、K－0グリッドで検出された。東側で18号住居跡と重複し、本跡の方が古い。主軸方向はほぼ東に向くと思われる。規模は南北方向で3.3mを計る。確認面からの掘り込みは30cmである。

周溝は南西側のコーナー付近を除き、回る。ピット等は検出されていない。カマドは東壁にあったものと思われるが、18号住居跡に壊されている。

遺物は少量出土している。

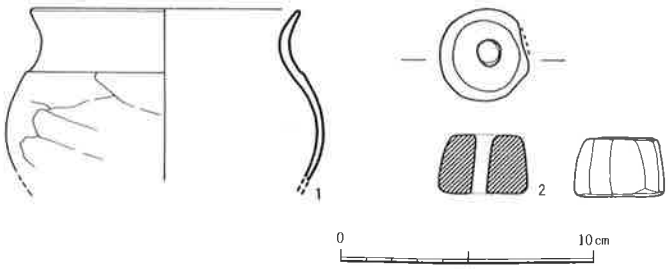


第38図　17号住居跡

表17　17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵坏	器高 3.9 口径11.4 底径 8.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
2	須恵硯	器高 3.0 口径 (14.8) 底径 (14.4)	円面硯の破片か。	ロクロ成形。	黒色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中

第39図　17号住居跡の遺物



第40図　18号住居跡の遺物

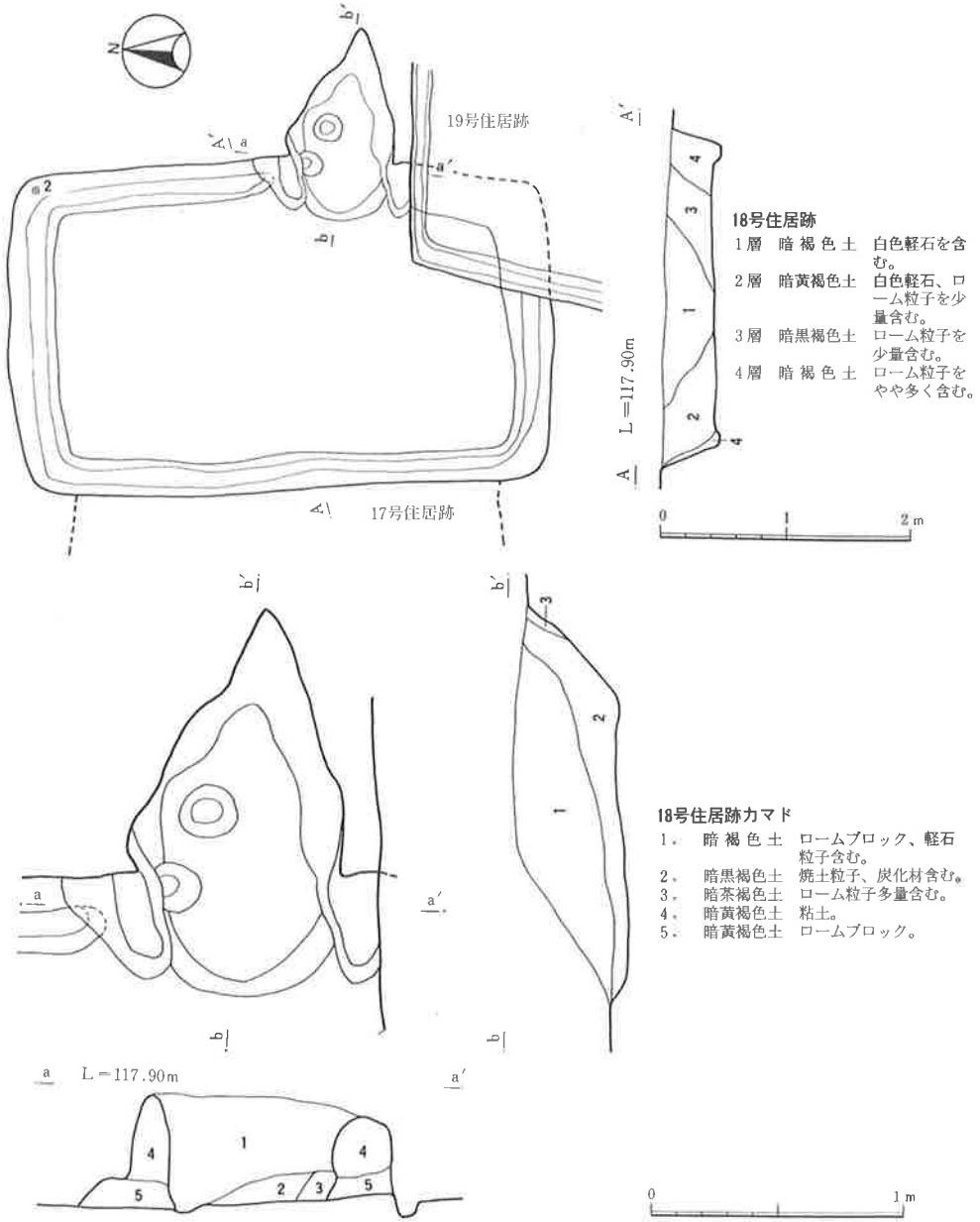
18号住居跡(第40・41図、図版10－2：19・22、表18)

本跡は調査区南西側Ｊ－０、Ｋ－０クリッドで検出された。西側で17号住居跡を切り、南東側で19号住居跡に切られている。主軸方向はＮ－93°－Ｅである。規模は4.1×2.3ｍで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは40cmである。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。周溝は全周するものと思われる。

カマド　東壁やや南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは105cmで急激に立ち上がる。袖は白色粘土で構築されている。支脚は検出されていない。

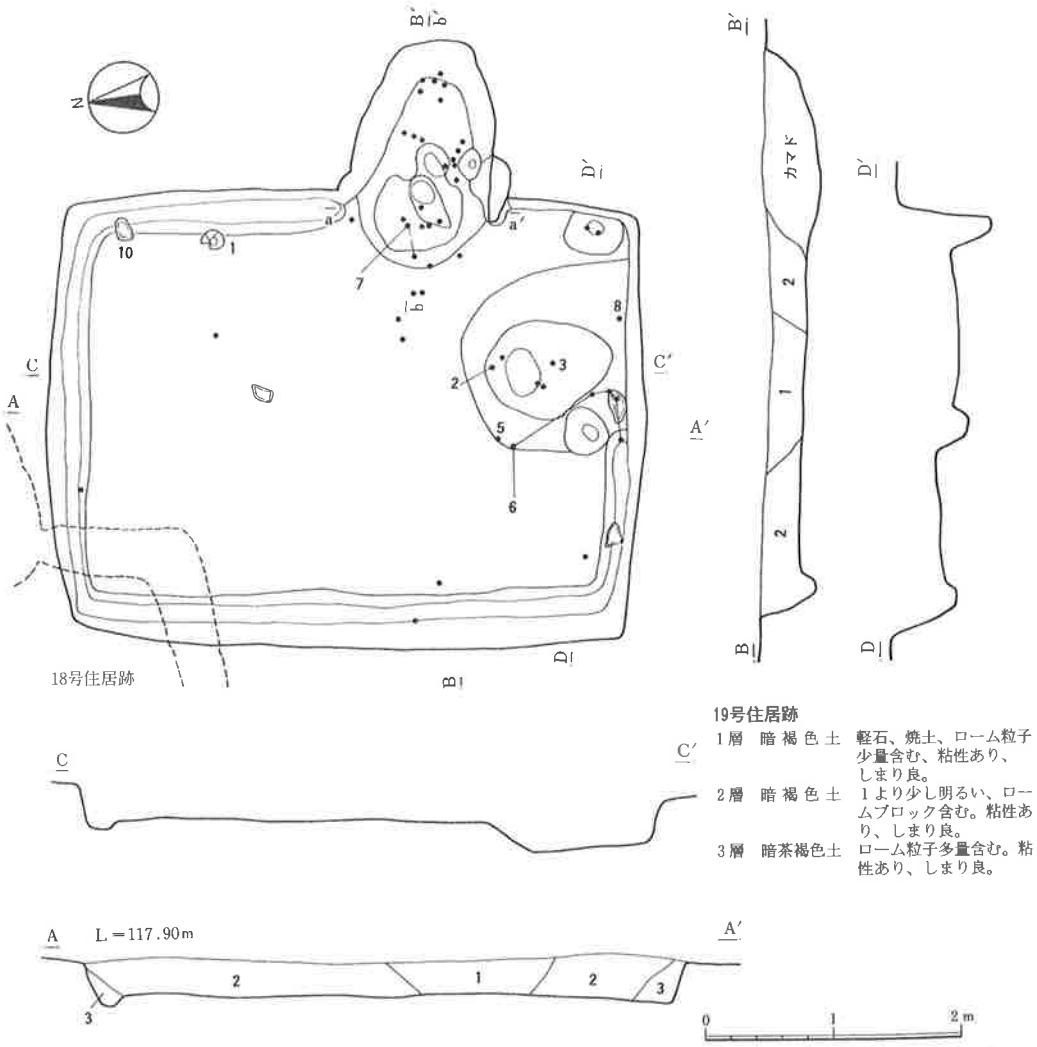
遺物は少量の出土であるが、北側周溝より紡錘車が出土している。



第41図　18号住居跡とカマド

表18　18号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師小形甕	器高 (6.8) 口径10.6 底径 －	口縁部「く」の字状に外反する。器肉薄い。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。	緻密	褐色	酸化	覆土中
2	石製品紡錘車	高さ 2.3 口径 3.5	肉厚。	穿孔は両方向から行われている。	凝灰岩			覆土中



第42図　19号住居跡

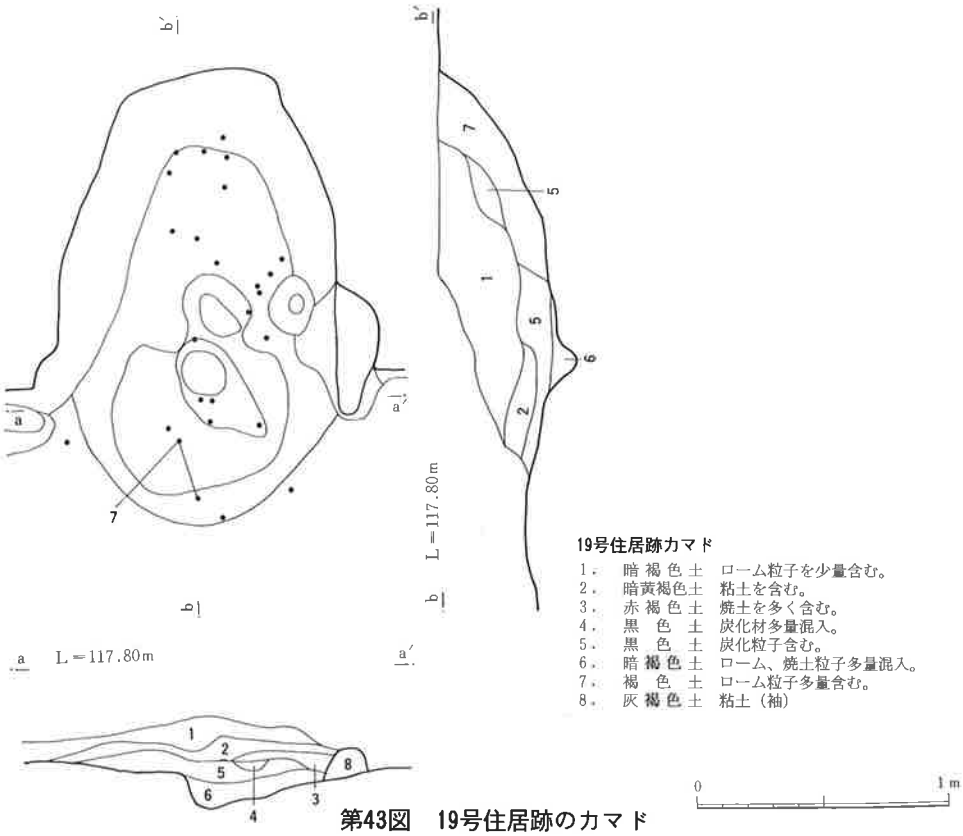
19号住居跡(第42・43・44図、図版10－3・19・22、表19)

本跡は調査区南西側K－0グリッドで検出された。北西側で18号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。主軸方向はN－98°－Eである。規模は3.3×4.5mでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは35cmである。

南東側コーナーには貯蔵穴があり、南側には皿状の落ち込みがある。

カマド　東壁やや南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは120cmで緩やかに立ち上がる。袖は右側のみの検出で、粘土が使用されている。

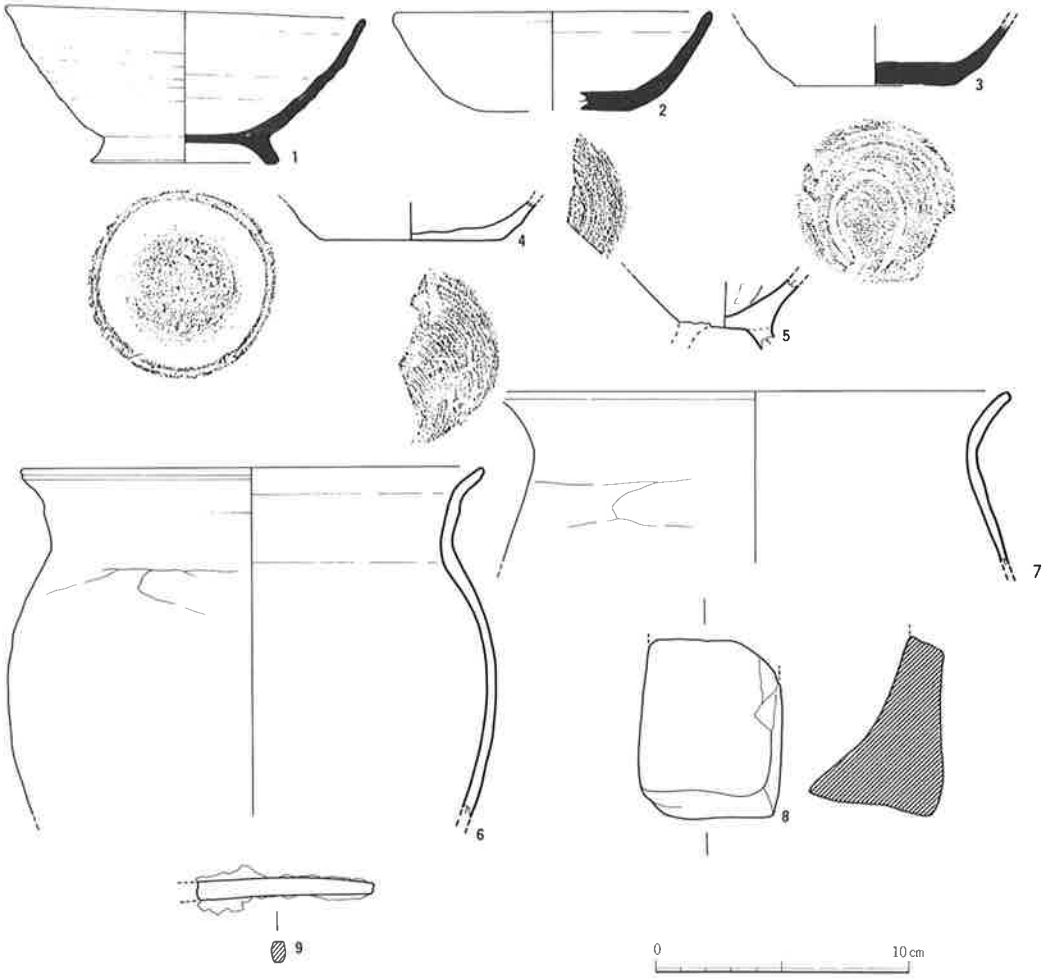
遺物は、カマド及びその付近からまとまって出土している。



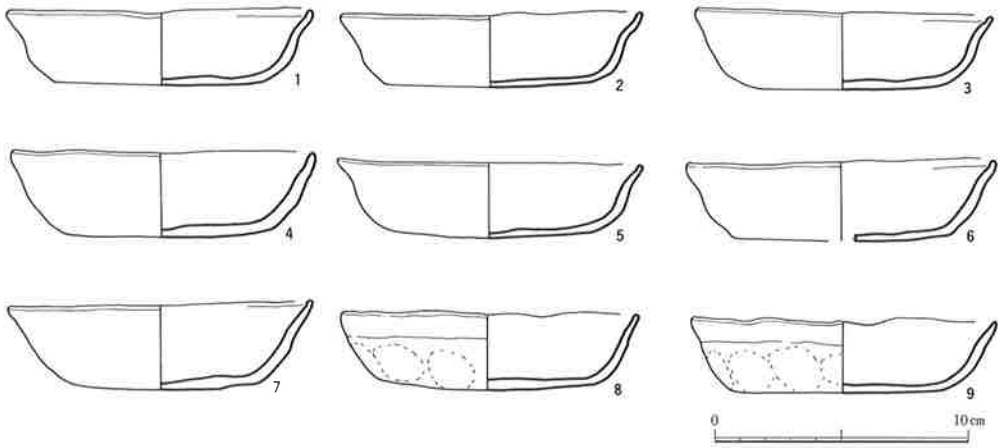
第43図　19号住居跡のカマド

表19　19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵高台付椀	器高 6.2 口径14.3 底径 7.3	高台は「ハ」の字状に開き端部で反る。体部は内湾し、口縁では直線的になる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後付高台、丁寧なナデ。	白色鉱物をやや多く含む。	暗灰色	還元	器面はガスが抜けた孔が見られる。床着
2	須恵坏	器高 3.9 口径12.2 底径 6.0	底部は丸味を帯びた平底で体部は内湾気味に立つ。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	ピット内
3	須恵坏	器高 (2.4) 口径 — 底径 6.4	底部は平底。体部は内湾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後無調整。	緻密	灰色	還元	ピット内
4	須恵坏	器高 (1.6) 口径 — 底径 7.4	底部は平底。体部は内湾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後無調整。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5	土師台付甕	器高 (2.8)	甕底部と脚の接合部分の破片。脚部「ハ」の字状に開く。	平底の底部を整形した後に脚部を付す。外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
6	土師甕	器高 (13.8) 口径18.2 底径 —	口縁部「コ」の字状に開く。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	褐色	酸化	周溝内
7	土師甕	器高 (6.8) 器高19.8 器高 —	口縁部「く」の字状に開く。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
8	石製品砥石	縦 7.1 横 5.8 厚 5.2	平面形はほぼ長方形を呈するもので上下両面は良く使用される。断面形は分銅形を呈する。側面に僅かな条線が見られるものの使用は少ない。		凝灰岩	灰白色		ピット内
9	鉄製品刀子	残存長 6.9	刃先部欠。					覆土中



第44図　19号住居跡の遺物



第45図　20号住居跡の遺物 (1)

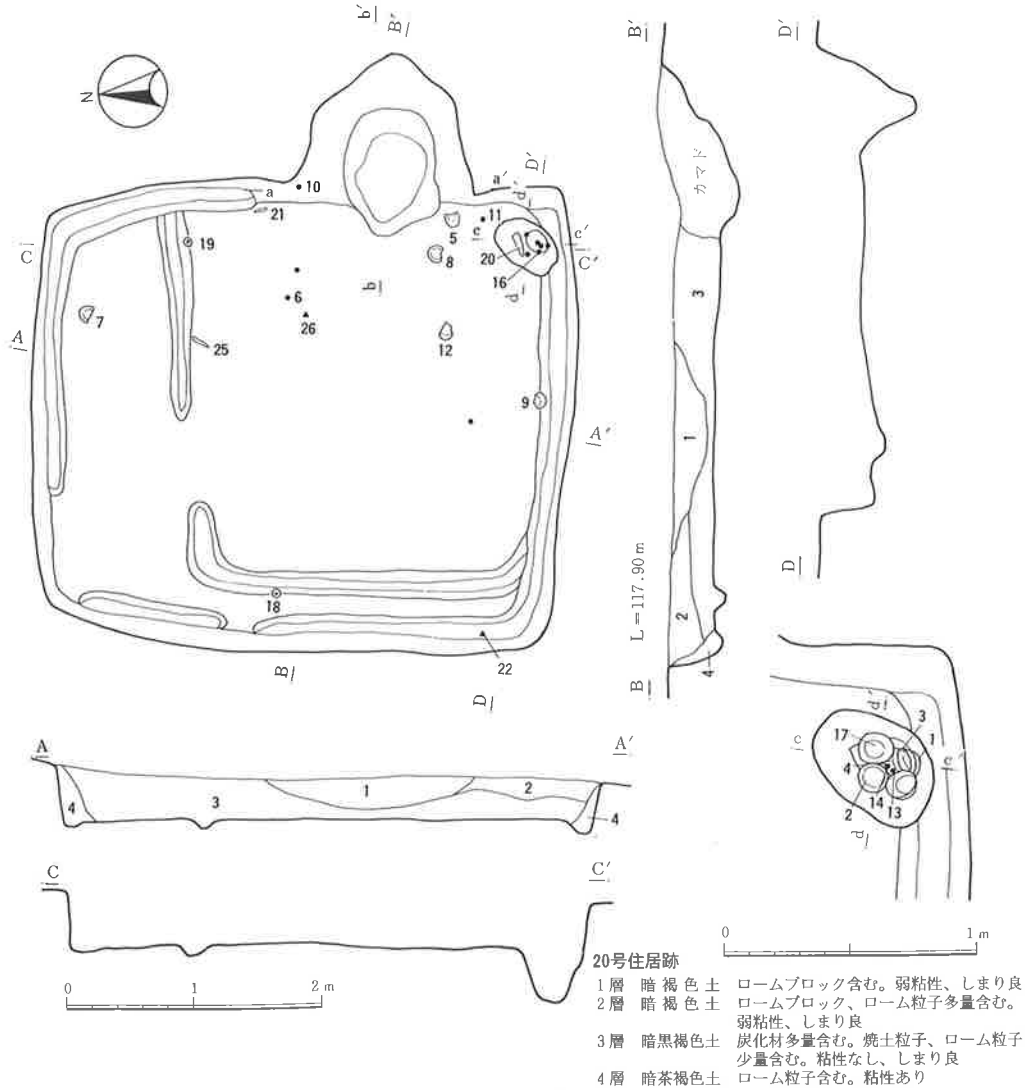
20号住居跡(第45・46・47・48・49図、図版11－1・20・21・22、表20・21・22)

本跡は調査区南側K－1グリッドで検出された。主軸方向はN－100°－Eである。拡張住居跡と思われ、拡張前は3.1×3.1mでほぼ正方形を呈し、拡張後は3.5×4mでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは35cmである。

ピットは検出されず、南東側コーナーには貯蔵穴がある。周溝は建て替え前、後共にあり、カマド付近と北側の一部を除いて回る。

カマド　東壁中央南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは1mでなだらかに立ち上がる。袖等は検出されなかった。

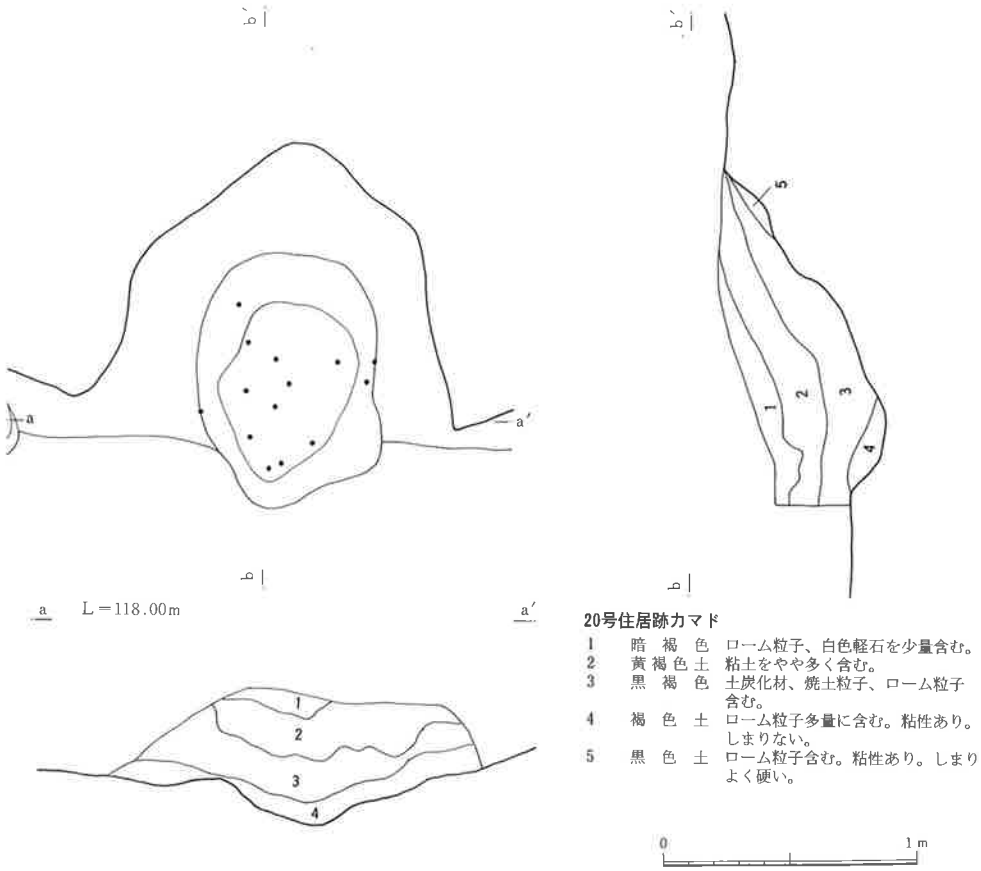
遺物は坏類を中心にやや多く出土し、貯蔵穴からはまとまって出土している。又紡錘車が2個検出され、線刻がなされている。



20号住居跡

1層	暗褐色土	ロームブロック含む。弱粘性、しまり良
2層	暗褐色土	ロームブロック、ローム粒子多量含む。弱粘性、しまり良
3層	暗黒褐色土	炭化材多量含む。焼土粒子、ローム粒子少量含む。粘性なし、しまり良
4層	暗茶褐色土	ローム粒子含む。粘性あり

第46図　20号住居跡



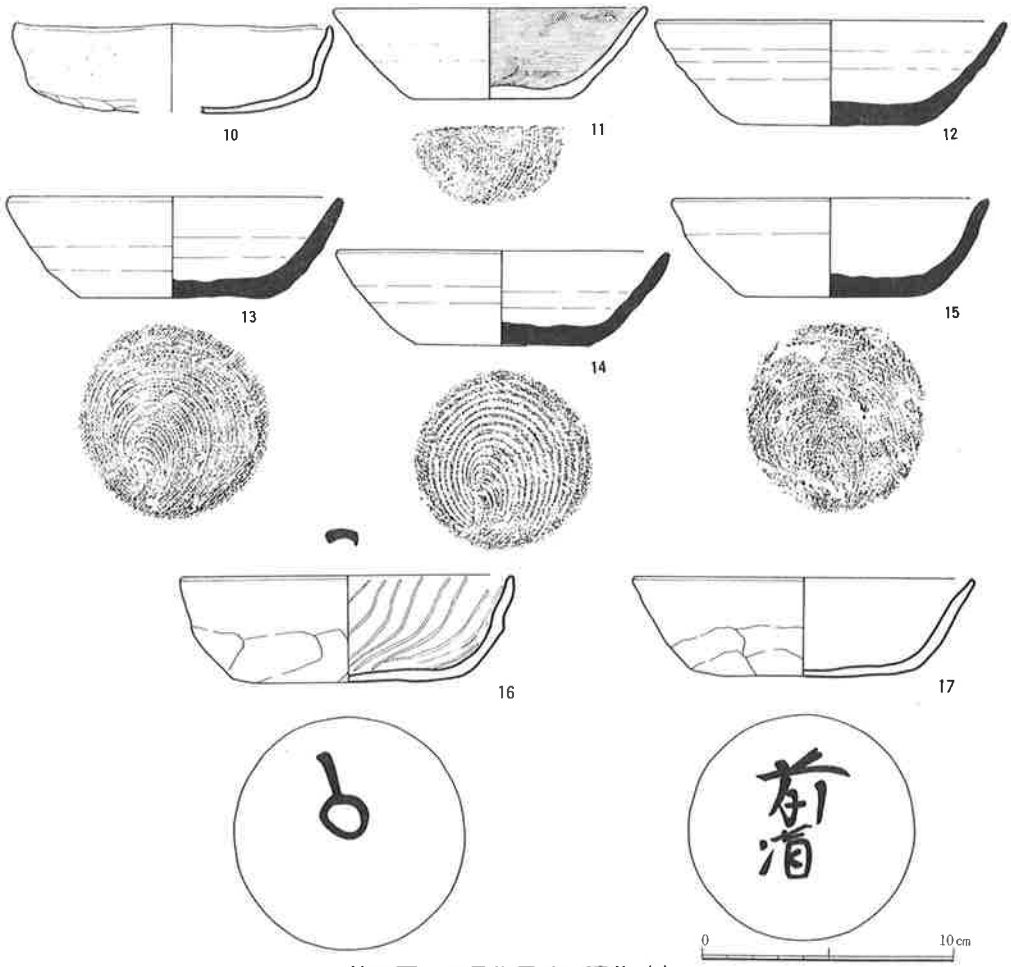
第47図　20号住居跡のカマド

表20　20号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 2.9 口径12.0 底径 8.4	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	黒褐色	酸化	貯蔵穴
2	土師坏	器高 2.9 口径11.8 底径 8.6	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	黒褐色	酸化	貯蔵穴
3	土師坏	器高 3.2 口径11.7 底径 8.0	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	貯蔵穴
4	土師坏	器高 3.5 口径11.9 底径 8.5	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	貯蔵穴
5	土師坏	器高 3.1 口径12.0 底径 8.1	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
6	土師坏	器高 3.1 口径12.0 底径 8.6	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	暗褐色	酸化	覆土中
7	土師坏	器高 3.6 口径12.0 底径 7.3	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	床着
8	土師坏	器高 3.0 口径11.6 底径 8.4	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
9	土師坏	器高 3.1 口径12.0 底径 8.5	底部平底。体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 外面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着

表21　20号住居跡出土遺物観察表 (2)

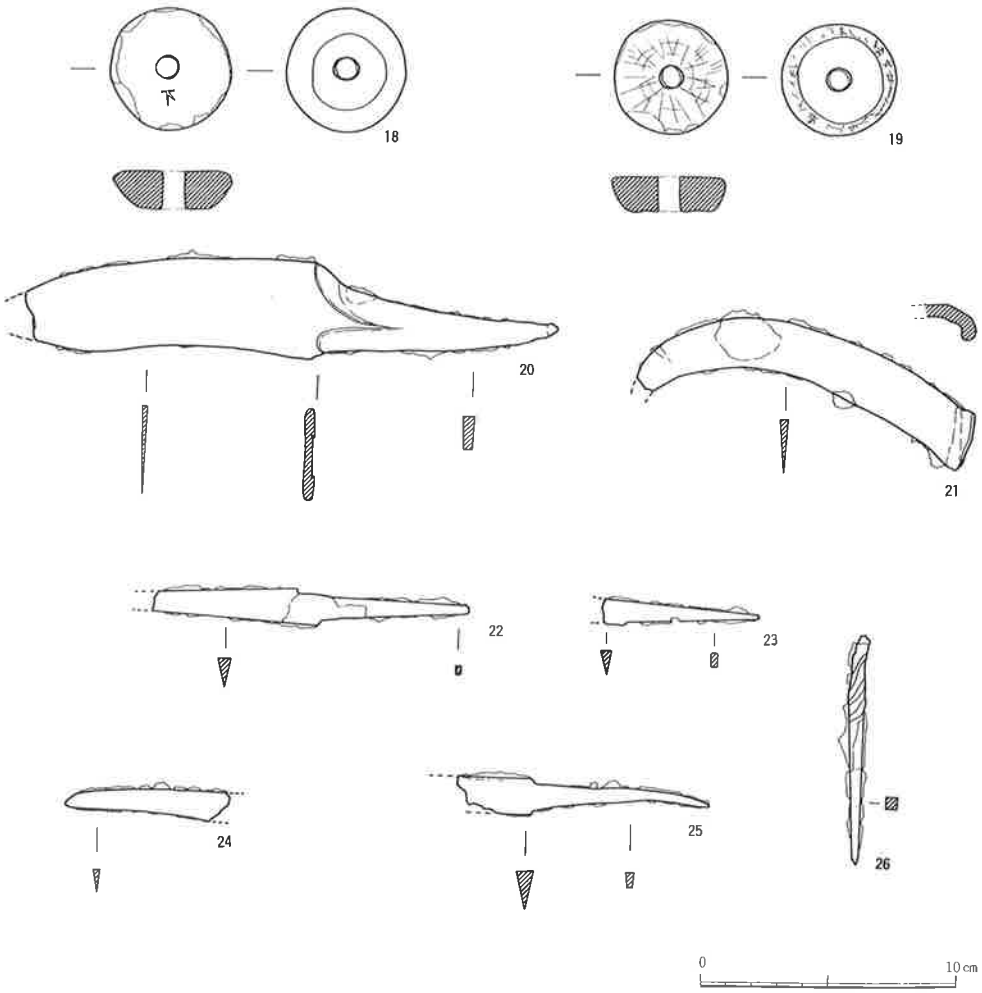
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
10	土師坏	器高 3.5 口径13.4 底径 －	底部平底。体部内湾して立ち上がり、口縁部外傾する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
11	土師坏	器高 3.6 口径12.2 底径 6.2	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後無調整。内面黒色処理後、皮膜（漆か）される。丁寧なミガキ。	赤色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
12	須恵坏	器高 4.1 口径13.8 底径 7.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後無調整。	砂粒、白色鉱物含む。	灰色	還元	覆土中
13	須恵坏	器高 4.1 口径13.8 底径 7.0	底部平底。体部直線的ら外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	貯蔵穴
14	須恵坏	器高 3.7 口径13.0 底径 7.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後無調整。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	貯蔵穴
15	須恵坏	器高 3.9 口径12.4 底径 6.6	底部平底。体部内湾して立ち上がり、口縁部外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
16	土師坏	器高 4.2 口径13.0 底径 9.2	底部平底。体部内湾して立ち上がり、稜を持って体部外傾する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面放射状暗文。	白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	内面底部墨書「。」記号ヵ 貯蔵穴
17	土師坏	器高 3.9 口径13.4 底径 9.0	底部平底。口縁部直線的に外傾する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	暗褐色	酸化	外面底部墨書「前酒」 貯蔵穴



第48図　20号住居跡の遺物 (2)

表22　20号住居跡出土遺物観察表 (3)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	備考
18	石製品 紡錘車	直径 4.5 厚さ 1.5 孔径 0.9	断面台形を呈する。偏平で、「下」の字が書かれている。重量57g。	床着
19	石製品 紡錘車	直径 4.6 厚さ 1.4 孔径 0.8	断面台形を呈する。偏平で側面に文字が書かれており、上面部にも線刻がなされている。重量48g。	線刻「□□若代□□去乃女」 石ぶ 僧 石 こせめ 的 床着
20	鉄製品 小刀	残存長 21.4	先端部分を欠損する。関から茎にかけて折返しがある。	覆土中
21	鉄製品 鎌	残存長 13.4	ほぼ完形である。刃部は内湾する。基部は折り曲がっている。	覆土中
22	鉄製品 刀子	残存長 12.7	先端部を欠損する。両関。	床着
23	鉄製品 刀子	残存長 6.3	刃部のほとんどを欠損する。	覆土中
24	鉄製品 刀子	残存長 6.6	刃部のみの残存。	床着
25	鉄製品 刀子	残存長 10.1	刃先部を欠損する。両関。	床着
26	鉄製品 鏃	残存長 9.1	ねじり鏃。先端部欠損。	覆土中



第49図　20号住居跡の遺物 (3)

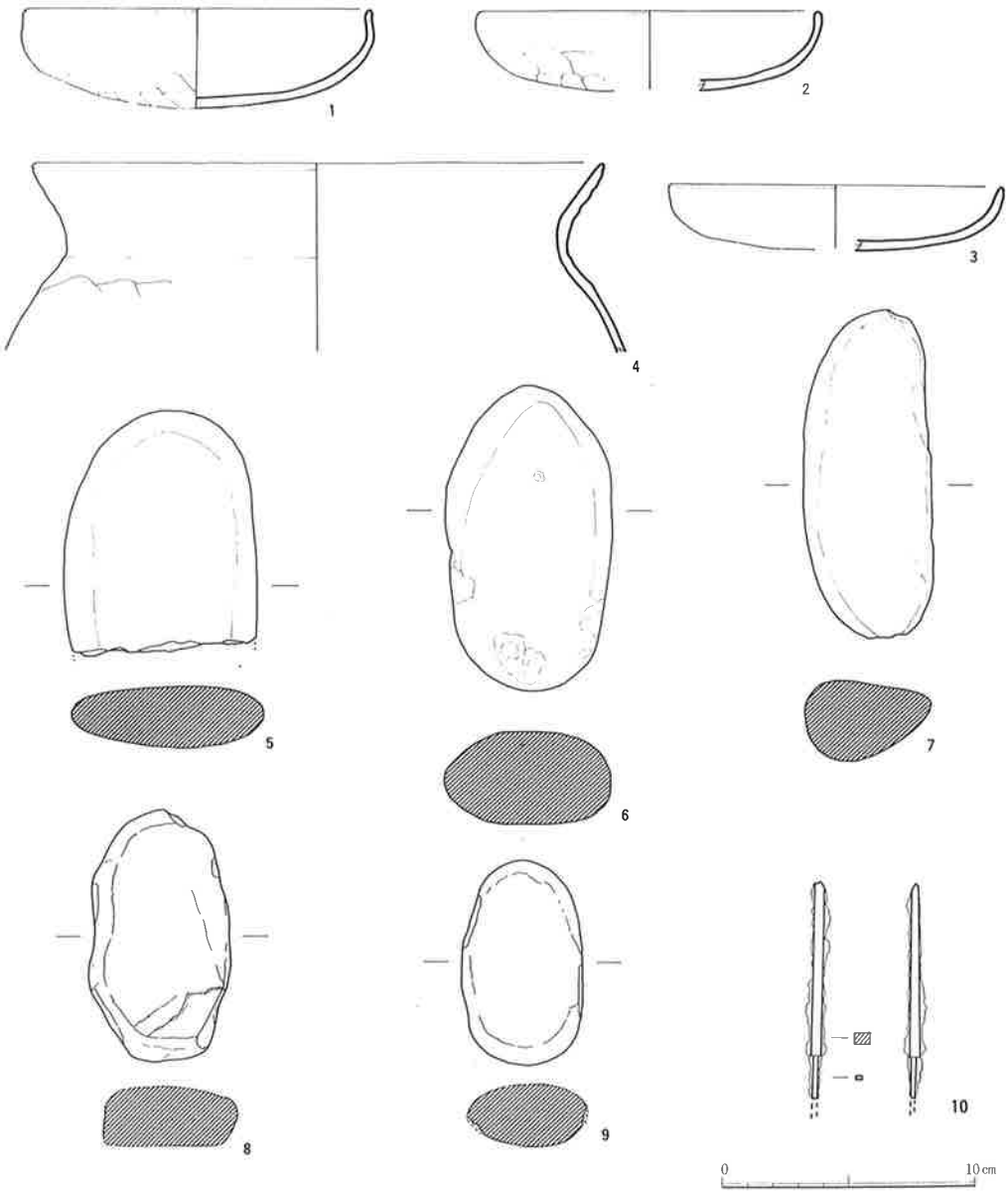
21号住居跡(第50・51・52図、図版11－2・20・22、表23)

本跡は調査区南西側K－aグリッドで検出された。西側は調査区外となっている。主軸方向はN－88°－Eである。規模は5×3.5mで横長の長方形を呈する。壁高は50cmである。

周溝は調査区内では回る。ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマド　東壁やや南寄りで検出された。煙道の壁外への掘り込みは65cmで、なだらかに立ち上がる。袖、支脚等は検出されなかった。

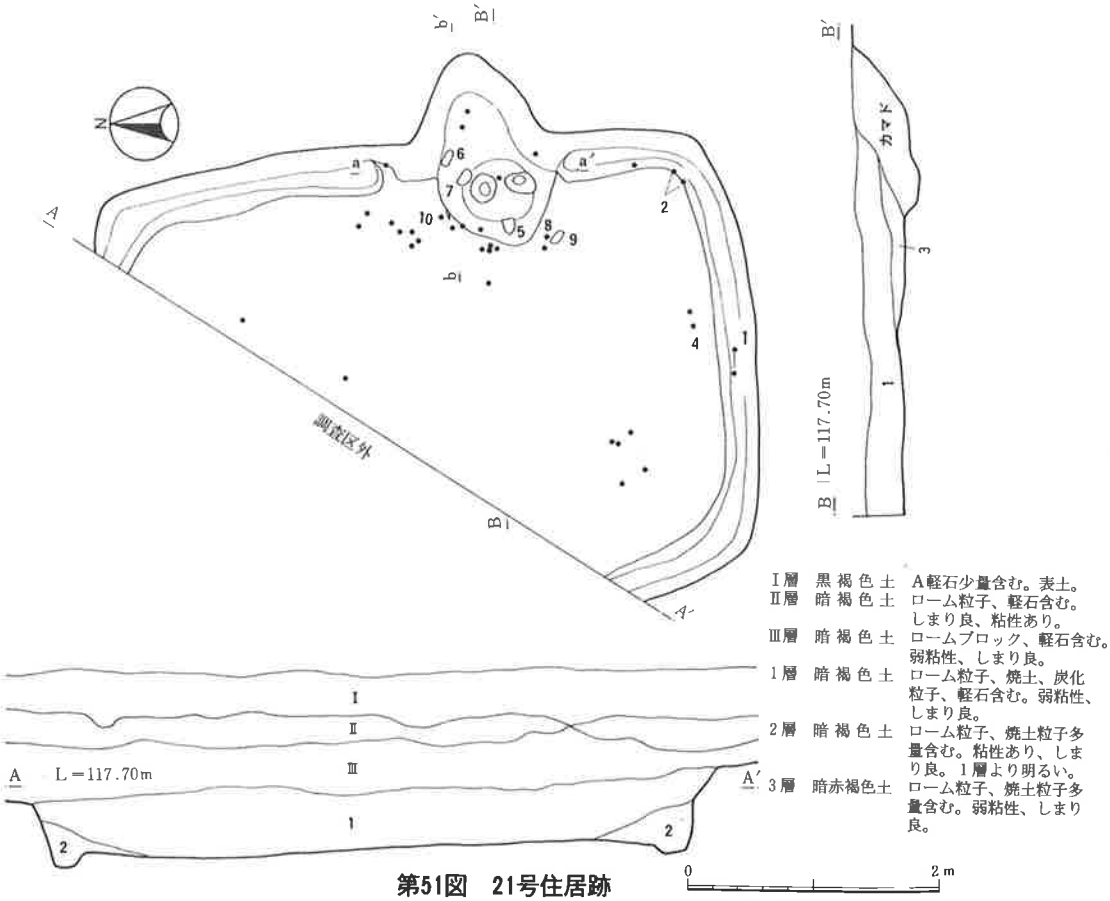
遺物はカマド付近を中心に出土している。



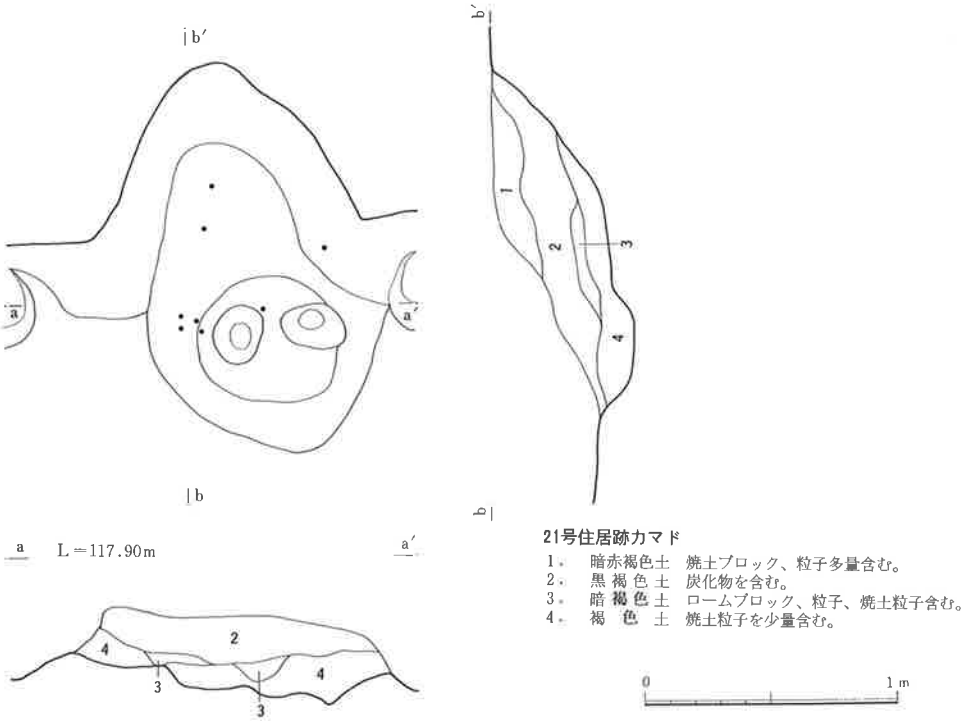
第50図　21号住居跡の遺物

表23　21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 4.0 口径 3.6 —	丸底。体部内湾して立ち上がり、口唇部直立する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
2	土師坏	器高 3.2 口径13.4 底径 —	丸底。体部内湾して立ち上がり、口唇部直立する。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面口縁部ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
3	土師坏	器高 2.6 口径13.2 底径 —	丸底。体部内湾して立ち上がり、口唇部外傾ぎみになる。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	褐色	酸化	覆土中
4	土師甕	器高 (7.6) 口径22.6 底径 —	口縁部「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向ヘヘラ削り。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	床着
5	石	縦 (9.6) 横 7.7 厚さ 2.5	長円形を呈するものと思われる。全面磨毛している。礫編石か。 重量334g。		安山岩			覆土中
6	石	縦 12.4 横 6.5 厚さ 3.3	長円形を呈する。全体に磨かれている。礫編石か。 重量365g。		安山岩			覆土中
7	石	縦 13.1 横 5.1 厚さ 3.2	長円形を呈する。全体に磨かれている。礫編石か。 重量307g。		安山岩			覆土中
8	石	縦 10.0 横 5.7 厚さ 2.4	やや歪な楕円形。全体に磨かれている。礫編石か。 重量219g。		安山岩			床着
9	床着	縦 8.2 横 4.7 厚さ 2.5	楕円形。5～8に比して小形で、よく磨かれている。側面が一部剝離している。礫編石か。 重量163g。		安山岩			
10	鉄製品鏃	残存長 8.6	剣形。					覆土中



第51図　21号住居跡



第52図　21号住居跡のカマド

22号住居跡（第53図、図版11－３）

本跡は調査区南西側Ｋ－ａ、Ｌ－ａグリッドで検出された。南側で23号住居跡と重複し、本跡の方が古い。主軸方向はＮ－87°－Ｅである。規模は東西方向が3.5ｍでほぼ正方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは40㎝である。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。周溝は検出部分では東側の一部を除いて回る。

カマド　東壁中央南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは50㎝で、急激に立ち上がる。袖は粘土で構築されている。支脚は検出されなかった。

遺物は細片のみ少量出土している。

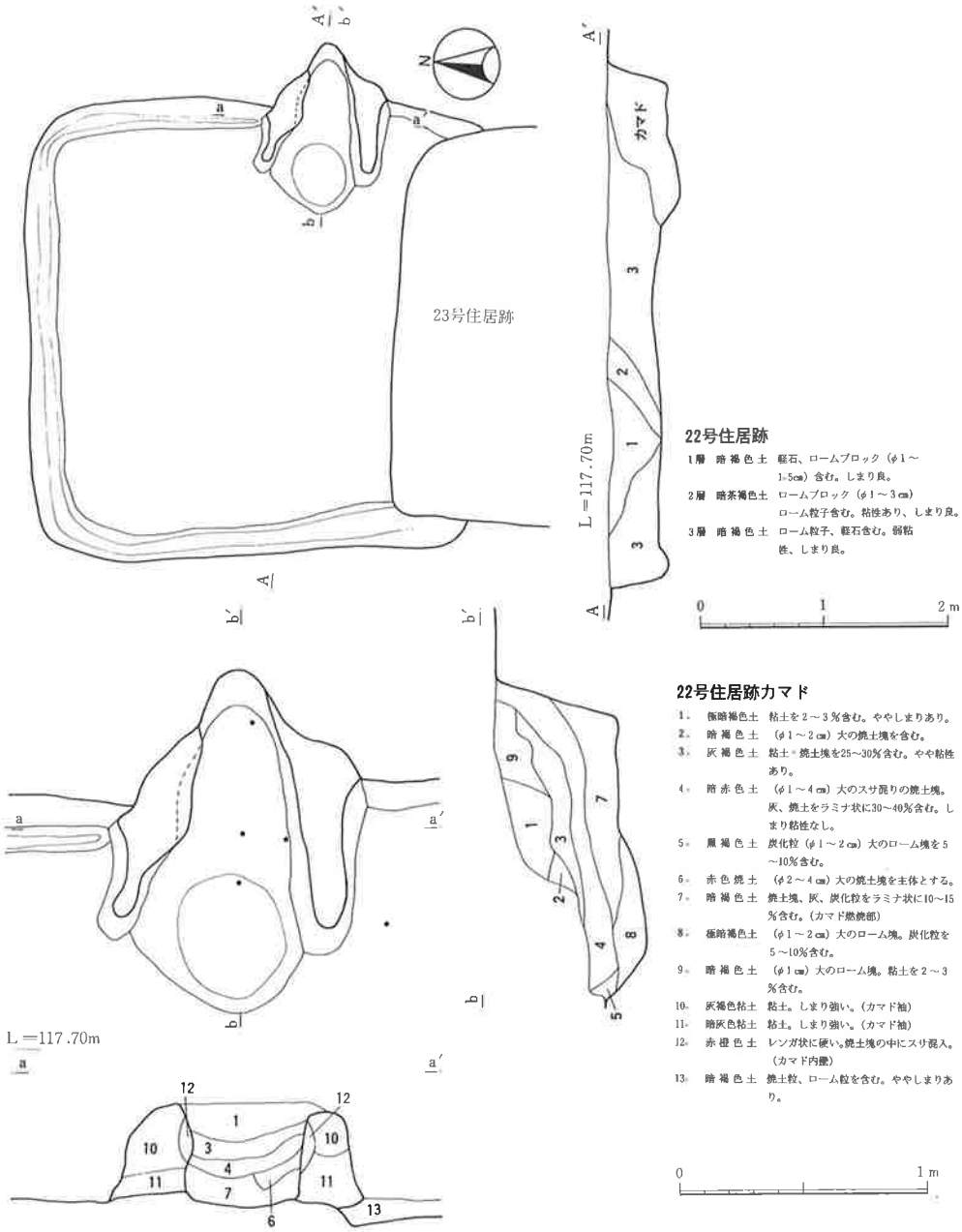
23号住居跡（第54・55図、図版12－１・12－２・12－３・20・22、表24・25）

本跡は調査区南西側Ｌ－ａグリッドで検出された。北側で22号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。主軸方向はＮ－93°－Ｅである。規模は4.2×2.8ｍで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは50㎝である。

周溝は東側と南側の一部を除いて回る。ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマド　東壁中央南寄りで検出された。煙道の壁外への掘り込みは100㎝で、なだらかに立ち上がる。袖は粘土で構築されている。支脚は検出されなかった。

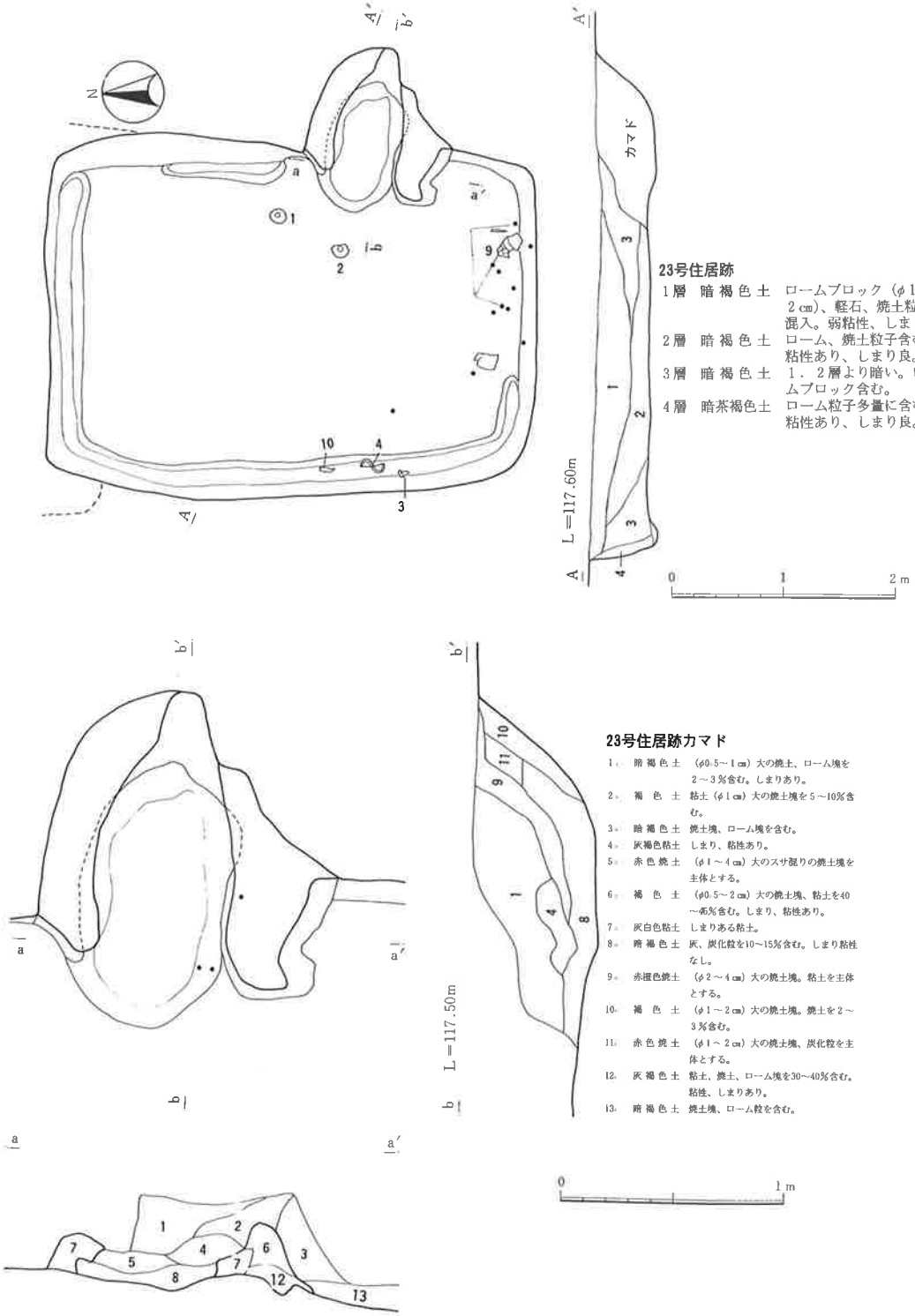
遺物はカマドの周辺及び南側に集中して検出されている。



第53図　22号住居跡とカマド

表24　23号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵坏	器高 3.8 口径12.8 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
2	須恵坏	器高 3.3 口径12.6 底径 6.4	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	白色鉱物を含む。	灰褐色	還元	覆土中
3	須恵坏	器高 4.0 口径12.4 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後、回転ヘラ削り。	緻密	黒褐色	還元	覆土中



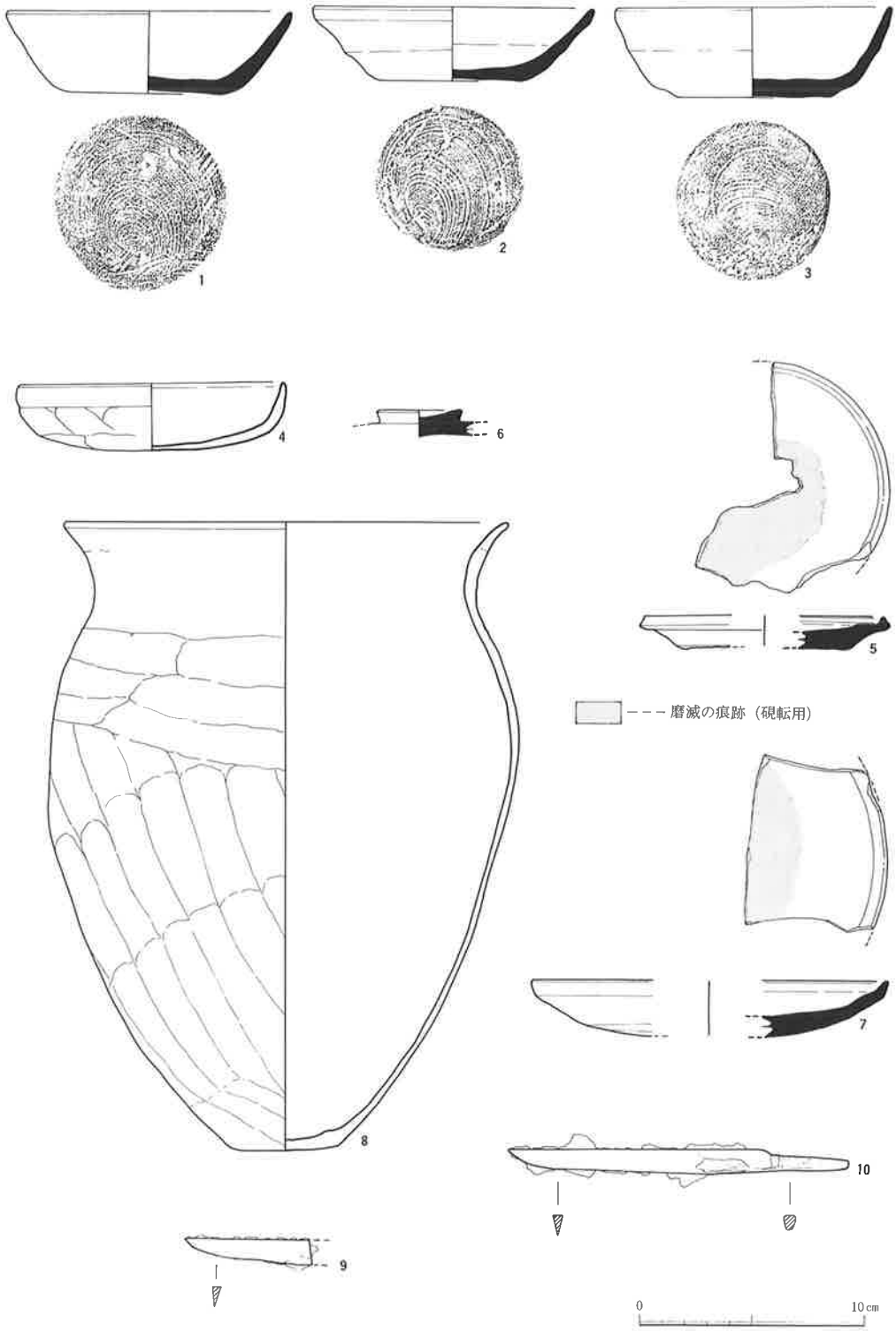
23号住居跡

1層	暗褐色土	ロームブロック（φ1～2㎝）、軽石、焼土粒子混入。弱粘性、しまり良。
2層	暗褐色土	ローム、焼土粒子含む。粘性あり、しまり良。
3層	暗褐色土	1．2層より暗い。ロームブロック含む。
4層	暗茶褐色土	ローム粒子多量に含む。粘性あり、しまり良。

23号住居跡カマド

1.	暗褐色土	（φ0.5～1㎝）大の焼土、ローム塊を2～3%含む。しまりあり。
2.	褐色土	粘土（φ1㎝）大の焼土塊を5～10%含む。
3.	暗褐色土	焼土塊、ローム塊を含む。
4.	灰褐色粘土	しまり、粘性あり。
5.	赤色焼土	（φ1～4㎝）大のスサ混りの焼土塊を主体とする。
6.	褐色土	（φ0.5～2㎝）大の焼土塊、粘土を40～60%含む。しまり、粘性あり。
7.	灰白色粘土	しまりある粘土。
8.	暗褐色土	灰、炭化粒を10～15%含む。しまり粘性なし。
9.	赤褐色焼土	（φ2～4㎝）大の焼土塊。粘土を主体とする。
10.	褐色土	（φ1～2㎝）大の焼土塊。焼土を2～3%含む。
11.	赤色焼土	（φ1～2㎝）大の焼土塊、炭化粒を主体とする。
12.	灰褐色土	粘土、焼土、ローム塊を30～40%含む。粘性、しまりあり。
13.	暗褐色土	焼土塊、ローム粒を含む。

第54図　23号住居跡とカマド



第55図　23号住居跡の遺物

表25　23号住居跡出土遺物観察表 (2)

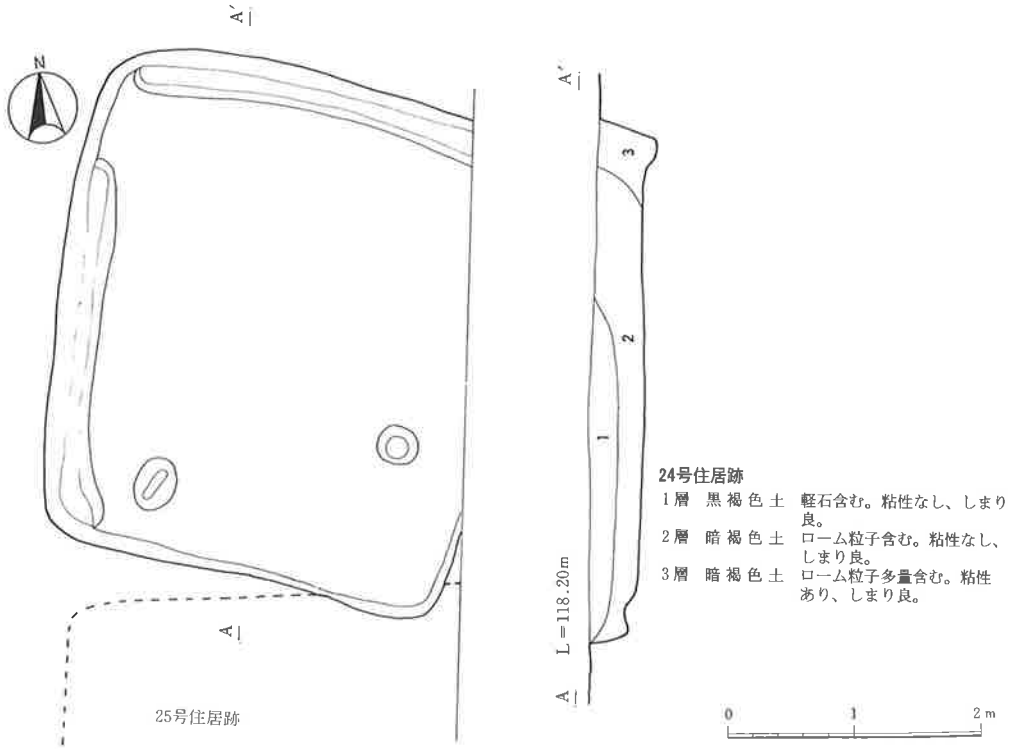
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
4	土師 坏	器高 3.0 口径11.8 底径 －	平底ぎみの丸底。体部内湾して立ち上がり、口唇部直立する。	外面底部及び体部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
5	須恵 蓋 転用硯	器高 (1.6) 口径10.6	偏平。中段に稜を有する。つまみ部分はかれている。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラ削り。 内面磨滅。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
6	須恵 蓋	器高 (1.2) 口径 － 底径 －	環状のつまみの部分。	ロクロ成形。	緻密	灰色	還元	覆土中
7	須恵 蓋 転用硯	器高 (2.5) 口径15.8 底径 －	口縁部ゆるく折れ曲がる。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラ削り。 内面中央部磨滅。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
8	土師 甕	器高28.1 口径19.8 底径 5.0	口縁部緩く「く」の字状に外反する。	外面胴上部横方向の中・下半部縦方向のヘラ削り。内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	床着
9	鉄製品 刀子	残存長 5.7	刃先部のみ。					床着
10	鉄製品 刀子	長さ15.3	木質部分残る。棟関。					覆土中

24号住居跡（第56・57図、図版12－4、表26）

本跡は調査区南東側L－3、M－3グリッドで検出された。南側で25号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。東側は調査区外となっている。主軸方向は不明である。規模は南北で3.8mで、やや南北に長い長方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは45cmである。

ピットは2基検出されているが、いずれも浅く主柱穴とは考えられない。周溝は北側と西側で検出されている。カマドは検出されていない。

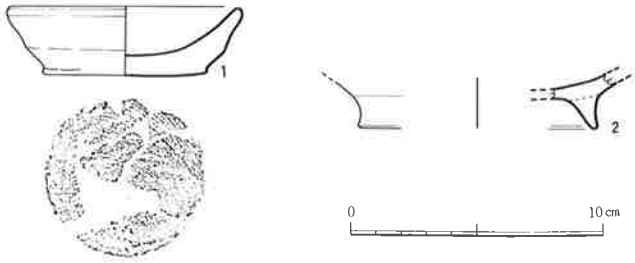
遺物は覆土中から少量出土している。



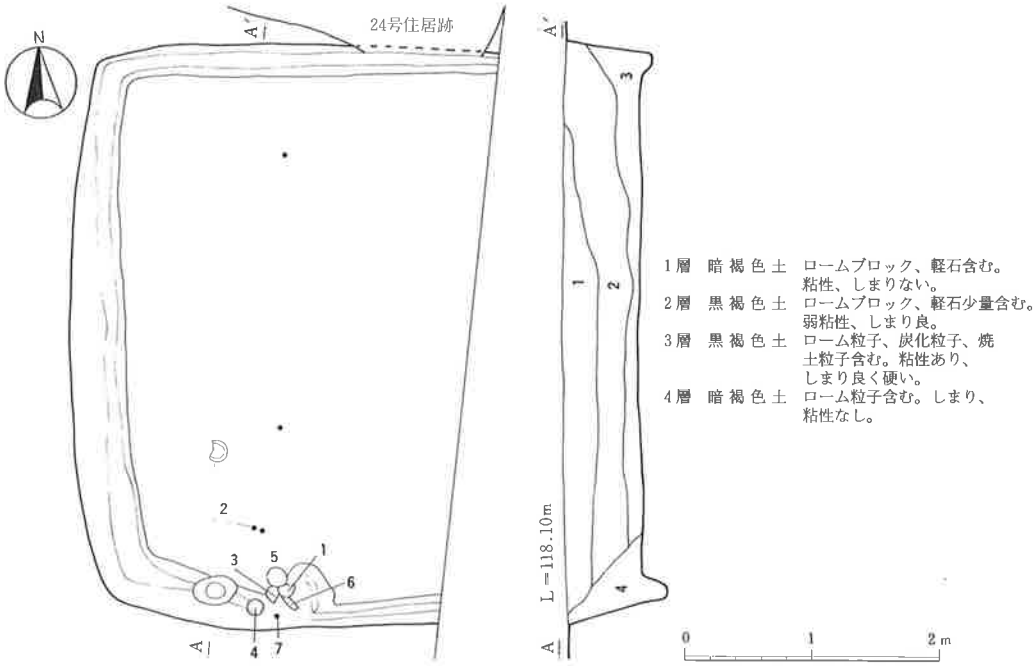
第56図　24号住居跡

表26　24号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵坏	器高 2.8 口径 9.1 底径 6.4	平底。小形。体部内湾して立ち上がり、口縁部外反する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り無調整。	白色鉱物を含む。	褐色	酸化	覆土中
2	土師高台付椀	器高 (2.1) 口径 — 底径 5.2	高台部直立する。	高台取り付け後ナデ。	白色鉱物含む。	褐色	酸化	覆土中



第57図　24号住居跡の遺物



第58図　25号住居跡

25号住居跡（第58・59図、図版13－1・20、表27）

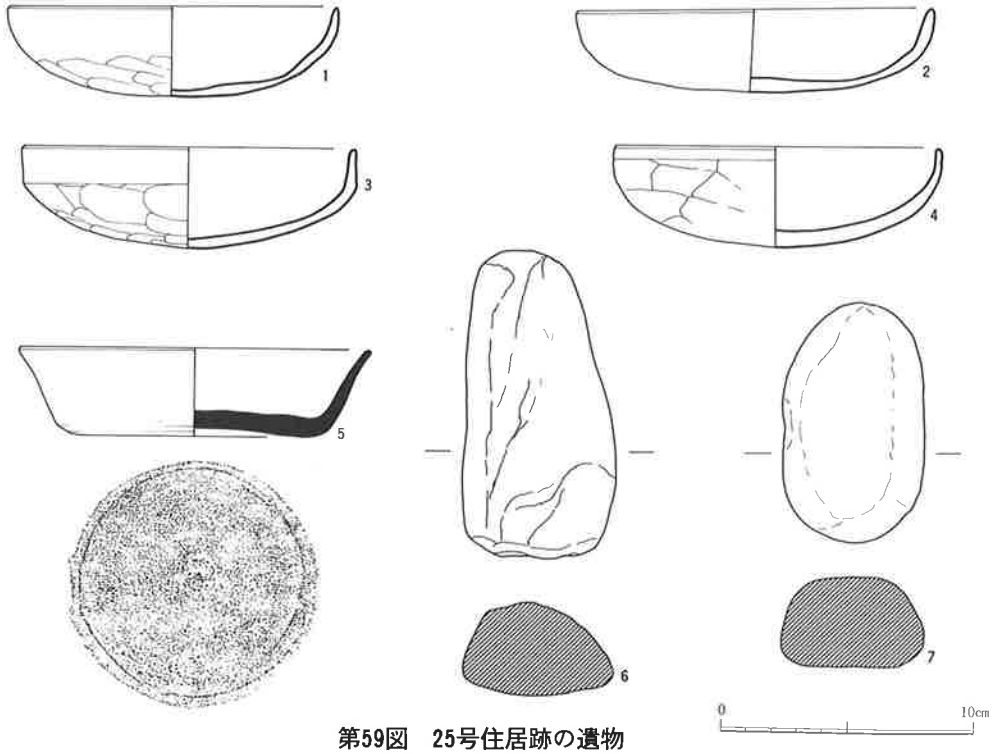
本跡は調査区南東側M－3グリッドで検出された。北側で24号住居跡と重複し、本跡の方が古い。東側は調査区外となっている。主軸方向は不明であるが、ほぼ東方向と思われる。規模は南北方向で4.5mで、方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは60cm。

周溝は調査区内では全周し、南側には浅いピット2基が検出されている。カマドは調査区外にあるものと思われる。

遺物は南側壁付近に坏類がまとまって出土している。

表27　25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 3.6 口径13.0 底径 －	底部は丸底。体部は内湾し口縁部はほぼ直立する。	外面体部はヘラ削り。口縁部及び内面はナデ。	緻密	褐色	酸化	床着
2	土師坏	器高 3.7 口径14.0 底径 －	底部は平底に近い丸底。体部は内湾し、口縁部はほぼ直立する。	外面体部はヘラ削り。口縁部及び内面はナデ。	緻密	褐色	酸化	床着
3	土師坏	器高 4.0 口径13.7 底径 －	底部は丸底。体部は緩やかに内湾する。口縁直下に僅かな稜を有す。	外面体部はヘラ削り。口縁部及び内面はナデ。	僅かに砂粒含む。	褐色	酸化	床着
4	土師坏	器高 4.0 口径12.8 底径 －	底部は丸底。体部は緩やかに内湾する。口唇直下に1条の沈線が巡る。	外面体部はヘラ削り。口縁部及び内面はヨコナデ。	細砂粒少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5	須恵坏	器高 3.5 口径13.8 底径 9.8	底部は平底。やや上げ底気味となる。体部は外反して立つ。	ロクロ成形。底部は回転ヘラ起しの後、縁辺をヘラ削りする。	黒色粒子を多く含む。	灰色	還元	床着
6	石	縦 12.2 横 6.0 厚さ 3.7	全体に良く磨かれている。三角錐状。菰編石か。重量411ｇ。		安山岩			床着
7	石	縦 9.5 横 5.6 厚さ 3.5	全体に良く磨かれている。楕円形。菰編石か。重量308ｇ。		安山岩			床着



第59図　25号住居跡の遺物

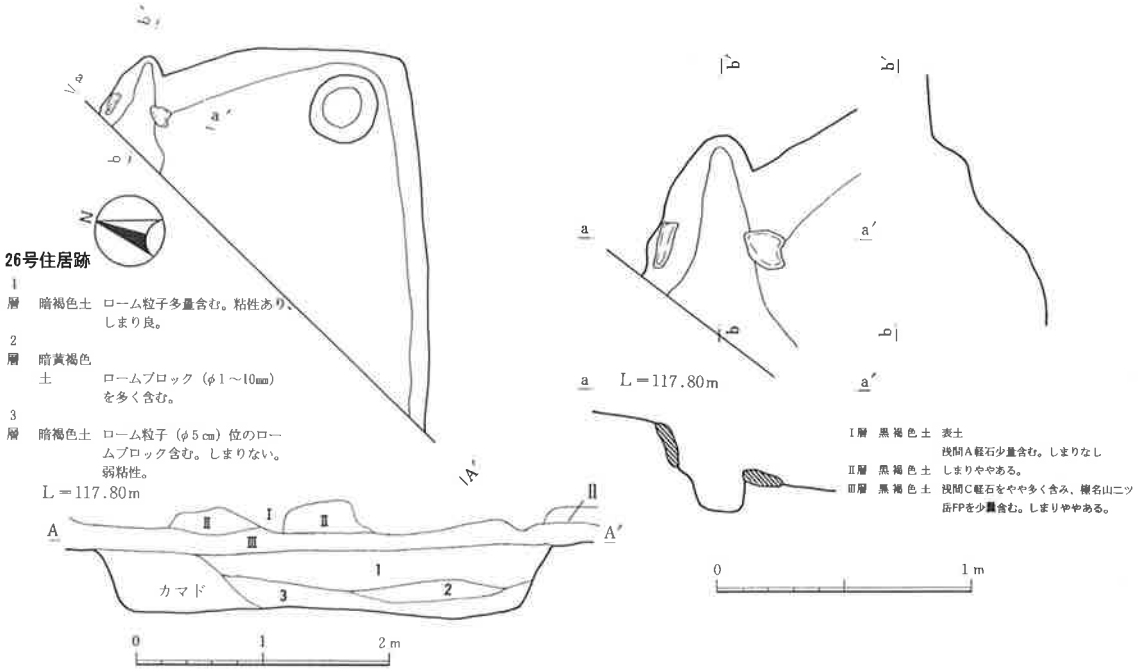
26号住居跡（第60・61図、図版13－２・20、表28）

本跡は調査区南西側Ｎ－ｃグリッドで検出された。南東側の一部のみの検出で、他は調査区外となっている。主軸方向は不明であるが、ほぼ東方向と思われる。規模等も不明である。壁高は55cmを計る。

南東側コーナーには貯蔵穴と考えられるピットが検出されている。周溝はない。

カマド　東壁に位置する。煙道の壁外への掘り込みは20cmで、なだらかに立ち上がる。袖には石が置かれている。支脚は検出されなかった。

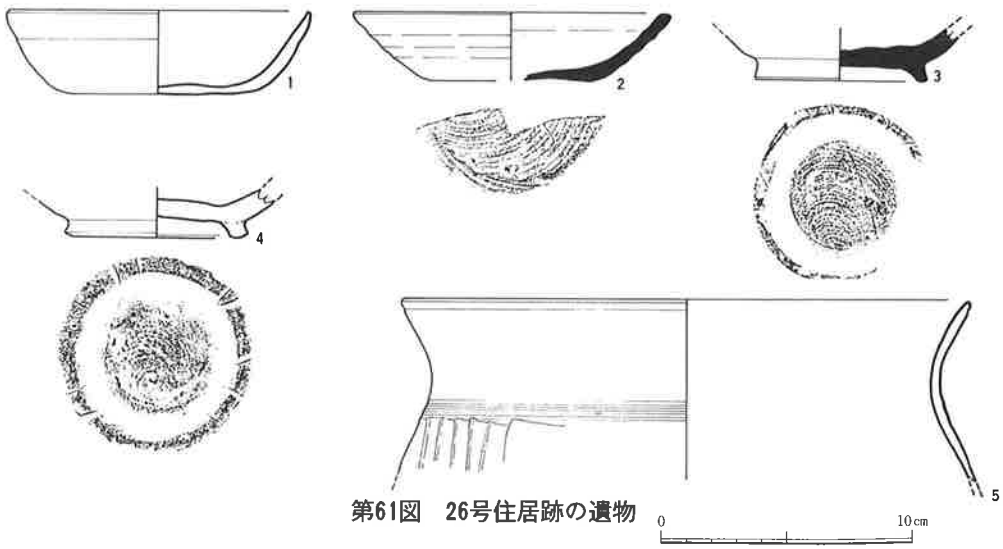
遺物は少量出土しているが覆土中のものが多い。



第60図　26号住居跡とカマド

表28　26号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 3.3 口径11.8 底径 8.0	平底。体部直線的に外傾し、口縁部付近に弱い稜を有する。	外面底部ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
2	須恵坏	器高 2.7 口径12.4 底径 6.4	上げ底ぎみの平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3	須恵高台付椀	器高 (2.1) 口径 — 底径 6.8	高台部短かく「ハ」の字状に開く。体部内湾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後付高台、ナデ。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
4	須恵高台付椀	器高 (2.0) 口径 — 底径 6.6	高台部短かく「ハ」の字状に開く。体部内湾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後付高台、ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5	土師甕	器高 (7.1) 口径22.4	口縁部緩やかに「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向のヘラ削り。	砂粒含む。	褐色	酸化	覆土中



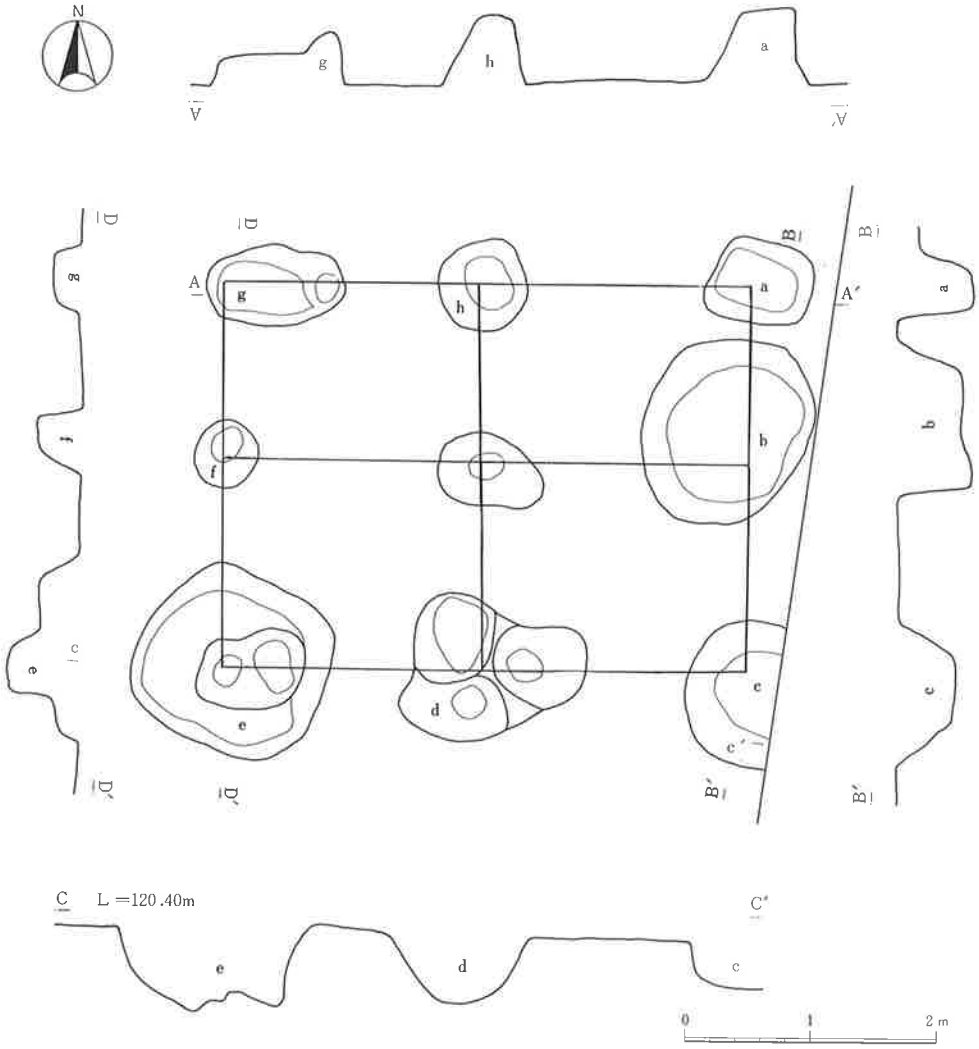
第61図　26号住居跡の遺物

2　掘立柱建物跡

本遺跡で検出された掘立柱建物跡は４棟である。調査区の中央から北側に分布し、１、２、４号掘立柱建物跡は主軸方向がほぼ同じである。しかし各柱穴の掘り込みは不整なものが多い。これらの建物跡の、住居跡群との関わりは不明である。

１号掘立柱建物跡（第62図、図版13－３）

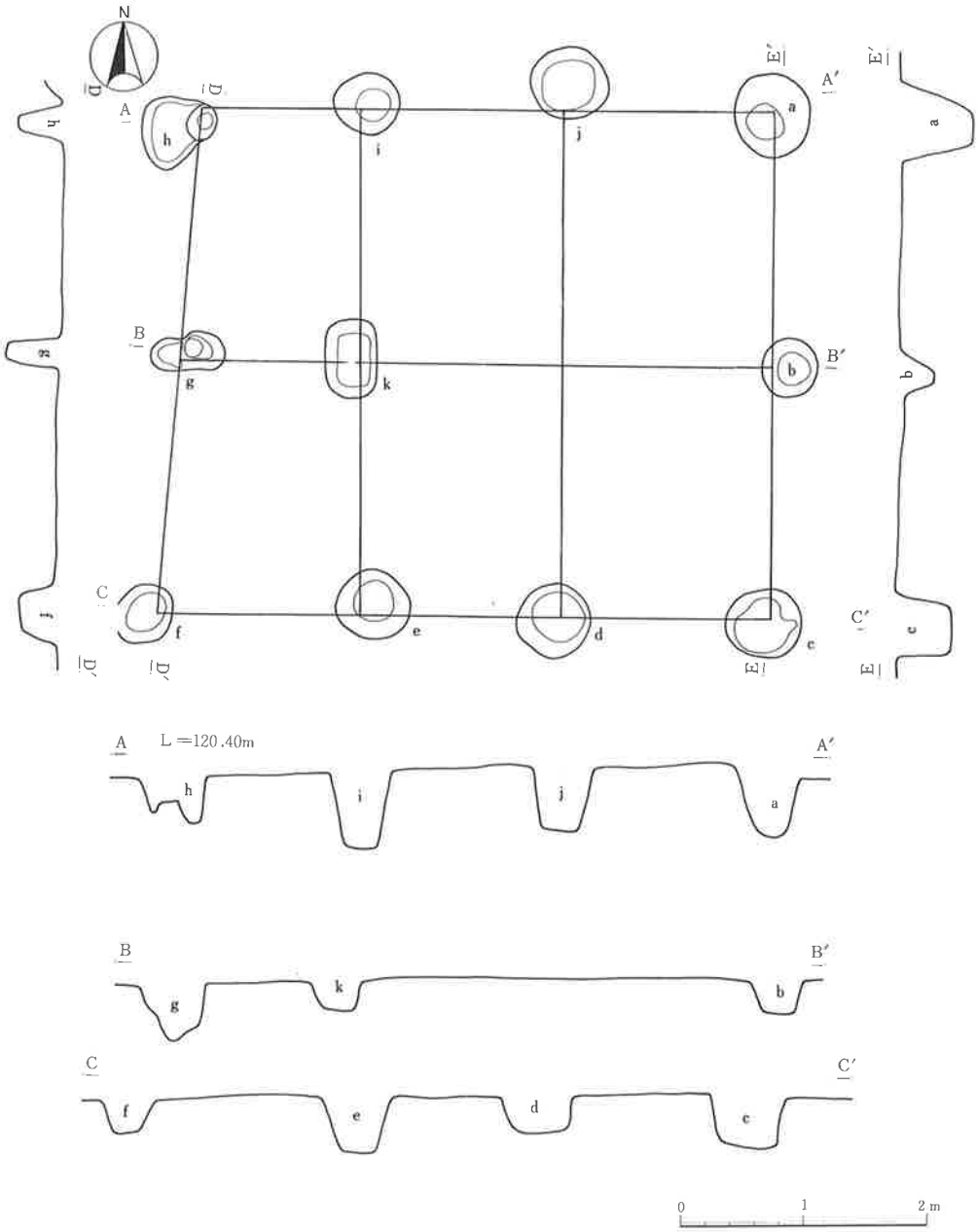
本跡は調査区北東側Ｃ・Ｄ－４グリッドで検出された。主軸方向はＮ－87°－Ｗである。東西4.2ｍ、南北３ｍの２間×２間の総柱である。柱穴の深さはバラツキがあり、掘り方も不整なものが多い。覆土の観察からは柱痕は不明である。遺物は数基の柱穴から流れ込みと思われる土器の細片が出土している。



第62図　１号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡（第63図、図版14－1）

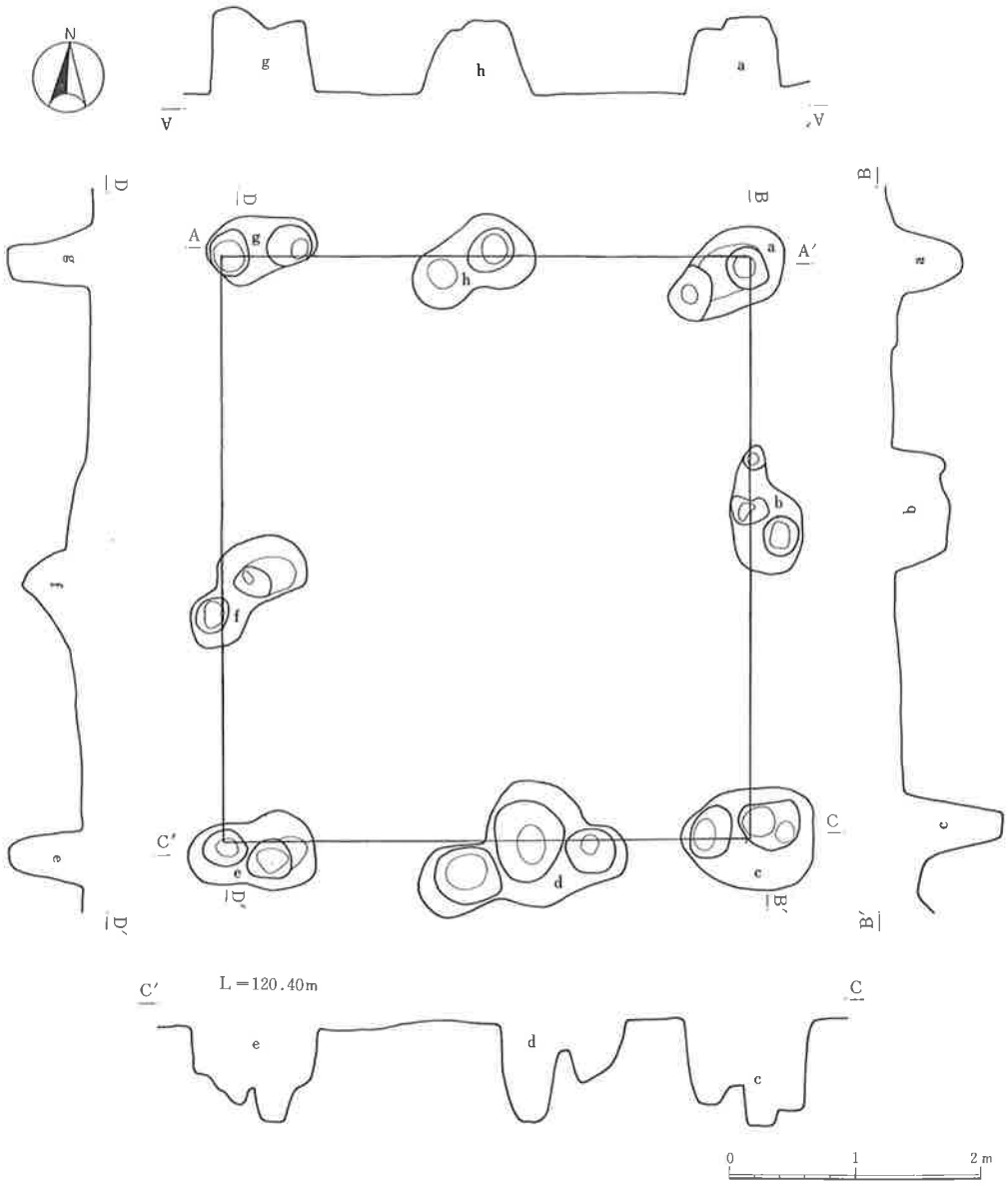
本跡は調査区北側D－2グリッドで検出された。主軸方向はN－87°－Wである。東西5m、南北4mの3間×2間である。柱穴は浅いものもあるが、掘り方はしっかりしているものが多い。柱痕は観察されなかった。遺物は流れ込みと思われる土器の細片が出土している。



第63図　2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第64図、図版14－2）

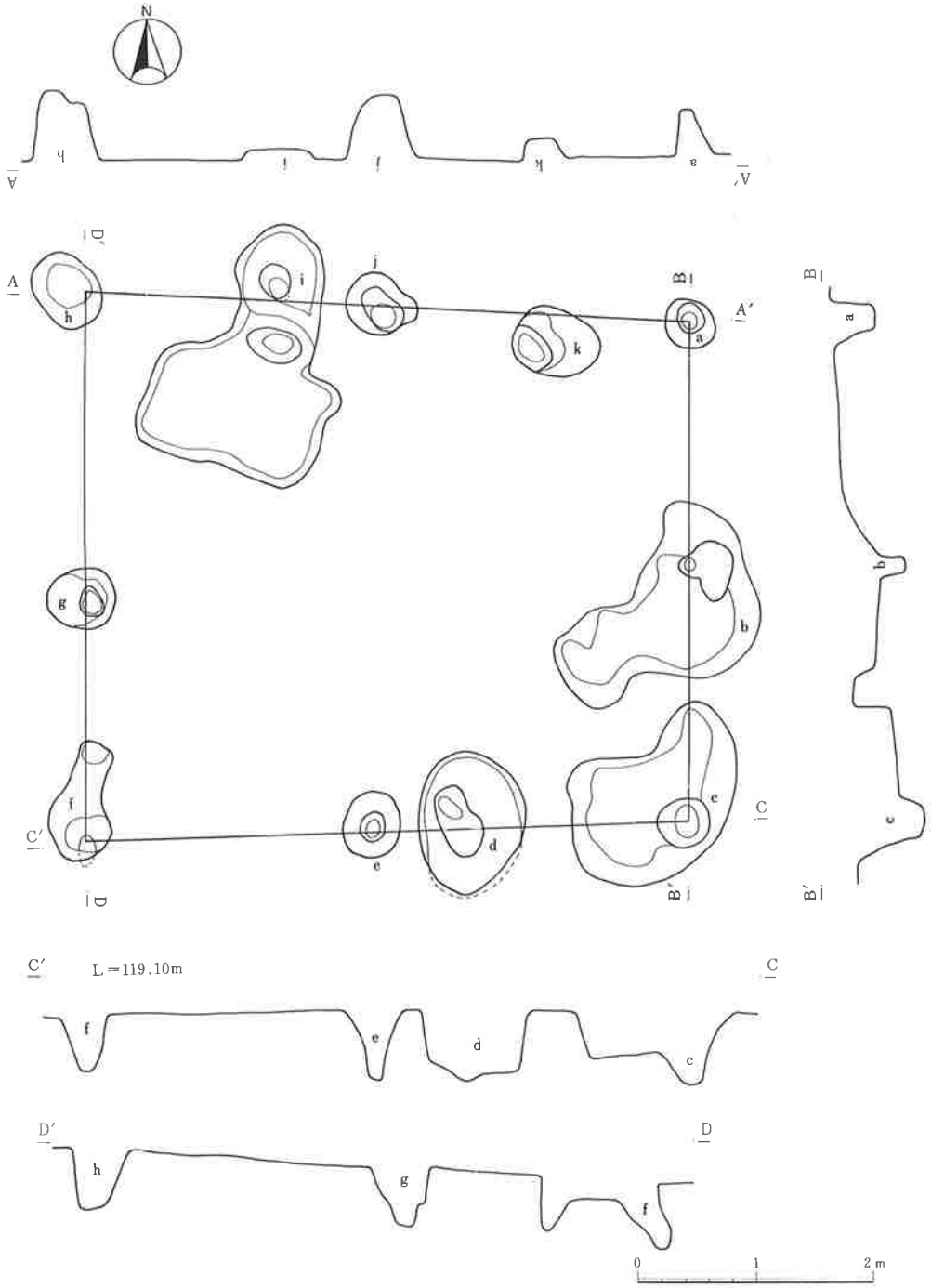
本跡は調査区北側D、E－3グリッドで検出された。主軸方向はN－5°－Wである。南北4.7m、東西4.3mの2間×2間で、建て替えを行っている。柱痕は観察されず、遺物も流れ込みのものである。



第64図　3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡（第65図、図版14－3）

本跡は調査区中央Ｉ－２グリッドで検出された。主軸方向はＮ－82°－Ｗである。東西5.2ｍ、南北4.7ｍの２間×２間である。柱穴の掘り方は不整なものが多い。柱痕は観察されず、遺物も流れ込みの土器の細片のみである。



第65図　4号掘立柱建物跡

3　井戸跡

井戸は４基検出されている。１号から４号は調査区中央に集まり、５号井戸のみ南側に離れて位置する。すべて完掘できなかったため、遺物は流れ込みのものと考えられる。

１号井戸跡（第66図、図版15－５）

本跡は調査区東側Ｈ－３グリッドで検出された。プランはほぼ円形を呈する。安全性を考え深さ1.4ｍまで掘り下げたが、ピンポールに依る観察によると、更に１ｍ以上深くなる。掘り下げ部分の底径は40cmである。覆土は自然堆積を示し、遺物は殆ど出土していない。

２号井戸跡（第66図、図版15－６）

本跡は調査区中央Ｈ－２グリッドで検出された。東側２ｍには１号井戸跡がある。プランはほぼ円形を呈する。深さは1.5ｍまで掘り下げた。掘り下げ部分の底径は85cmである。覆土は自然堆積で、遺物は殆ど出土していない。

３号井戸跡（第67・68図、図版16－１、表29）

本跡は調査区中央Ｉ－２グリッドで検出された。プランはほぼ円形を呈する。深さは2.3ｍまで掘り下げた。径は160cm。覆土は自然堆積で、遺物は須恵器片等が少量出土している。本跡には上屋が構築されていた可能性が強い。４本柱で南北3.8ｍ、東西3.3～3.5ｍである。

４号井戸跡（第66・68図、表29）

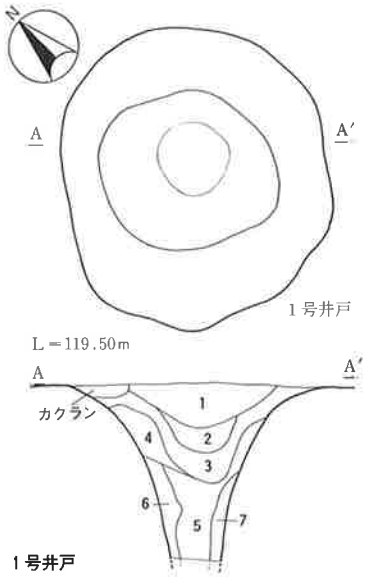
本跡は調査区西側Ｈ－１グリッドで検出された。プランはほぼ円形を呈する。深さは2.2ｍまで掘り下げた。掘り下げた底面の直径は75cmである。覆土は自然堆積で、遺物は少量出土している。

５号井戸跡（第66・68図、表29）

本跡は調査区南西側Ｎ－６グリッドで検出された。プランは円形を呈する。深さは1.5ｍまで掘り下げた。掘り下げの面の底径は75cmである。覆土は自然堆積で遺物は少量出土している。

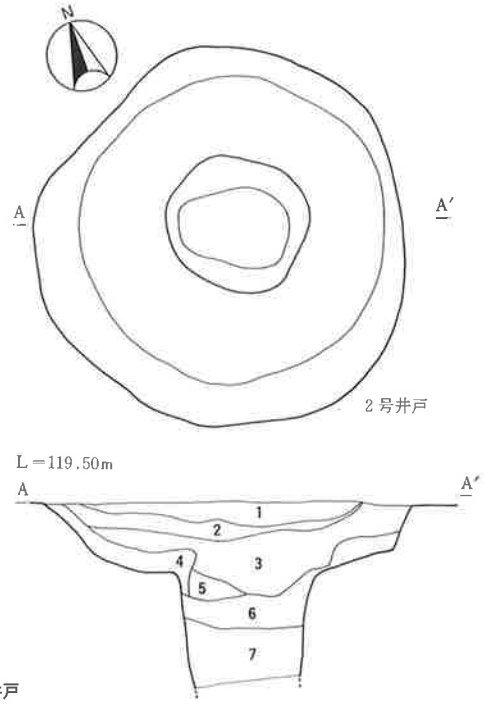
表29　井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
3号井戸1	須恵坏	器高(3.6) 口径12.0 底径－	体部内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外傾する。	ロクロ成形。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3号井戸2	須恵壺		短頸壺か。最大径は胴部中位にくるものと思われる。	ロクロ成形。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3号井戸3	須恵甕		大形甕の体部片。	外面平行叩き目痕残す。内面下部同心円状のあて具痕、上面ナデ調整。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
4号井戸1	須恵高台付坏	器高(4.0) 口径－ 底径9.8	高台部「ハ」の字状に開く。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後付高台、ナデ。	黒色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
4号井戸2	須恵甕		口縁部片。くびれ部厚手。	外面波状文。 内面ロクロ回転のナデ。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
4号井戸3	須恵壺か		底部片。高台部短かく「ハ」の字状に開く。体部直線に外傾する。	ロクロ成形。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
4号井戸4	須恵鉢か	器高(4.5) 口径－ 底径15.8	鉢形土器の底部片か。平底で、体部下端直線的に外傾する。	外面平行叩き目。底部は丁寧なナデ。	白色鉱物を含む。	灰色	還元	覆土中
5号井戸1	須恵坏	器高(1.5) 口径－ 底径5.4	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
5号井戸2	土師台付甕	器高(2.4)	体部の破片。脚部内湾して開く。	外面摩耗している。 内面ナデ。	白色鉱物を含む。	褐色	酸化	覆土中



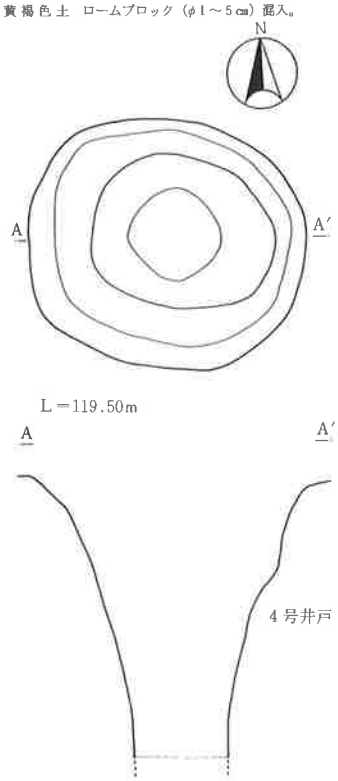
1号井戸

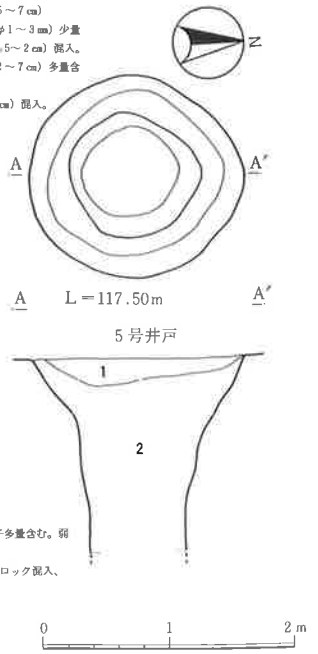
1層　黒褐色土　黄白色軽石粒（φ0.5～3㎜）多く含む。
2層　黒褐色土　〃　1層よりやや明るい。
3層　黒褐色土　黄白軽石粒（φ1～5㎜）含む。
4層　黒黄褐色土　〃　（φ0.5～3㎜）多く含む。
5層　黒褐色土　ロームブロック（φ1～3㎝）混入。
6層　黒黄褐色土　〃　（φ1～3㎝）混入。
7層　黒黄褐色土　ロームブロック（φ1～5㎝）混入。



2号井戸

1層　黒褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～3㎜）多量含む。ローム、焼土粒子（φ0.5～2㎝）含む。
2層　黒褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～3㎜）1より少ない。ローム、焼土粒子多量混入。
3層　黒褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～3㎜）2より少ない。ローム、焼土粒子多量混入。
4層　黒黄褐色土　粘土ブロック混入（φ5～7㎝）
5層　黒褐色土　白色、黄白色軽石粒（φ1～3㎜）少量含む。ローム粒子（φ0.5～2㎝）混入。
6層　黒褐色土　粘土ブロック混入（φ2～7㎝）多量含む。
7層　黒褐色土　ローム粒子（φ0.5～1㎝）混入。



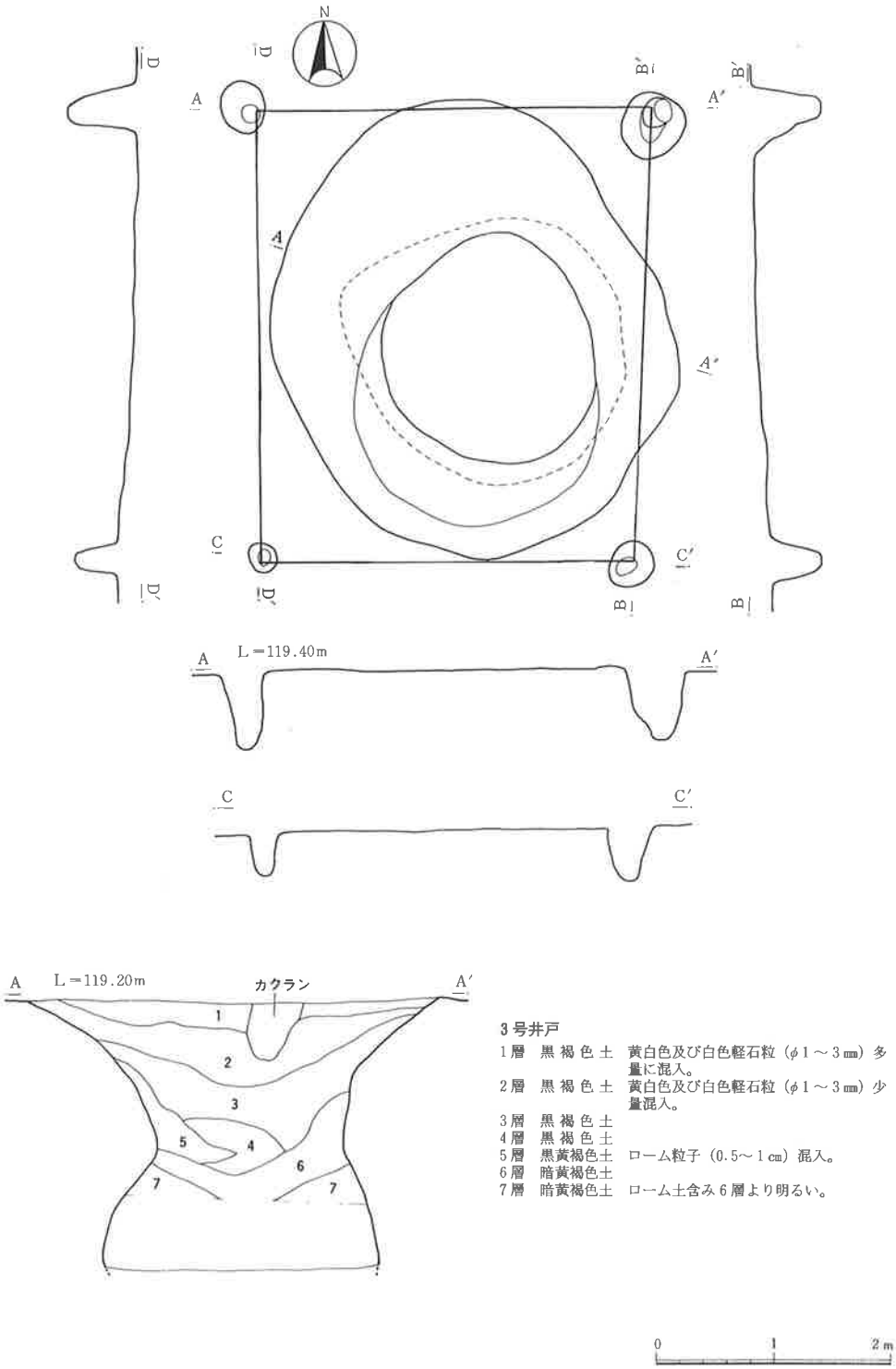


5号井戸

1層　暗褐色土　ローム粒子少量、粘土粒子多量含む。弱粘性、しまり良。
2層　黒色土　（φ2～3㎝）のロームブロック混入、砂質。

0　1　2 m

第66図　1・2・4・5号井戸跡

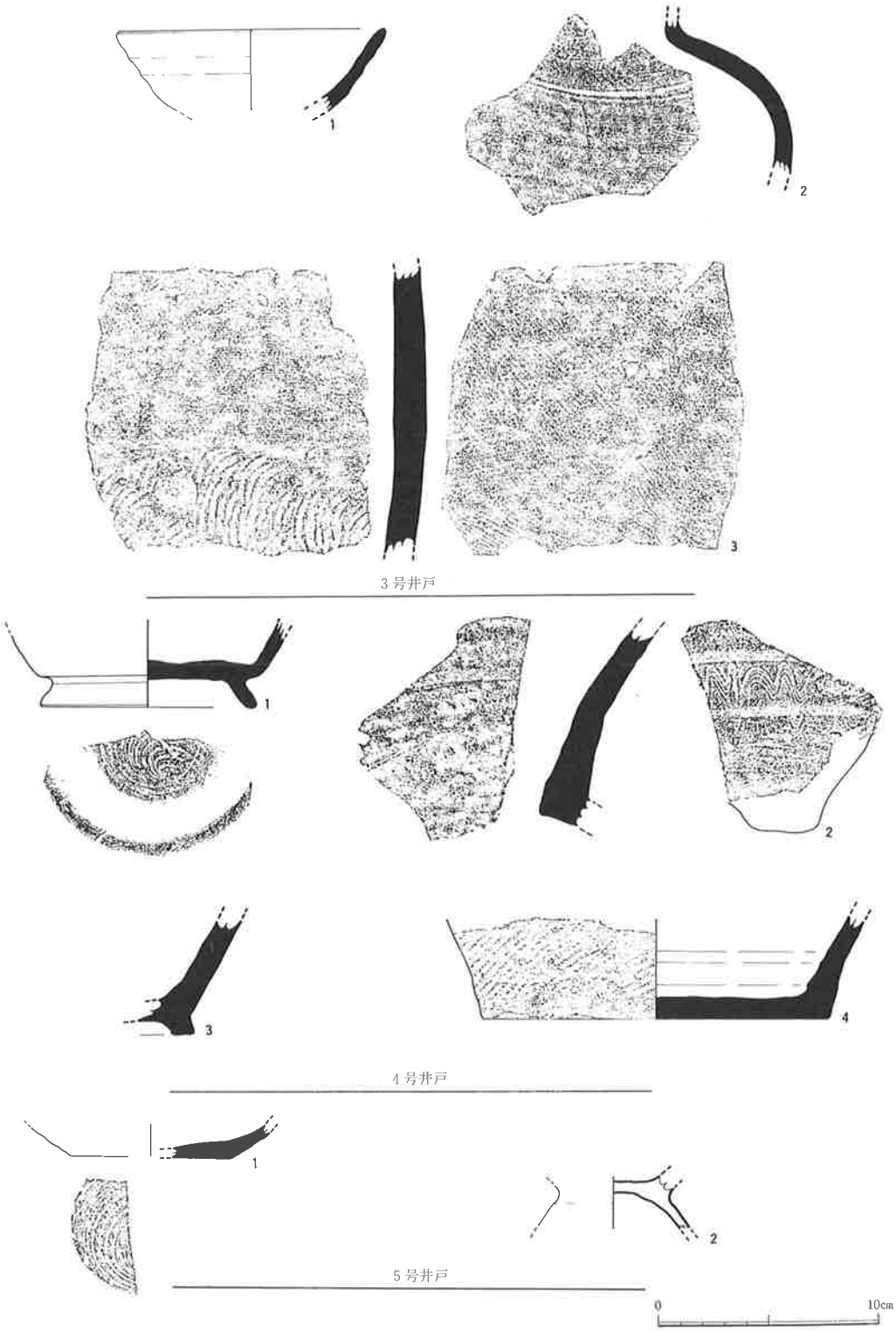


3号井戸

1層	黒褐色土	黄白色及び白色軽石粒（φ1～3㎜）多量に混入。
2層	黒褐色土	黄白色及び白色軽石粒（φ1～3㎜）少量混入。
3層	黒褐色土	
4層	黒褐色土	
5層	黒黄褐色土	ローム粒子（0.5～1㎝）混入。
6層	暗黄褐色土	
7層	暗黄褐色土	ローム土含み6層より明るい。

0　1　2m

第67図　3号井戸跡



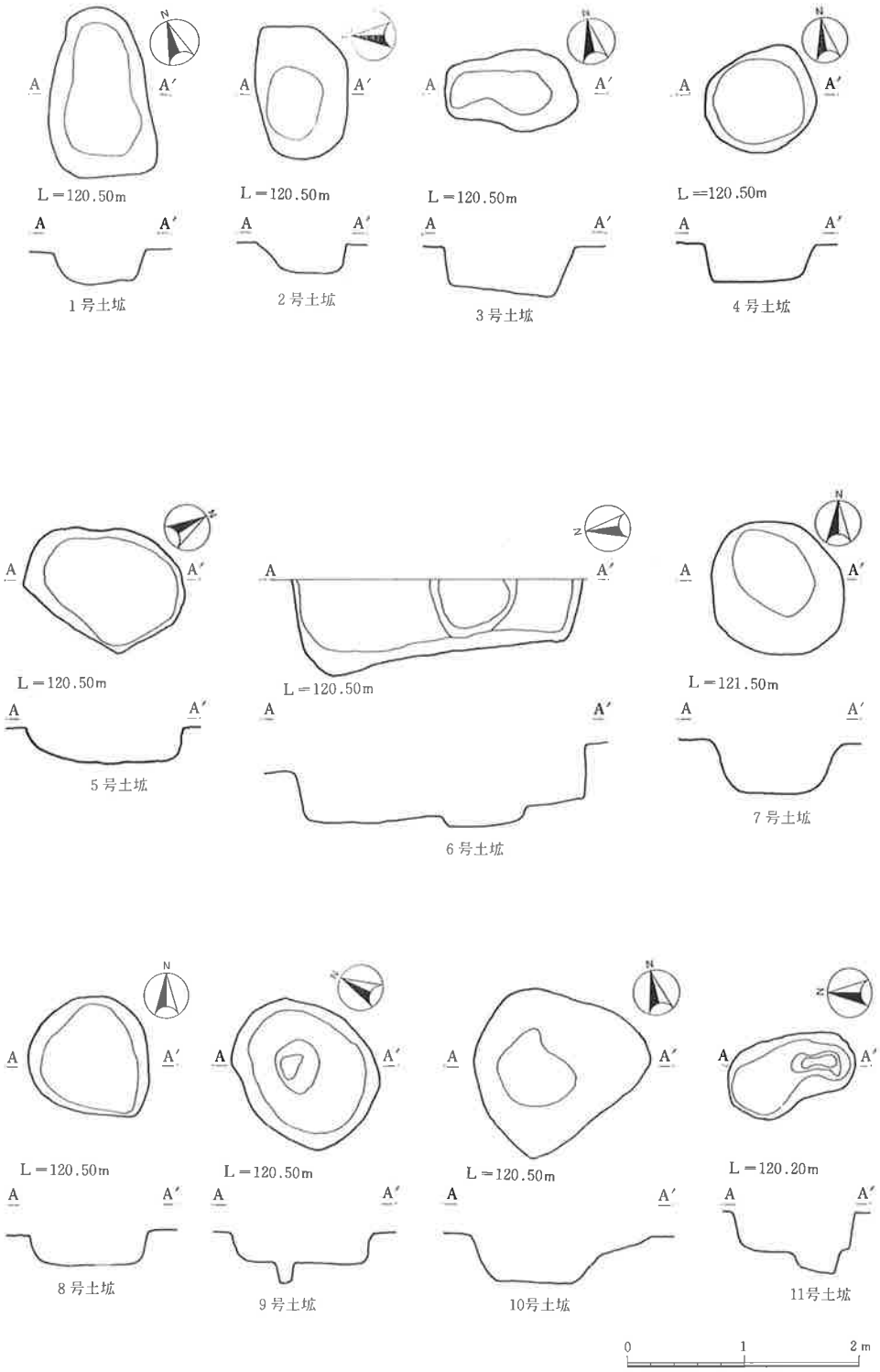
第68図　井戸の遺物

4　土　坑（第69・70・71・72図、図版15－1～15－4、表30・31）

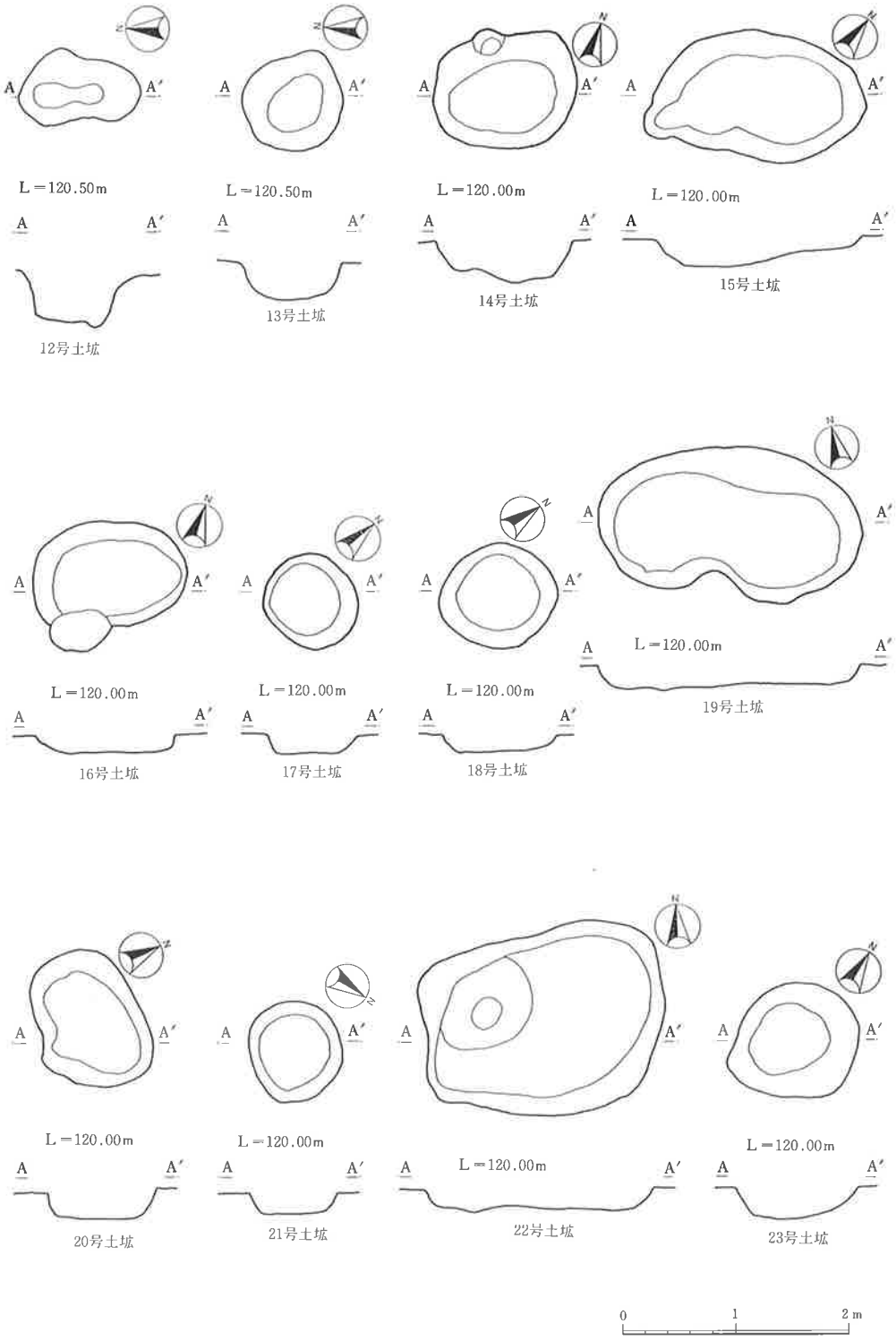
本遺跡で検出された土坑は33基である。いずれも歴史時代以降のものと考えられるが、遺物を出土しているものが少なく、また覆土中の出土であるため時代決定はできない。分布は調査区の北側に集まる。

表30　土坑一覧表

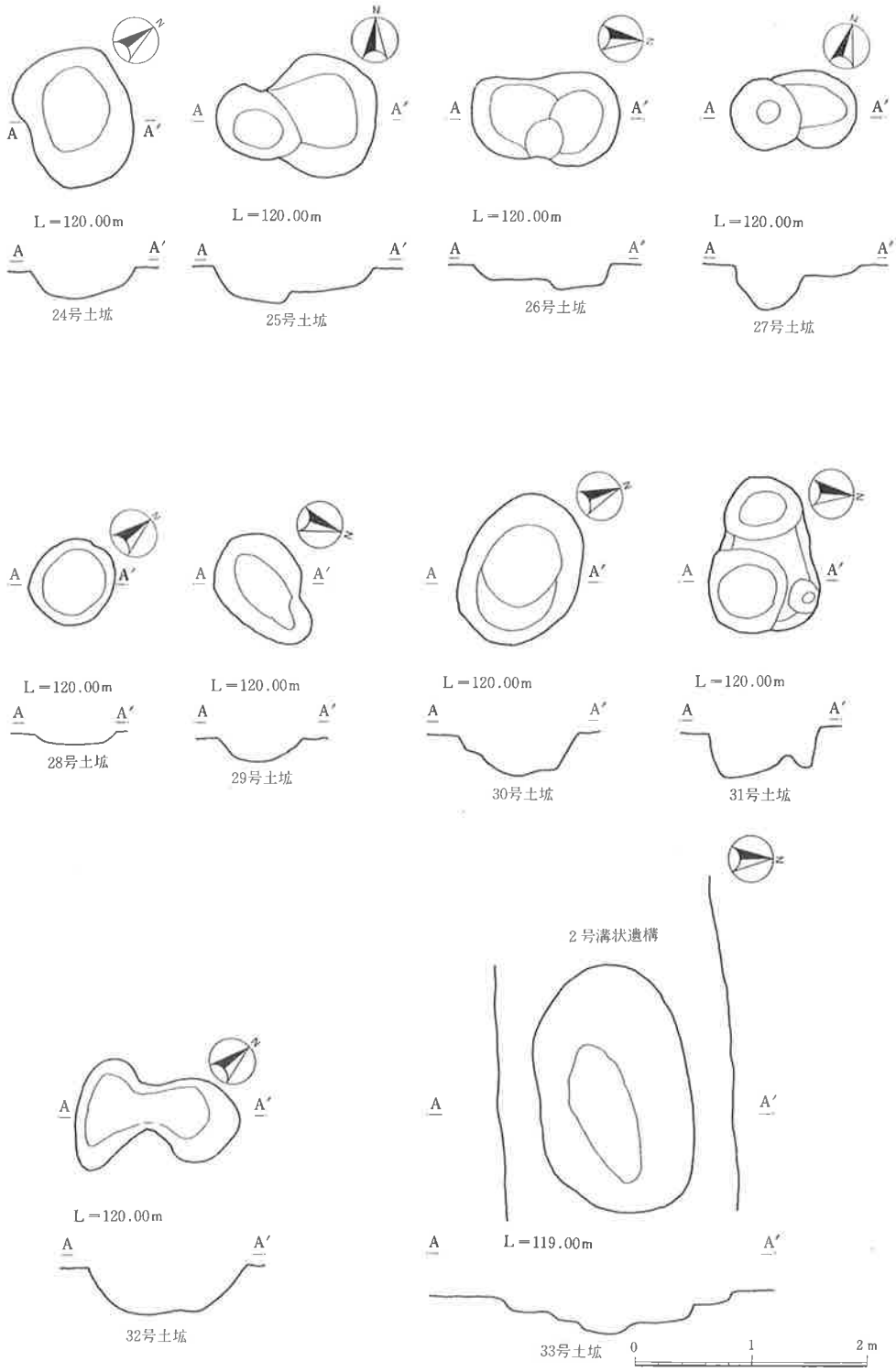
土坑番号	検出グリッド	主軸方向	平面形	規模			備考
				長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	
1	A－3	N-15°-E	楕円形	1.47	0.91	25	
2	B－3	N-65°-E	〃	1.14	0.79	24	
3	C－5	N-95°-E	〃	1.16	0.70	42	
4	C－3	N-55°-W	円形	0.90	0.90	32	
5	C－3	N-63°-E	楕円形	1.40	1.03	26	
6	D－5	N-10°-E	不整形	2.25	不明	61	住居跡の可能性あり
7	D－5	N-29°-W	円形	1.26	1.11	44	
8	D－4	N-36°-W	不整形	1.15	1.05	26	
9	E－5	N-31°-E	〃	1.34	1.12	43	
10	E－5	N-18°-E	〃	1.53	1.45	41	
11	E－3	N-16°-W	楕円形	1.15	0.65	52	
12	E－4	N-0°	瓢たん形	1.08	0.67	47	
13	E－4	N-56°-W	円形	0.94	0.88	33	
14	E－2	N-64°-E	不整形	1.32	1.11	31	須恵器蓋出土
15	E－2	N-45°-E	楕円形	1.97	1.15	23	
16	E－2	N-67°-E	不整形	1.38	1.10	16	
17	E－2	N-49°-W	円形	0.85	0.80	17	
18	E－2	N-54°-W	〃	1.06	0.94	16	
19	E－2	N-69°-W	不整形	2.37	1.30	23	
20	E－1	N-69°-E	〃	1.30	0.90	23	
21	E－1	N-82°-E	円形	0.91	0.88	17	
22	E－2	N-63°-E	不整形	2.35	1.75	19	須恵器甕・蓋出土
23	E－2	N-30°-E	〃	1.22	1.05	27	
24	E－2	N-40°-W	〃	1.21	1.06	24	須恵器坏出土
25	E－2	N-80°-E	瓢たん形	1.40	1.06	30	
26	E－3	N-0°	〃	1.28	0.81	21	
27	E－2	N-74°-E	〃	1.11	0.65	36	土師器・須恵器坏出土
28	F－2	N-15°-W	円形	0.78	0.71	9	
29	F－2	N-36°-E	不整形	1.07	0.72	19	
30	E－2，F－2	N-51°-W	楕円形	1.34	1.01	34	
31	F－2	N-78°-E	不整形	1.34	0.96	38	
32	F－2	N-38°-E	瓢たん形	1.44	0.86	40	
33	J－4	N-71°-E	楕円形	2.16	1.26	34	2号溝状遺構よりも古い


A
A′
L＝120.50m
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
L＝120.50m
6号土坑
L＝121.50m
7号土坑
8号土坑
L＝120.50m
9号土坑
L＝120.50m
10号土坑
L＝120.50m
11号土坑
L＝120.20m
0
1
2m

第69図　土　坑　(1)


A
A′
L＝120.50m
12号土坑
L＝120.50m
13号土坑
L＝120.00m
14号土坑
L＝120.00m
15号土坑
L＝120.00m
16号土坑
L＝120.00m
17号土坑
L＝120.00m
18号土坑
L＝120.00m
19号土坑
L＝120.00m
20号土坑
L＝120.00m
21号土坑
L＝120.00m
22号土坑
L＝120.00m
23号土坑
0
1
2 m

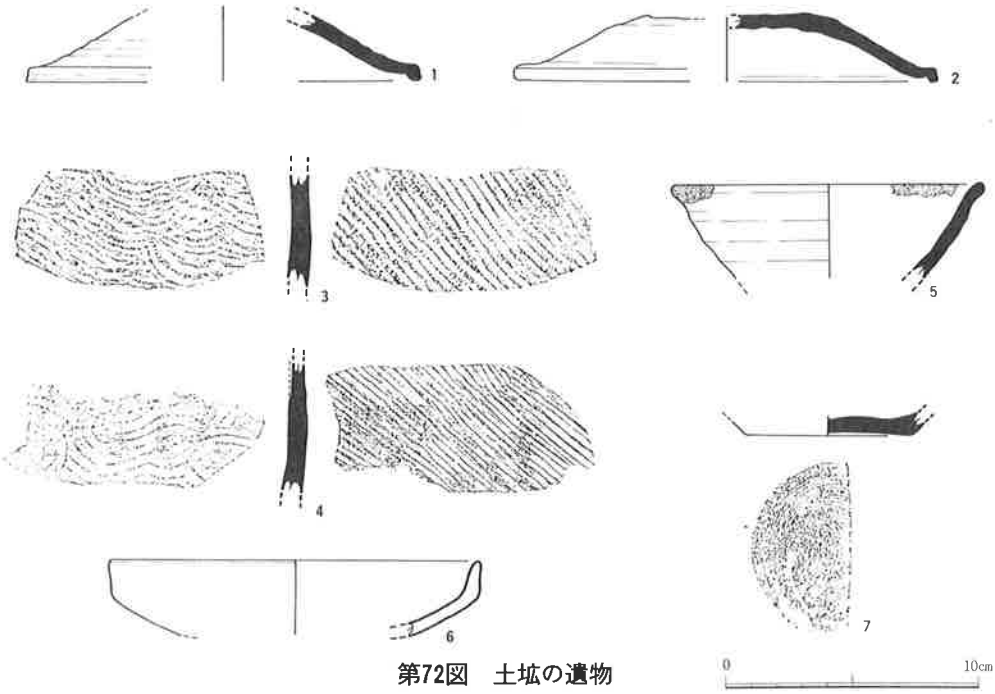
第70図　土　坑　(2)


A
A′
L＝120.00m
24号土坑
25号土坑
26号土坑
27号土坑
28号土坑
29号土坑
30号土坑
31号土坑
2号溝状遺構
L＝119.00m
32号土坑
33号土坑
0
1
2 m

第71図　土　坑 (3)

表31　土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵蓋	器高 2.6 口径15.6 底径 —	破片。口縁部垂直ぎみに折れ曲がる。	ロクロ成形。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	14号土坑覆土
2	須恵蓋	器高 2.6 口径16.7 底径 —	口縁部垂直ぎみに折れ曲がる。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラ削り。	白色・黒色鉱物を含む。	灰色	還元	22号土坑覆土
3	須恵甕		胴部片。	外面平行叩き目。 内面同心円状のあて具痕。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	22号土坑覆土
4	須恵甕		胴部片。	外面平行叩き目。 内面同心円状のあて具痕。	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	22号土坑覆土
5	須恵坏	器高 (3.7) 口径12.2 底径 —	体部内湾して立ち上がり、口縁部外傾する。	ロクロ成形。 口縁部すす付着。	白色鉱物少量含む。	灰色	還元	24号土坑覆土
6	土師坏	器高 3.1 口径11.2 底径 —	平底ぎみの丸底。体部内湾して立ち上がり、口縁部直立する。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	27号土坑覆土
7	須恵坏	器高 — 口径 — 底径 6.5	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り無調整。	砂粒・白色鉱物を少量含む。	灰褐色	還元	27号土坑覆土



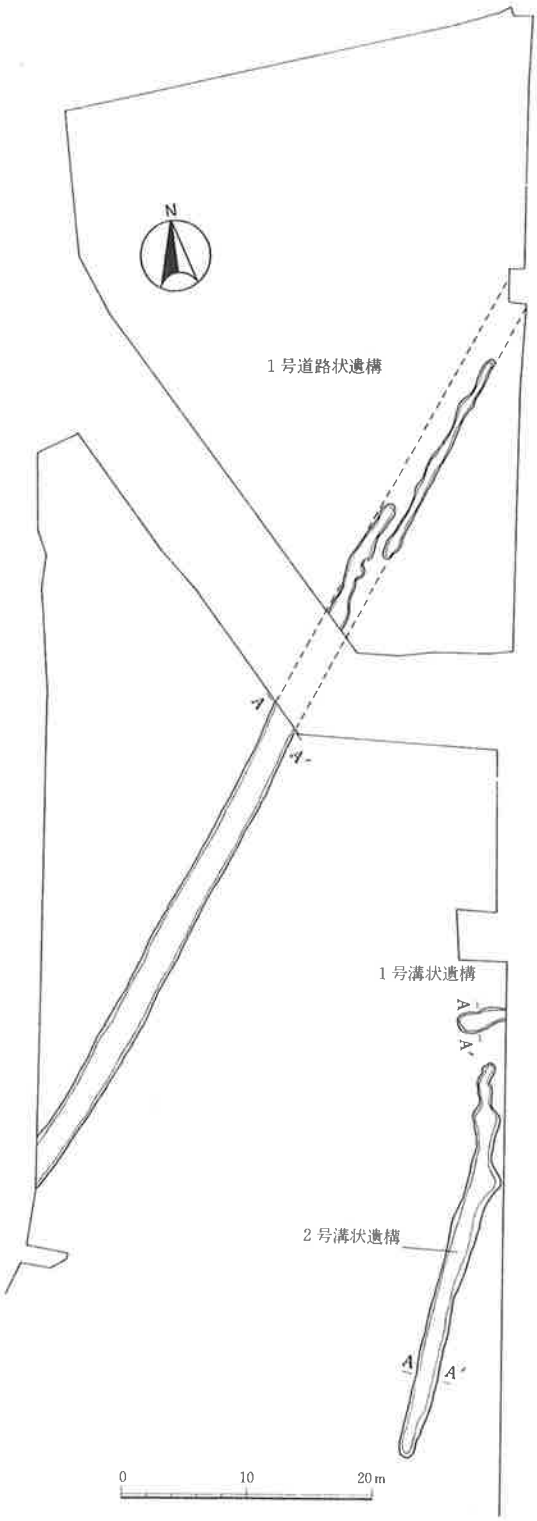
第72図　土坑の遺物

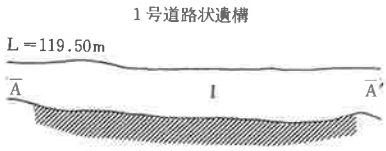
5　道路状遺構

道路は１条検出されている。近所の人の話によると昭和初期まで道として利用されていたと言う。

１号道路状遺構（第73図、図版16－２・16－３）

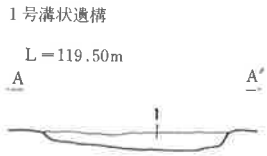
調査区北東から南西方向に向かう。道巾は2.2ｍ。北東側は表土層直下の検出のため不明瞭であり、硬化面を一部検出したが、南西側では硬化面が明瞭にとらえられた。



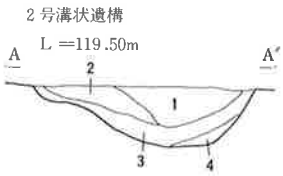


I層 黒褐色土　表土

硬化面



1層　暗褐色土　ローム粒子を少量含む、しまりあまりない。



1層　暗褐色土　ローム粒子を少量含む、しまりあまりない。

1層　暗黒褐色土　ロ· ム粒子、白色軽石を含む。弱粘性、しまり良。
2層　暗　褐　色　ローム粒子を含む。
3層　暗褐色土　2層より少し明るい。粘性なし、しまり良。
4層　暗茶褐色土　ローム粒子をやや多く含む。粘性あり、しまり良。

0　1　2m

第73図　1号道路状遺構、1・2号溝状遺構

6　溝状遺構

溝状遺構は２条検出されている。いずれも調査区南東側で検出され、掘り込みは不整である。

１号溝状遺構（第73図）

調査区東側Ｉ－３グリッドで検出。東側へ延びていくものと思われる。巾1.5ｍ、深さは15cmである。覆土は単層で遺物は出土していない。

２号溝状遺構（第73図、図版16－４）

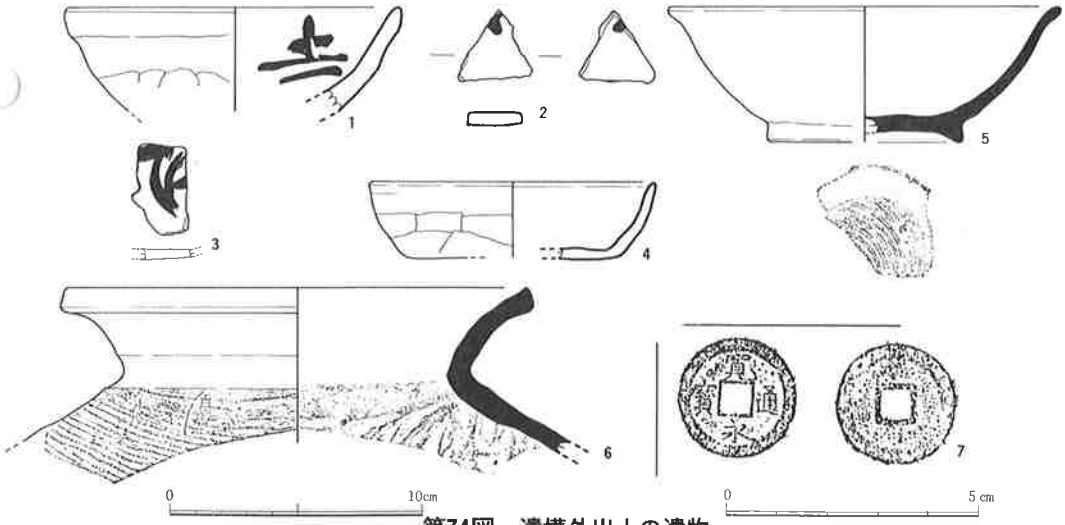
調査区東側で検出された。巾２ｍ前後、長さ32ｍ、深さは最大で50cm。

7　遺物外出土の遺物（第74図、図版21・22、表32）

本遺跡で検出された遺構外の遺物は少量で、その殆どが撹乱等からの出土であり、時期的にも住居跡と同時期のものが多い。

表32　遺構外出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土師坏	器高 (4.1) 口径13.0 底径 －	体部内湾して立ち上がり、口縁部直立ぎみにある。	外面体部下端ヘラ削り。	砂粒・白色鉱物を含む。	茶褐色	酸化	内面体部正位墨書「寺」
2	土師坏		底部片。	外面ヘラ削り。 内面ナデ。	白色鉱物を少量含む。	褐色	酸化	M－14グリッド 内外面墨痕
3	土師坏		底部の破片。	外面底部ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	褐色	酸化	外面底部墨書「不明」表採
4	土師坏		平底。体部内湾して立ち上がる。	外面底部及び体部下端ヘラ削り。 内面ナデ。	緻密	茶褐色	酸化	G－０グリッド
5	須恵高台付椀	器高 5.4 口径15.5 底径 7.6	高台短かく「ハ」の字状に開く。体部内湾して立ち上がり、口縁部外傾する。	ロクロ成形。底部回転糸切り後付高台、ナデ。	白色鉱物を含む。	灰褐色	還元	J－3グリッド
6	須恵甕	器高 (6.1) 口径18.2 底径 －	口縁部強く「く」の字状に外反する。	ロクロ成形。外面肩部平行叩き目。内面あて具痕	白色鉱物を少量含む。	灰色	還元	M－０グリッド
7	古銭	径 2.4	寛永通宝					M－０グリッド



第74図　遺構外出土の遺物

8　墨書土器・線刻紡錘車について（図版21、表33）

出土した墨書土器は18点、線刻がある紡錘車は２点である。このうち同一土器に同一文字が書かれているものが５例ある。線刻紡錘車は本遺跡と近接する大久保遺跡（注1）で「大田部□岳子」と記されたものが出土している。

墨書土器・線刻紡錘車については平川南氏に御教示いただき、ここではそれを以下に一覧表とした。

表33　墨書土器・線刻紡錘車一覧表

墨書土器

No.	住居跡番号	遺物番号	器種・器形	墨書部位	釈　　文
1	2号住	6	須恵　坏	体部外面	不明
2	3号住	1	土師　坏	体部外面横位	「院」
				体部内面横位	「院」
3	3号住	3	土師　坏	体部内面横位	「院」ヵ
4	3号住	8	須恵　坏	体部内面正位	「院」
5	3号住	9	須恵　坏	体部外面	不明
6	3号住	10	土師　坏	体部内面	「院」
7	3号住	11	土師　坏	体部外面	不明
8	4号住	6	土師　坏	体部内面	不明
9	7号住	2	土師　坏	体部外面横位	不明
10	12号住	2	土師　坏	底部外面	「千」
11	14号住	3	須恵　坏	底部外面	「車」
				底部内面	「車」
12	14号住	4	須恵　坏	底部外面	不明
13	14号住	7	土師内黒坏	体部内面	「千」
				底部外面	「千」
14	20号住	16	土師　坏	底部外面	記号「ゟ」
				底部内面	同じ記号ヵ
15	20号住	17	土師　坏	底部外面	「前酒」
				底部内面	「前酒」
16	グリッド	1	土師　坏	体部内面正位	「寺」ヵ
17	グリッド	2	土師　坏	底部内面	不明
				底部外面	不明
18	グリッド	3	土師　坏	体部内面	判読不明

特徴　○１つの土器に同じ文字を２ヶ所に記す
○内面に記すものが目立つ
○体部外面に文字を記す例は比較的少ない

線刻紡錘車

No.	住居跡番号	遺物番号	石の種類	線刻部位	釈　　文
1	20号住	18	滑石	使用面上面	「下」
2	20号住	19	滑石	側面	「□□名代□□去勞女」（こせめ） 石ヵ　(物)　石　(勞) （※人名の連記の可能性あり）

注１．平田貴正・折原洋一　「昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概要」群馬県教育委員会1985

9　銅印について（表34）

(1)　荒子小学校校庭Ⅱ遺跡出土銅印の蛍光X線分析結果

国立歴史民俗博物館情報資料研究部　永嶋　正春

1　はじめに

標記の資料について非破壊的手法による材質分析を実施したので、ここにその結果を報告する。分析には、歴博に設置している大型試料用波長分散型蛍光X線分析装置並びに文化財用X線回析装置を使用したが、それらの詳細についてはここでは省略する。

なお銅印の印面のごく一部には赤色が認められたため、押印時の印肉素材の可能性をも併せて検討した。

2　結　　果

蛍光X線分析により検出された元素は次のようなものである。

銅(Cu)　ヒ素(As)　銀(Ag)　鉄(Fe)　チタン(Ti)　鉛(Pb)　ビスマス(Bi)　アンチモン(Sb)　金(Au)　カルシウム(Ca)　ケイ素(Si)　カリウム(K)　アルミニウム(Al)　イオウ(S)

それぞれの元素のピーク強度で言えば、銅は非常に強く、ヒ素は銅に次いで中程度に強く、銀、チタン、鉛、カルシウム、ケイ素、カリウムは弱く、ビスマス、アンチモン、アルミニウム、イオウは更に弱いものの確実に検出される。金はきわめて微弱ではあるが、一応確認できるものと考える。鉄は印面部の分析では銅に次いで大きなピークを示すものの、その他の部位では銀と同じ程の強度に低下している。

これらは、分析の方法上、資料のごく表面部分についての分析結果であり、また元素の存在量を厳密に定量的に扱うことはできないが、おおよそ銅印の素材については把握できるものと考える。すなわち、銅印はヒ素を若干量（恐らく10%をある程度下回る量であろう）含む青銅で、その中には不純物として銀、鉛、ビスマス、アンチモンなどを含んでいる。鉄やチタン、カルシウムなどは、銅印本体以外に土汚れなどからも検出されることが期待でき、従ってこれらの元素によって本体素材を特徴づけることは困難である。

印面に見られる赤色であるが、上記の元素内容から、まず朱（赤色硫化水銀）であることが否定される。また赤色部を中心としたX線回析データについて検討した結果、印肉顔料と想定される３種の赤色顔料即ち朱、べんがら（赤色酸化鉄）、鉛丹（四三酸化鉛）のいずれのピークも見い出し得なかった。顕微鏡による当該部の観察では、赤色顔料の付着と考えるよりはむしろ本体の腐食生成物と見なした方が自然な状況であった。以上のことから現時点に於いては、印面に認められる赤色物は一酸化銅（Cu^2O）と判断する。X線回析ピークとしては、これに該当するものが確認できないが、これは結晶性が悪いためと考えたい。なおこれらの事実関係については、機会を改めて再確認したいものと考えている。

(2) 群馬県内出土銅印

本遺跡から銅印が１点出土した。群馬県内で既に発見された古代の銅印は知られているだけでも７点で、本遺跡出土のものは８例目となる。また、本遺跡の出土状況は他例と比べ、所属時期、出土場所が明確であり、この点でこの印章は本遺跡のみならず、平安時代前半の荒砥地域一帯の性格を特色づける遺物である可能性が考えられる。

印章は木内武男氏に鑑定いただき、玉稿を賜った。

「蠟型の印面に直接逆字に彫った蠟型鋳造」による古銅印の一例である。

全体の形状、鈕形など、またとくに印文の素朴なところに却って大和古印としての滋味掬すべきものがある。

なお、印面の方3.0cmは当時の１寸に相当し貞観格の「私印は１寸５分を限りとなす」の條文により私印と認められる。印文は姓名のいずれか１字を意味しているものと考えられる。

群馬県内出土銅印については前沢和之氏に御教示いただき、ここではそれを以下に一覧表とした。

表34　群馬県内出土銅印一覧表

印　文	出　土　場　所	規模と形状	備　考
『物部私印』	高崎市矢中村東遺跡 (注1)	印面3.7cm四方、全高4.2cm 菩鈕有孔	朱色の付着物残存。 平安時代初期
『池 長私印』 山	利根郡利根村大字高戸字小沢 (注2)	印面4.0cm四方 菩鶏頭鈕有孔	鈕が欠損 平安時代
『延別 緑 印』	藤岡市中栗須	印面4.3cm×4.2cm、 現高2.4cm 弧紐有孔	鈕孔が四角形 平安時代
『雄玉大神』	安中市板鼻町板鼻社廃址 (注3)	印面5.2cm四方、全高5.2cm 菩鈕有孔	平安時代
『朝』	利根郡月夜野町藪田遺跡 (注4)	印面2.6cm×2.55cm、 全高3.1cm 菩鈕有孔	朱色の付着物残存 平安時代
『百』	富岡市宇田字恵下原(採集)	印面2.4cm四方、全高2.6cm 菩鶏頭鈕有孔	平安時代
『酒』	前橋市総社町山王廃寺跡 (注5)	印面2.8cm四方、全高3.0cm 菩鈕有孔、鈕基部に２本の玉縁	平安時代前期

注１．『矢中遺跡(vi)矢中村東遺跡』高崎市教育委員会
注２．富田　篤・水田　稔『利根村で発見された古代「銅印」』『群馬文化』1984
注３．木内武男『印章』柏書房　1983
注４．『藪田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
注５．『山王廃寺跡第５次発掘調査報告書』前橋市教育委員会　1979

Ⅵ まとめ

本遺跡では住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構、道路状遺構が検出された。この中で溝状遺構、道路状遺構は時代不明であるが、他の遺構は奈良・平安時代に包括されるものと思われる。ここでは住居跡出土の遺物を中心に集落の変遷をさぐってみる。

1　住居跡出土の土器について（第75・76・77図）

第Ⅰ期　21・25号住居跡

土師器坏・甕、須恵器坏が検出されている。土師器坏は丸底で、口縁部に弱い稜を持ち、直立して立ち上がるものと、内湾して立ち上がり、そのまま直立するものが認められる。甕は器肉が薄く、口縁部が「く」の字状に強く外反する。須恵器坏は器高が低く、体部は直線的に外傾する。底部は回転ヘラ切り後、周縁部をヘラ削り調整する。

第Ⅱ期　6・7・9・10・12・17・23号住居跡

土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・硯等が検出されている。土師器坏は平底に近くなり、口縁部は外傾ぎみになる。甕は口縁部の外反はやや弱まり、最大径は胴上半部にある。須恵器坏は第Ⅰ期よりやや器高が高くなり、体部は直線的に外傾する。底部は回転糸切り後、周縁部を回転ヘラ削りするものと、無調整のものがある。蓋は偏平なつまみを持ち端部は屈曲する。他に円面硯の破片が出土している。

第Ⅲ期　18・20・26号住居跡

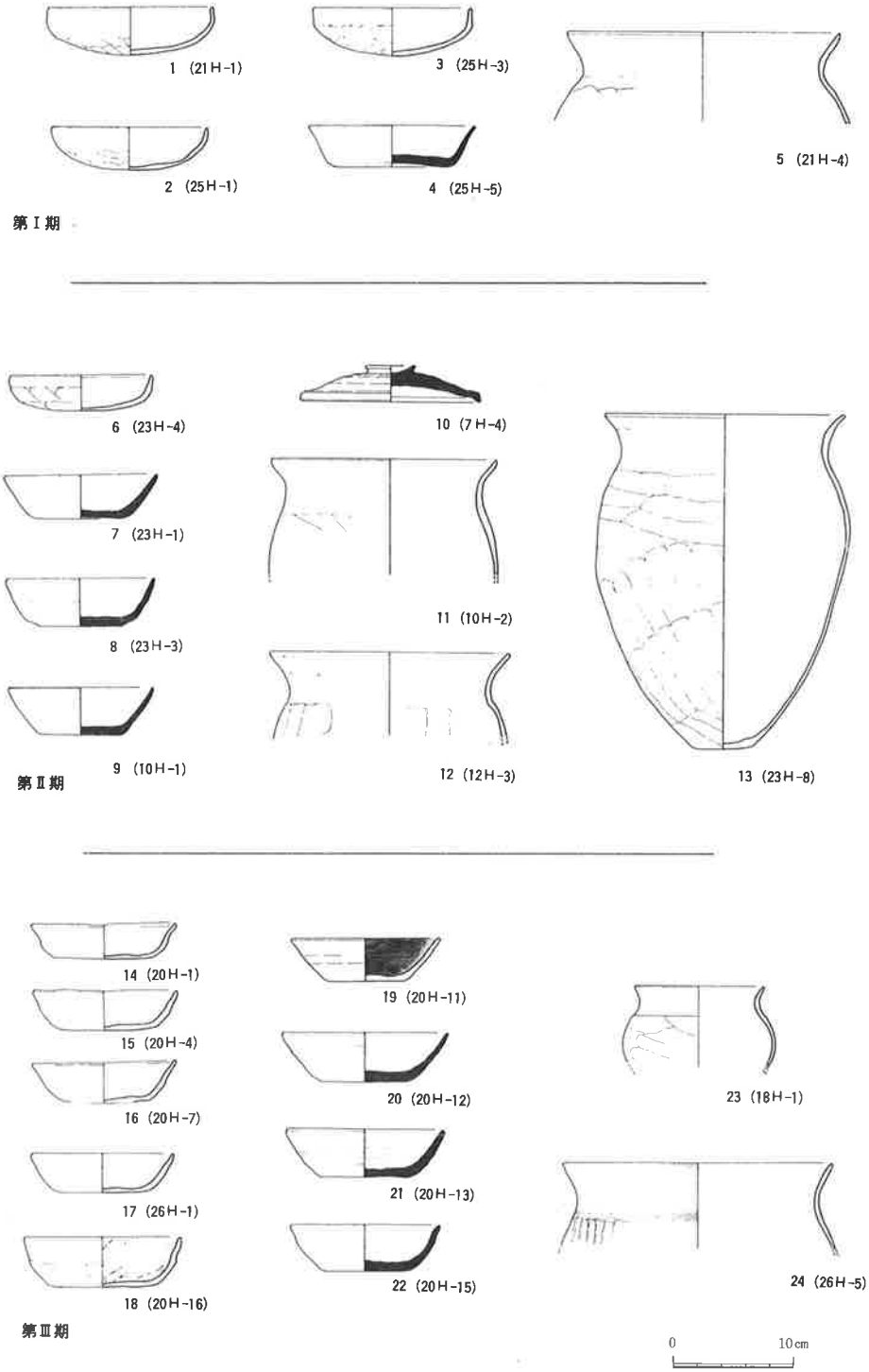
土師器坏・甕、須恵器坏・高台付椀等が検出されている。土師器坏はほぼ平底で器肉が薄く体部は直線的に外傾する。甕は口縁部が「コ」の字状になりつつある。又小形の台付甕と思われるものもあるが共に器肉は薄い。須恵器坏は体部が直線的に外傾するものと、内湾ぎみに立ち上がるものが認められる。底部は回転糸切り無調整である。椀は高台部が短かく「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り後、高台を取り付け、周縁部を調整している。

第Ⅳ期　4・5・13・19号住居跡

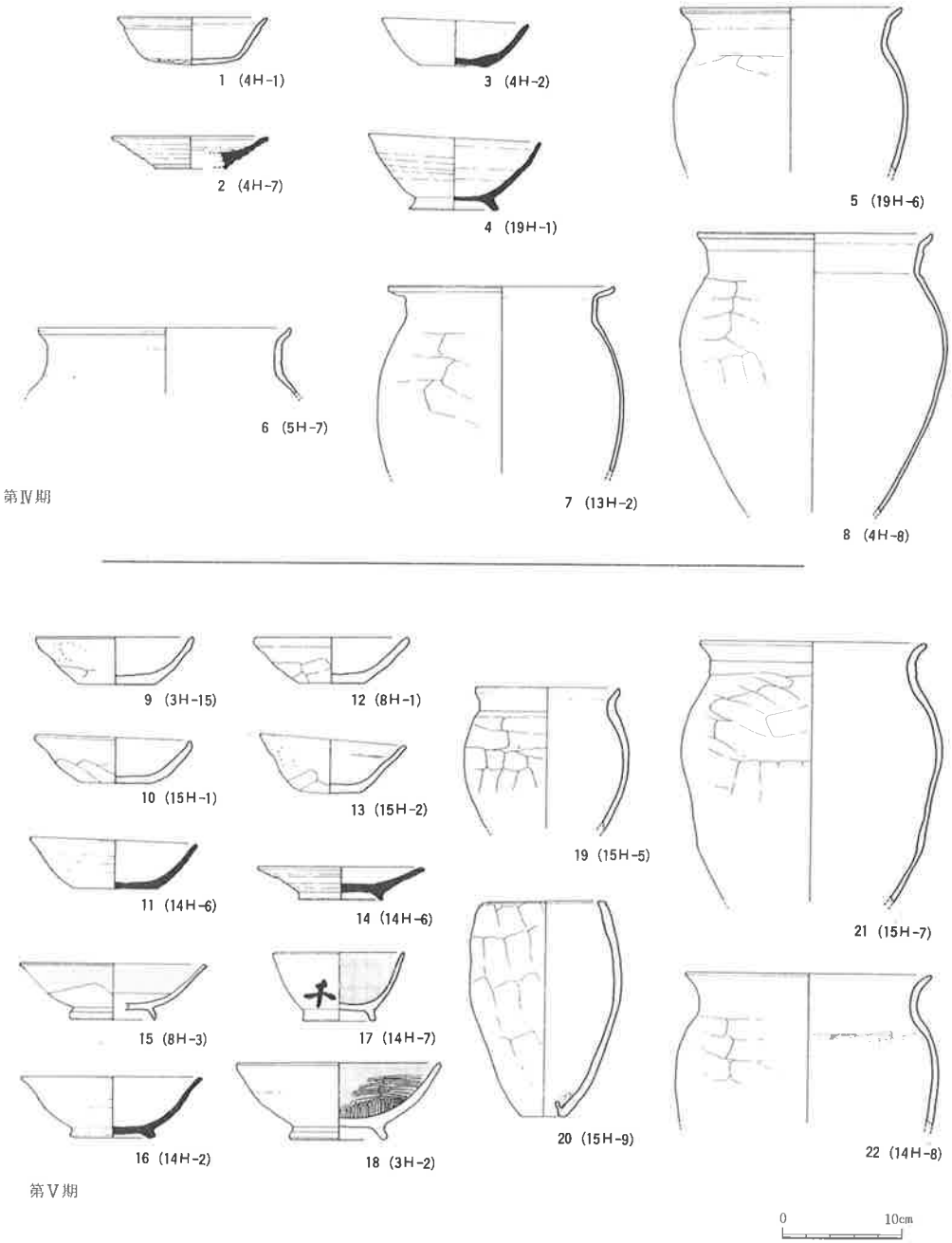
土師器坏・甕、須恵器坏、高台付椀・皿等が検出されている。土師器坏は平底で器肉がやや厚くなり、体部は直線的に外傾する。甕は「コ」の字状口縁である。須恵器坏は体部は直線的に外傾し、底部は回転糸切り無調整である。椀は高台付部は「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り後、高台を取り付け周縁部を調整している。皿は底部付近の器肉が厚い。

第Ⅴ期　3・8・11・14・15号住居跡

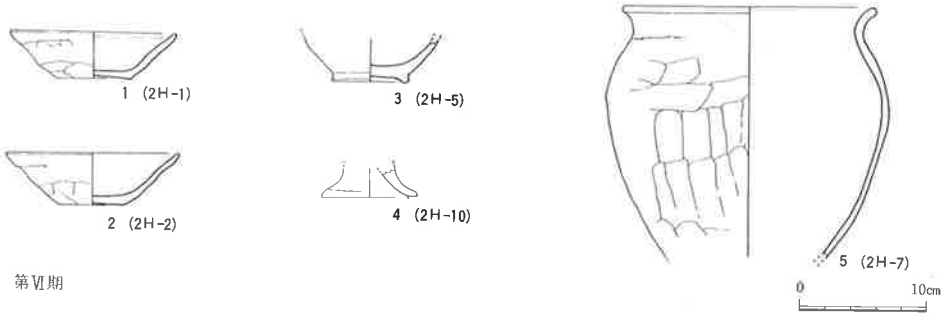
土師器坏・高台付碗・甕・甑、須恵器坏・高台付椀・皿、灰釉陶器碗・皿等が検出されている。土師器坏は平底で器肉が厚くなる。体部は直線的に外傾する。高台付碗は内黒処理をほどこしたものが多く、高台部が「ハ」の字状に開くものと、直立ぎみに立ち、器高が高くなるものがある。甕は大形のものと小形のものがあり、口縁部は「コ」の字状を呈し、器肉厚くなる。須恵器坏は体部が直線的に外傾し、底部は回転糸切り無調整である。高台付椀は高台が太く短かく、高台取り付け後の調整は雑である。灰釉陶器椀は高台部は三日月状を呈し、刷毛塗りである。他に3号住居跡から銅印が出土している。



第75図　住居跡出土土器変遷図　(1)



第76図　住居跡出土土器変遷図　(2)



第77図　住居跡出土土器変遷図 (3)

第Ⅵ期　2号住居跡

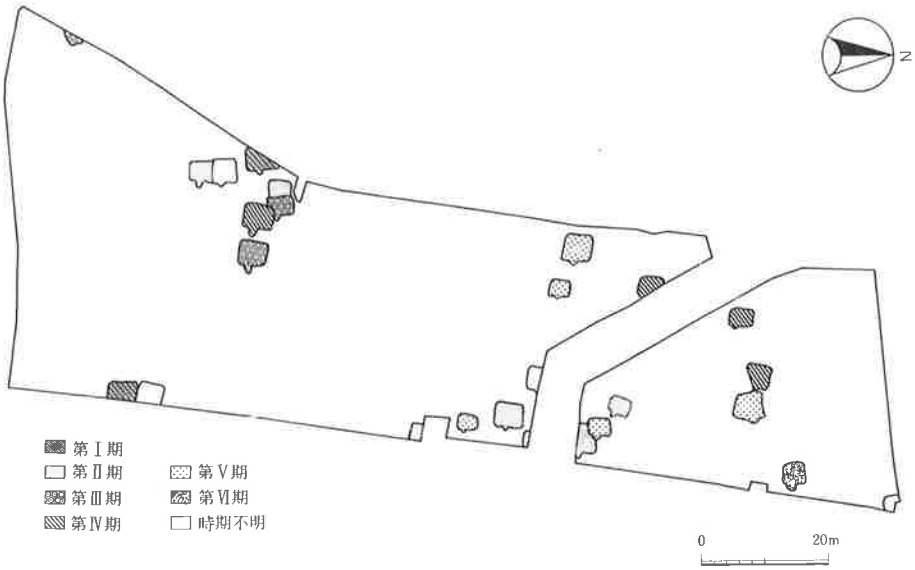
土師器坏・甕、須恵器椀等が検出されている。土師器坏は底部が「砂底状」を呈し、体部は直線的に外傾する。甕は器肉が厚く、口縁部は短く外反する。

以上概要したが、実年代は第Ⅴ期の灰釉陶器椀が光ヶ丘1号窯式に比定でき、9世紀末葉前後と考えられる。他の時期であるが、土師器甕の漸移的変化から第Ⅰ期を8世紀中葉から後半代に、第Ⅳ期を10世紀初頭から前半と考えたい。

2　集落の変遷について（第78図）

本遺跡の周辺には勢多郡衙と推定される上西原遺跡（注1）があり、他に大久保遺跡（注2）や中鶴谷遺跡（注3）など奈良時代から平安時代にかけての集落跡が調査されている。本遺跡検出の住居跡もこれらの集落の一端を担うものと考えられる。カマドが検出された住居跡のうち、3号住居跡のみが北側に位置し、他はすべて東側に位置する。

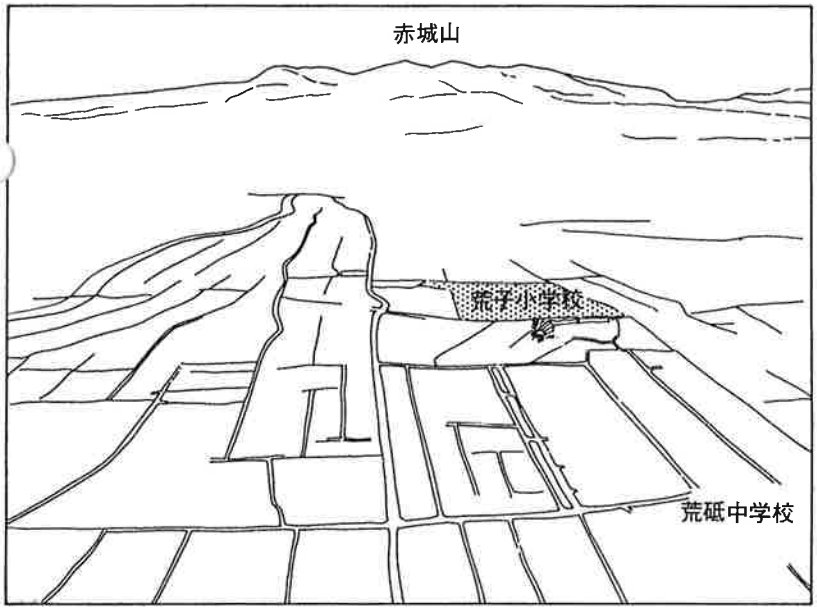
（注1）松田猛ほか「上西原・向原・谷津」群馬県教育委員会　1986（注2）72P（注1）に同じ。（注3）柳久保遺跡群Ⅵ　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1988



第78図　集落変遷図

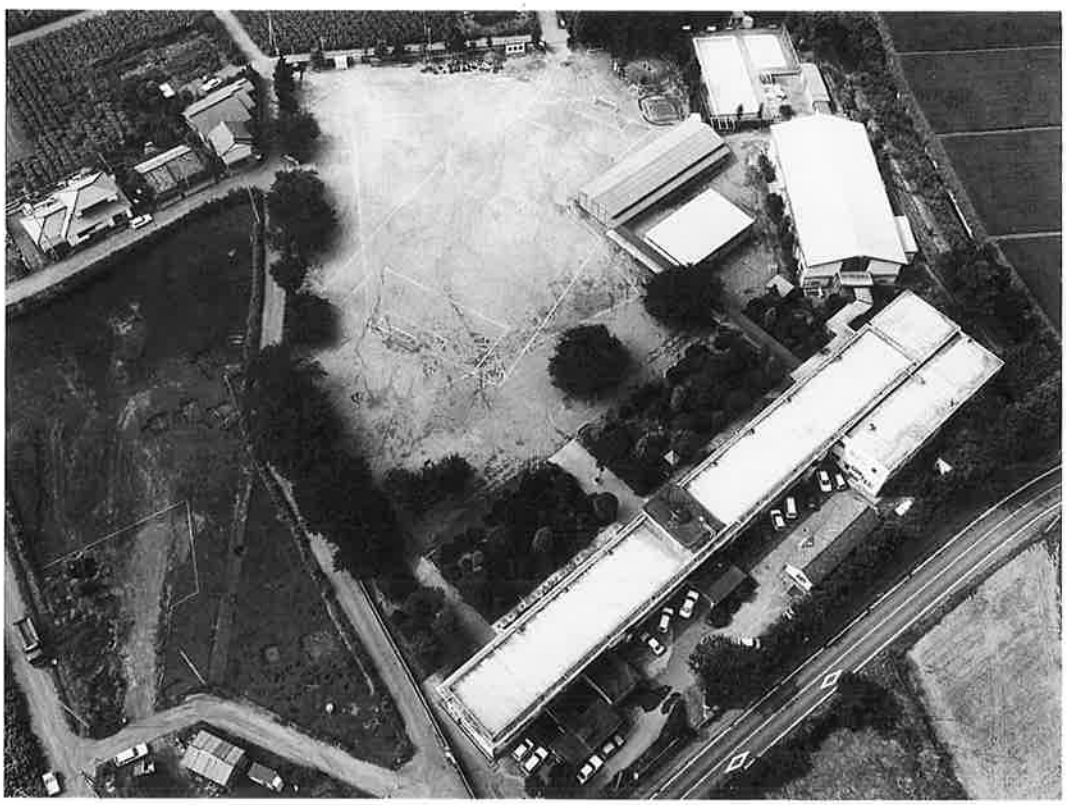
写　真　図　版

遺跡遠景（赤城山を望む）



荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡

図版 2



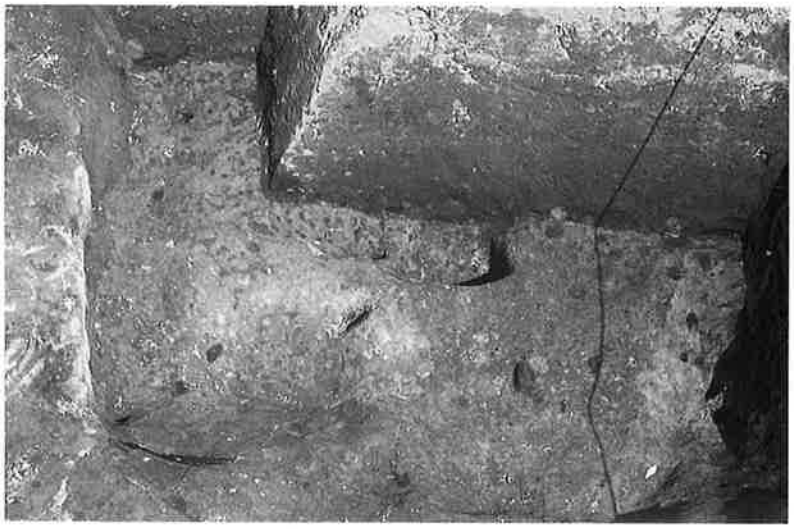
1．荒子小学校校庭Ⅲ遺跡 空中撮影（左がⅢ遺跡、右が荒子小学校）

2．荒子小学校校庭Ⅲ遺跡全景（北から望む）

1．荒子小学校校庭Ⅲ遺跡北側（南から望む）

2．荒子小学校校庭Ⅱ遺跡全景（南から望む）

図版 4



1．1号住居跡

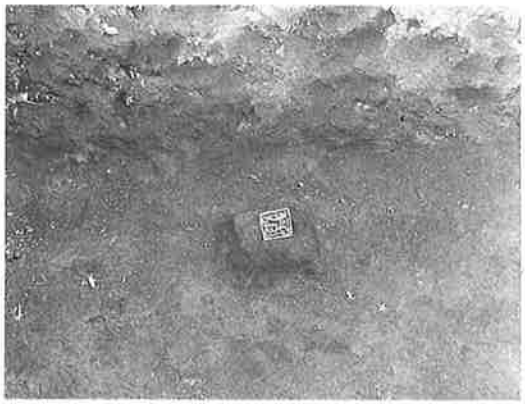
2．2号住居跡

3．2号住居跡カマド

1．3号住居跡

2．3号住居跡出土銅印(1)

3．3号住居跡出土銅印(2)

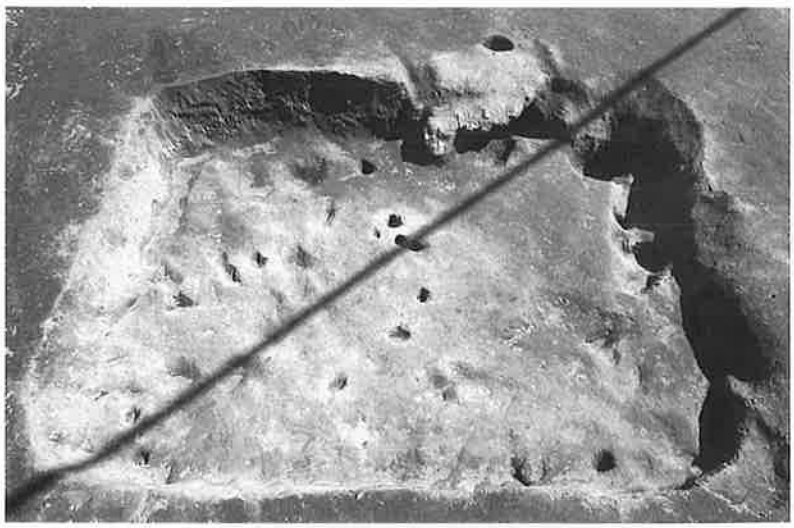


4．3号住居跡出土銅印(3)

5．3号住居跡貯蔵穴

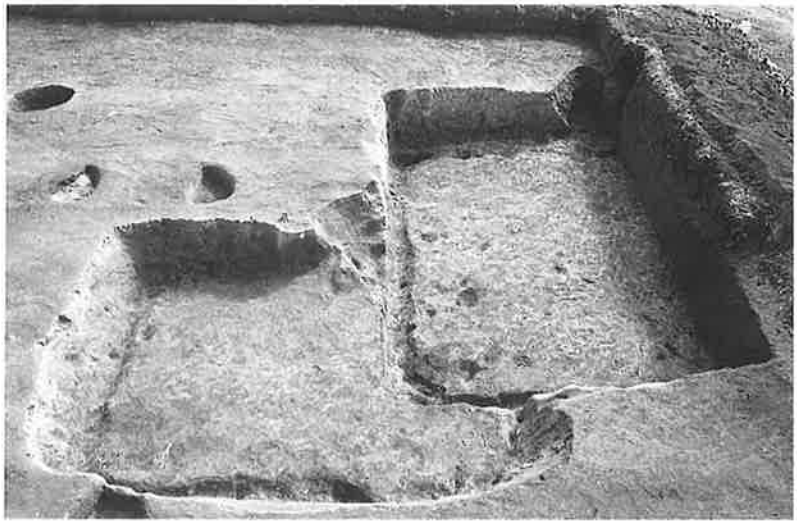
図版 6

1．4号住居跡



2．5号住居跡

3．6号住居跡



1. 右上　7号住居跡
　左下　8号住居跡

2. 9号住居跡

3. 10号住居跡

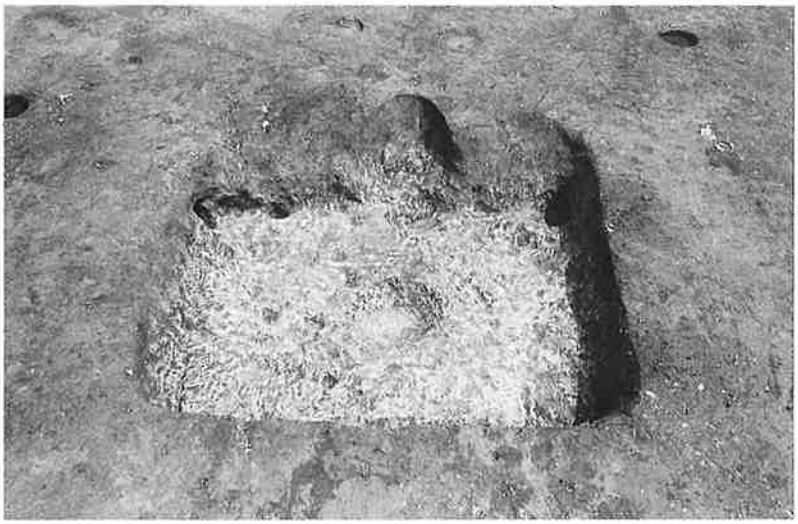
図版 8

1. 11号住居跡

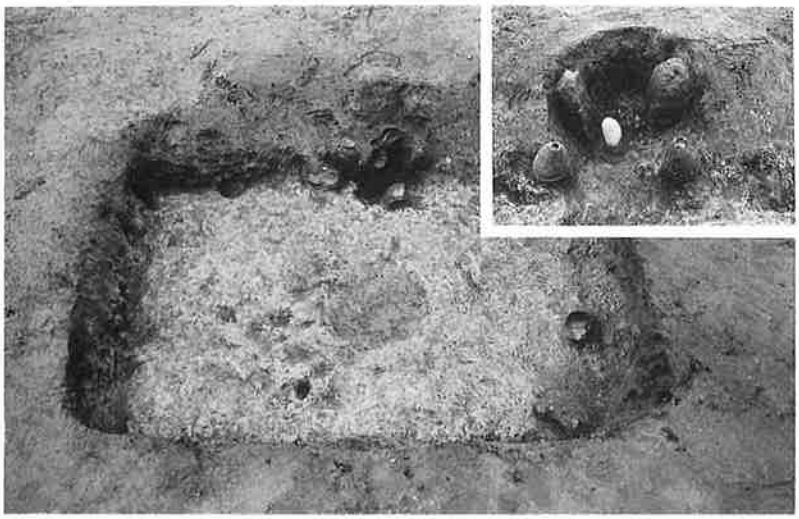
2. 12号住居跡

3. 13号住居跡

1．14号住居跡



2．15号住居跡(1)



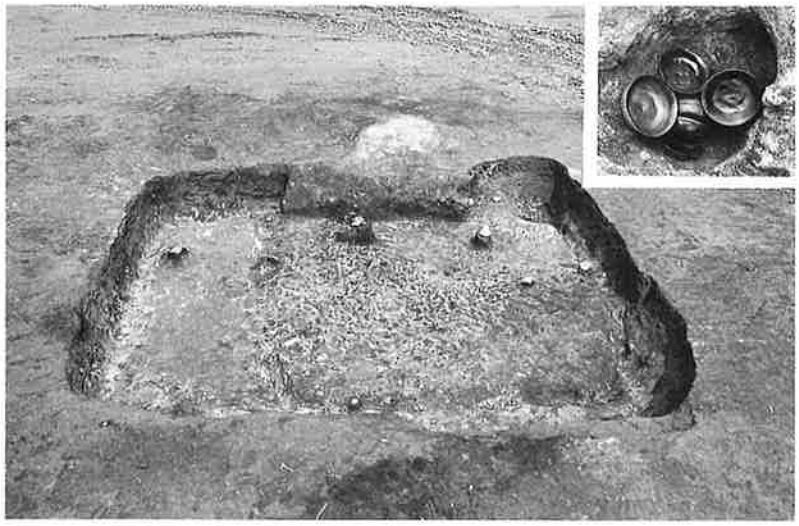
3．15号住居跡(2)

図版10

1．16号住居跡

2．左下 17号住居跡
左上 18号住居跡

3．19号住居跡



1．20号住居跡

2．21号住居跡

3．22号住居跡

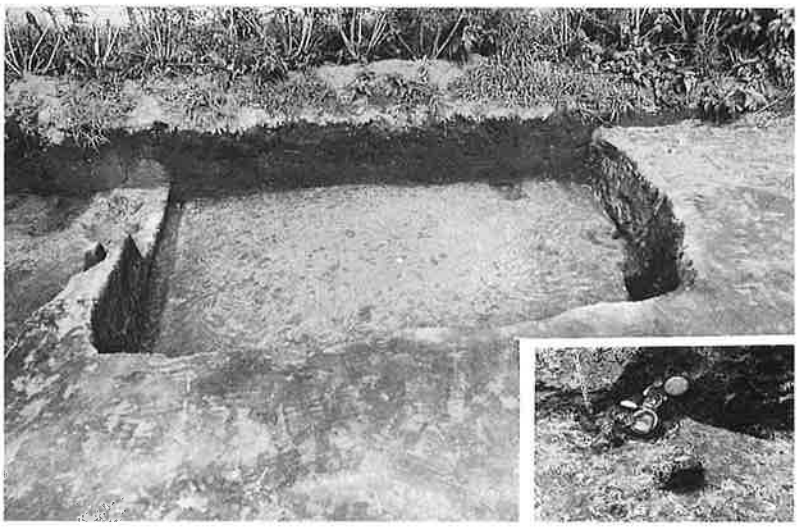
図版12

1．23号住居跡

2．23号住居跡出土遺物(1)

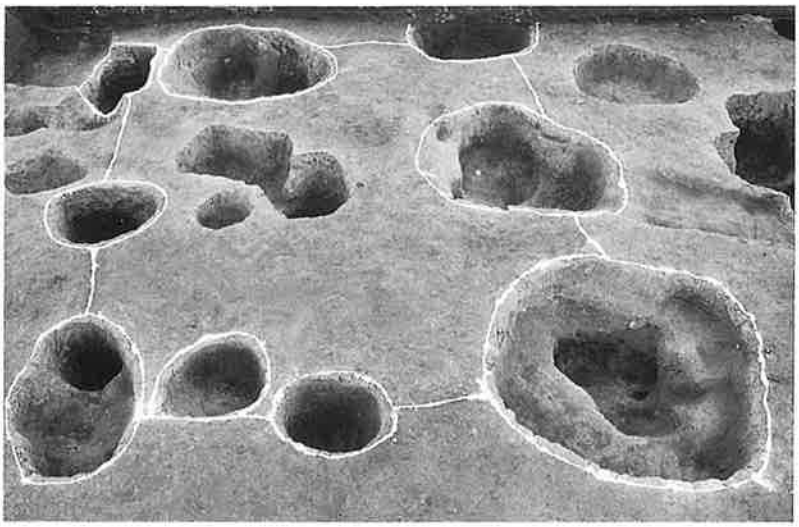
3．23号住居跡出土遺物(2)

4．24号住居跡



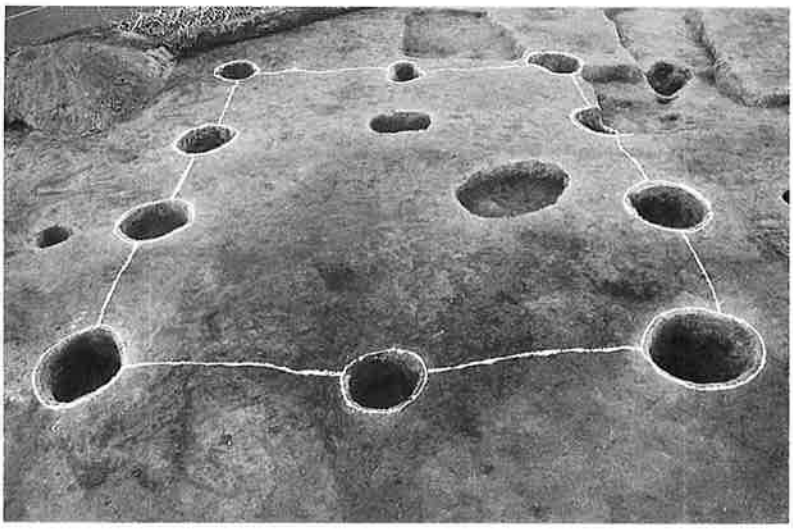
1．25号住居跡

2．26号住居跡

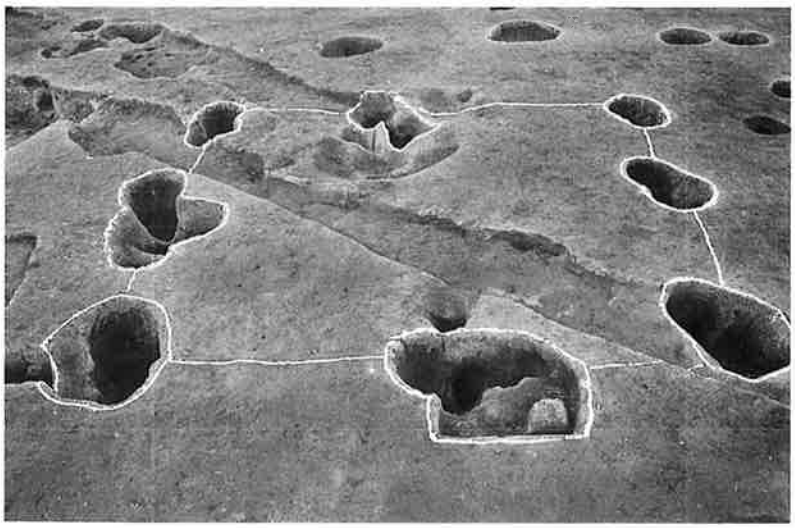


1号掘立柱建物跡

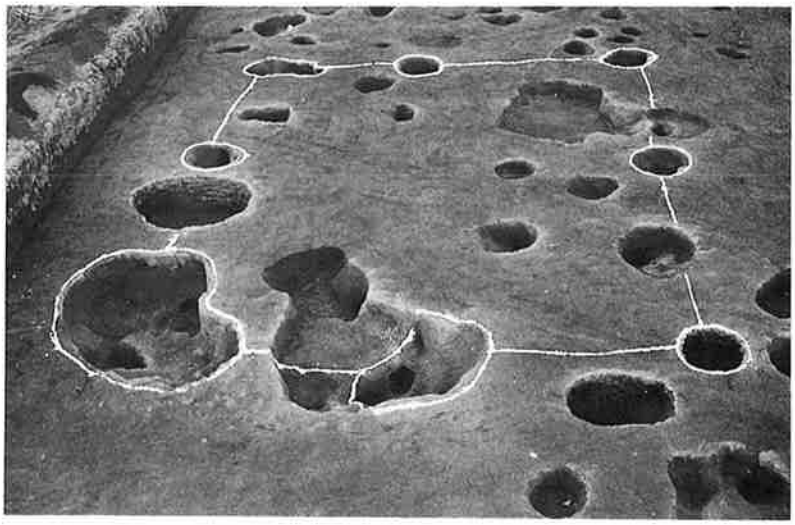
図版14



1．2号掘立柱建物跡



2．3号掘立柱建物跡



3．4号掘立柱建物跡

1．14号土坑

2．22号土坑

3．24号土坑

4．27号土坑

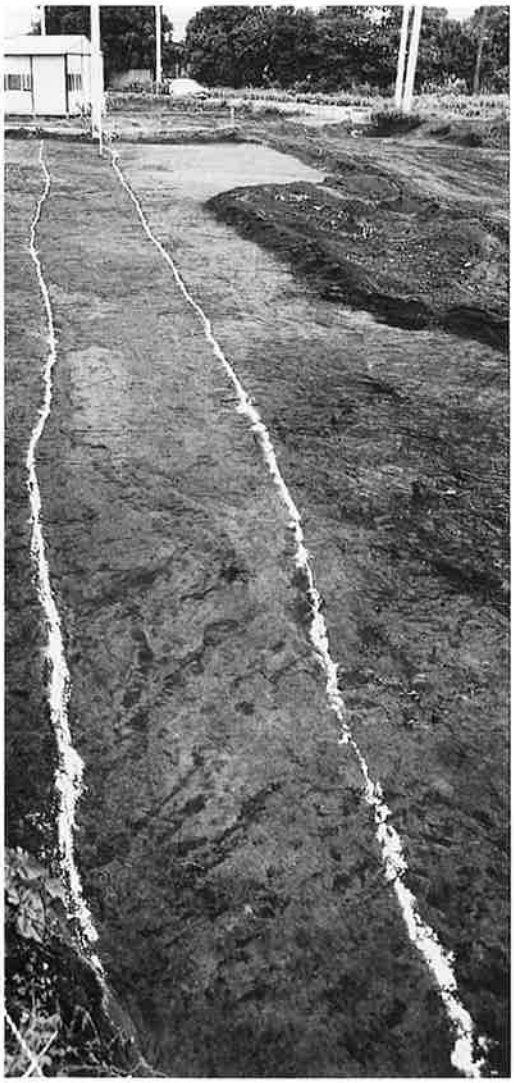
5．1号井戸

6．2号井戸

図版16

1．3号井戸

2．1号道路状遺構北側



3．1号道路状遺構南側

4．2号溝状遺構

2 H-1

2 H-2

2 H-3

2 H-4

2 H-5

2 H-7

2 H-8

2 H-9

3 H-1

3 H-21

3 H-3

3 H-10

3 H-12

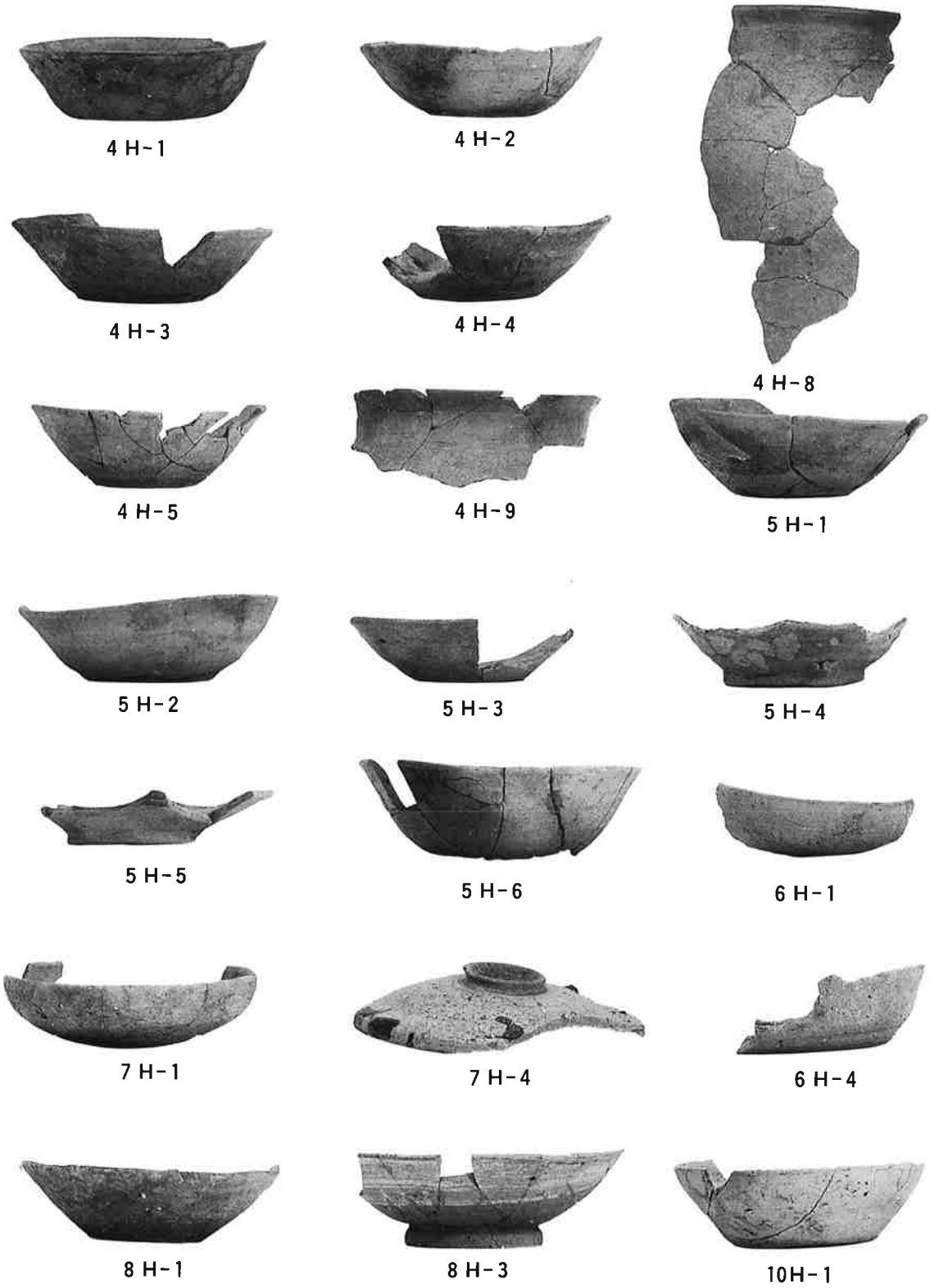
3 H-13

3 H- 14

3 H-16

2・3号住居跡出土遺物

図版18



4・5・6・7・8・10号住居跡出土遺物

13H-2

14H-1

14H-4

14H-2

14H-5

14H-8

14H-3

14H-7

15H-1

15H-2

15H-5

15H-6

15H-7

15H-8

15H-9

18H-1

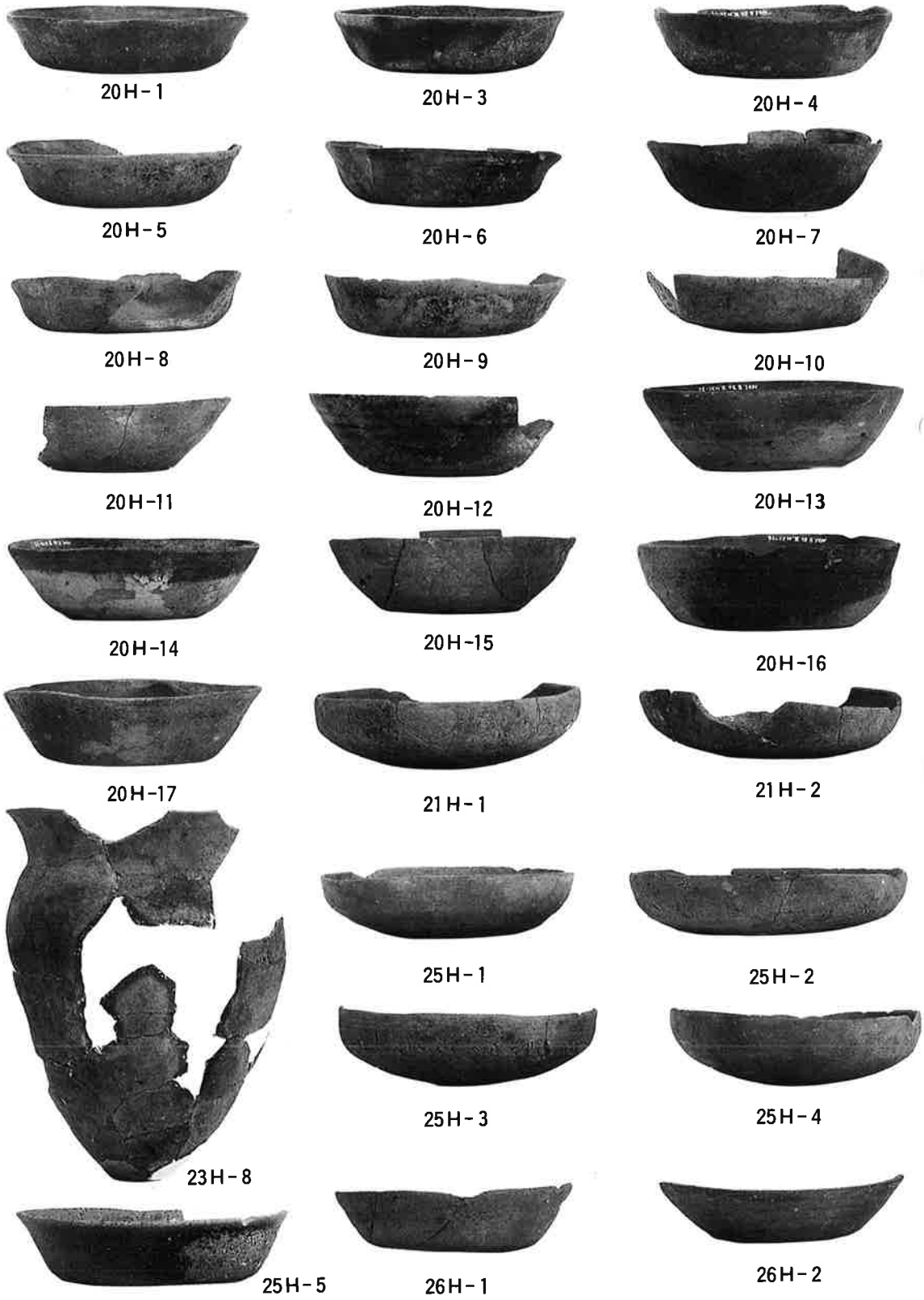
19H-1

19H-2

19H-6

13・14・15・18・19号住居跡出土遺物

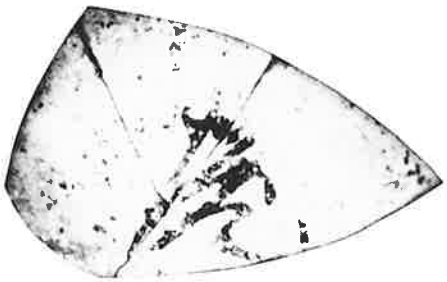
図版20



20・21・23・25・26号住居跡出土遺物

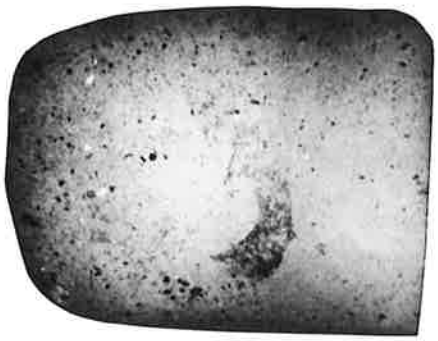
3 H－7（内面）

3 H－7（外面）

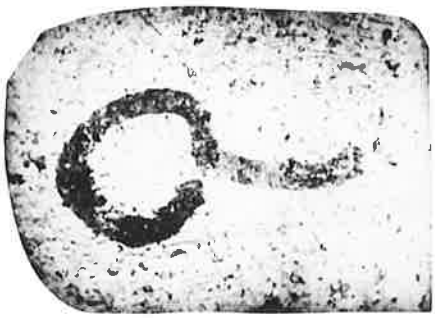


3 H－8（外面）

14H－3（外面）

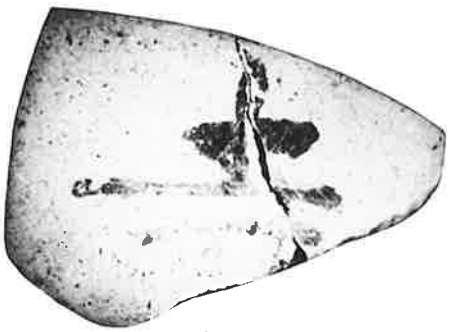


20H－16（内面）



20H－16（外面）

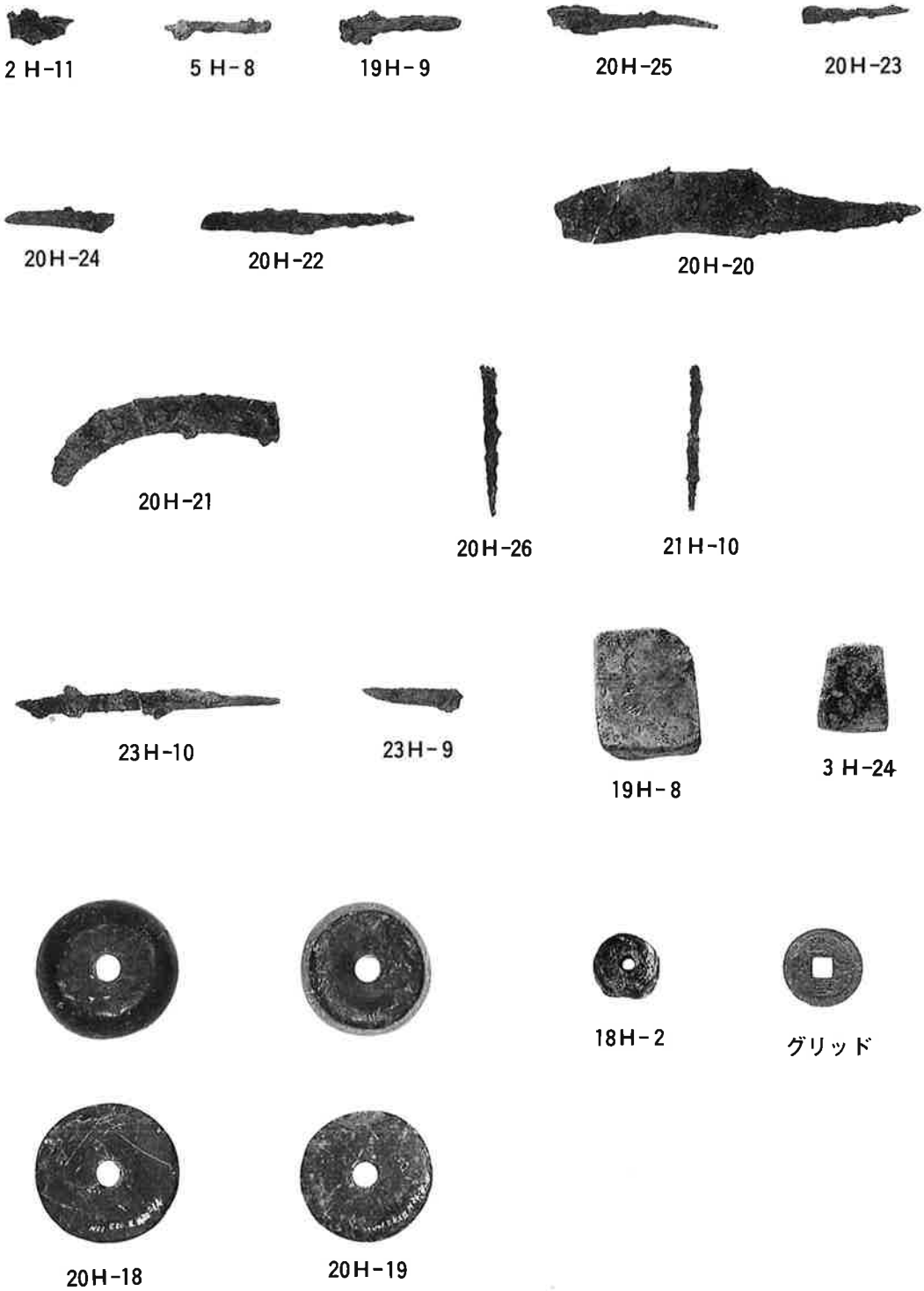
20H－17（外面）



グリッド（外面）

墨書土器

図版22


2 H-11
5 H-8
19H-9
20H-25
20H-23
20H-24
20H-22
20H-20
20H-21
20H-26
21H-10
23H-10
23H-9
19H-8
3 H-24
18H-2
グリッド
20H-18
20H-19

鉄・石製品・古銭

前橋市教育委員会
24.1.25
第
受付

前橋市三俣町二丁目10－2
前橋市教育委員会文化財保護課

荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡

印　刷　平成2年3月20日
発　行　平成2年3月20日

編　集　山武考古学研究所
発　行　前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷所　㈱文化総合企画
TEL 0476-24-1563

1
2